

恒川遺跡群

あら 新 や 屋 しき 敷 い 遺 せき 跡

1998年 3月

長野県飯田市教育委員会

恒川遺跡群

あら 新 や 屋 しき 敷 い 遺 せき 跡

1998年 3月

長野県飯田市教育委員会

序

一般国道153号座光寺バイパス両側の開発はめざましいものがあります。バイパス建設着工前の発掘調査で、「伊那郡衙」を想定できる遺構・遺物が多数発見されました。そのことをうけて、文化庁の補助を頂き範囲確認調査を昭和57年度から続けており、様々な方法で郡衙の確証を得るべく調査を続行しております。発掘調査・官衙（郡衙）的遺構分布図作成・各関係者による検討会が行なわれ、ますます重要度が増加していましたところ、平成6年度の範囲確認調査で「郡衙」の正倉が発見されました。それにより「伊那郡衙」所在がこの恒川遺跡群と確認できました。この事実から恒川遺跡群内の郡衙遺構の配置を推測してみると、高岡古墳の天竜川側（南東の部分）に正倉及び正庁の郡庁域があり他の付属施設が恒川清水を中心にして分布していたと思われます。

今回開発の届けがなされた場所は、郡庁域の南東端部にかかる場所であり、重要遺構・遺物の発見が予想される位置です。そこで工事実施に先立って緊急発掘調査を実施して、記録保存を図ることになりました。

調査結果は本文で述べられているとおりありますが、調査で得られました様々な知見は、これから地域の歴史を知っていく上で貴重な資料となると確信しています。

最後になりましたが、調査に当たって多大な御理解と御協力をいただいた、(有)セブン及び勝又建設株式会社と隣接地の方々、現地作業及び整理作業に従事された作業協力員の皆さん、ほか関係各位に深く感謝を申しあげますとともに、ここに発掘調査報告書が刊行できることに対して厚くお礼申し上げます。

平成10年3月

飯田市教育委員会

教育長 小林 恭之助

例　　言

1. 本書は、(有)セブンによる貸店舗建設に伴って実施された、飯田市座光寺「新屋敷遺跡」の緊急発掘調査報告書である。
2. 調査は、(有)セブンからの依託を受け、飯田市教育委員会が実施した。
3. 調査は1989・1996年に発掘調査を行ない、1997年度に報告書作成作業をおこなった。
4. 調査実施に当たり、基準点測量・空中写真撮影を(株)ジャステックに委託した。
5. 発掘作業・整理作業にあたり、遺跡略号としてARYを一貫して用いた。なお1989年は地番の1472 1996年は1471を略号に続けて付した。
6. 本報告書の記載順は住居址を優先した。遺構はすべて表にし遺構図は挿図とし、遺物図及び写真図版は本文末に一括して遺構番号順に掲載した。
7. 遺構番号は、新屋敷遺跡全体の一連番号をつけた。その為に遺構番号が継続していない。ARY 4 741 のSB176は欠番である。
8. 本書に掲載した図面・遺物の実測は佐々木・伊藤が行なった。なお、整理作業実施にあたり整理作業員が補佐した。
9. 本書は佐々木嘉和・伊藤尚志が執筆・編集をおこなった。
10. 土層図・断面図・エレベーションの水平線に付した数字は、標高をmで表わしたものである。
11. 土器実測図の報告書記載は住居址番号順であり、断面図白抜きは土師器、黒塗りは須恵器。陶器であり、また石器実測図の外側で実線は使用痕と擦痕・磨き、破線は敲打痕を表わす。
12. 本調査に関する出土品及び諸記録は、飯田市教育委員会が管理し、飯田市上川路飯田市考古資料館に保管している。

本 文 目 次

| | |
|--|----|
| 序 | |
| 例 言 | |
| 目 次 | |
| I 経 過 | |
| 1. 調査に至るまでの経過 | 1 |
| 2. 調査の経過 | 1 |
| 3. 調査組織 | 1 |
| II 遺跡の環境 | |
| 1. 自然環境 | 6 |
| 2. 歴史環境 | 6 |
| III 調査結果 | 10 |
| 1. 土層堆積状態 | 10 |
| 2. 遺構 | |
| 1. 住居址 | |
| 1) 弥生時代 | 10 |
| ① 75号住居址 ② 88号住居址 ③ 175号住居址 ④ 177号住居址 ⑤ 178号住居址 ⑥ 179号住居址 | |
| 2) 古墳時代 | 15 |
| ① 71号住居址 ② 72号住居址 ③ 73号住居址 ④ 76号住居址 ⑤ 78号住居址 ⑥ 80号住居址 ⑦ 82号住居址 ⑧ 83号住居址 ⑨ 84号住居址 ⑩ 85号住居址 ⑪ 177号住居址 | |
| 3) 奈良・平安時代 | 26 |
| ① 74号住居址 ② 78号住居址 ③ 81号住居址 ④ 87号住居址 | |
| 4) 時期不明 | 29 |
| ① 77号住居址 ② 79号住居址 ③ 86号住居址 | |
| 2. 掘立柱建物址 | 31 |
| ① 建物址24 ② 建物址63 ③ 建物址64 | |

| | |
|-------------------------------|-----|
| 3. 溝 址 | 35 |
| ①溝址35 ②溝址36 ③溝址45 ④溝址46 ⑤溝址47 | |
| 4. 方形周溝墓 | 38 |
| ①方形周溝墓 2 | |
| 5. 土 坑 | 39 |
| ①土坑22 | |
| ②土坑23 | |
| 6. 遺構外出土遺物 | 40 |
| ①縄文時代 | |
| ②弥生時代 | |
| ③古墳時代 | |
| ④奈良・平安時代 | |
| ⑤中世 | |
| ⑥時期不明 | |
| IV まとめ | 42 |
| 報告書抄録 | 109 |

挿 図 目 次

| | |
|----------------------------|----|
| 挿図 1 調査遺跡及び周辺遺跡位置図 | 3 |
| 挿図 2 調査位置及び周辺地図 | 4 |
| 挿図 3 基準メッシュ図区画調査位置 | 5 |
| 挿図 4 調査区遺構全体図 4741番地 | 8 |
| 挿図 5 調査区遺構全体図 4742番地 | 9 |
| 挿図 6 土層堆積状態 | 10 |
| 挿図 7 75号住居址 | 10 |
| 挿図 8 88号住居址 | 11 |
| 挿図 9 175号住居址 | 12 |

| | | | |
|------|-----------|-------|----|
| 挿図10 | 178号住居址 | | 13 |
| 挿図11 | 179号住居址 | | 14 |
| 挿図12 | 71号住居址 | | 15 |
| 挿図13 | 72号住居址 | | 16 |
| 挿図14 | 73号住居址 | | 17 |
| 挿図15 | 76号住居址 | | 18 |
| 挿図16 | 78号住居址 | | 19 |
| 挿図17 | 80・85号住居址 | | 20 |
| 挿図18 | 82号住居址 | | 21 |
| 挿図19 | 83号住居址 | | 22 |
| 挿図20 | 84号住居址 | | 23 |
| 挿図21 | 177号住居址 | | 25 |
| 挿図22 | 74・86号住居址 | | 26 |
| 挿図23 | 81号住居址 | | 27 |
| 挿図24 | 87号住居址 | | 28 |
| 挿図25 | 77・79号住居址 | | 29 |
| 挿図26 | 建物址24 | | 32 |
| 挿図27 | 建物址63・64 | | 33 |
| 挿図28 | 溝址35・36 | | 35 |
| 挿図29 | 溝址45 | | 36 |
| 挿図30 | 溝址47 | | 37 |
| 挿図31 | 方形周溝墓2 | | 38 |
| 挿図32 | 土坑22・23 | | 39 |

図 版 目 次

| | | | |
|------|--------|-------|----|
| 第1図@ | 71号住居址 | | 46 |
| 第2図 | 71号住居址 | | 47 |
| 第3図 | 71号住居址 | | 48 |
| 第4図 | 72号住居址 | | 49 |
| 第5図 | 73号住居址 | | 50 |
| 第6図 | 73号住居址 | | 51 |
| 第7図 | 74号住居址 | | 52 |
| 第8図 | 74号住居址 | | 53 |

| | | |
|------|-------------------------------|----|
| 第9図 | 75・76号住居址 | 54 |
| 第10図 | 76号住居址 | 55 |
| 第11図 | 76号住居址 | 56 |
| 第12図 | 76号住居址 | 57 |
| 第13図 | 76号住居址 | 58 |
| 第14図 | 77・78号住居址 | 59 |
| 第15図 | 78号住居址 | 60 |
| 第16図 | 78号住居址 | 61 |
| 第17図 | 78号住居址 | 62 |
| 第18図 | 78・79・80・81号住居址 | 63 |
| 第19図 | 81号住居址 | 64 |
| 第20図 | 82号住居址 | 65 |
| 第21図 | 82・83号住居址 | 66 |
| 第22図 | 83号住居址 | 67 |
| 第23図 | 84号住居址 | 68 |
| 第24図 | 84・85・87号住居址 | 69 |
| 第25図 | 87号住居址 | 70 |
| 第26図 | 88号住居址 | 71 |
| 第27図 | 175号住居址 | 72 |
| 第28図 | 177号住居址 | 73 |
| 第29図 | 178号住居址 | 74 |
| 第30図 | 178・179号住居址 | 75 |
| 第31図 | 179号住居址 | 76 |
| 第32図 | 179号住居址 | 77 |
| 第33図 | 建物址24・63・64 溝址35・45・47 方形周溝墓2 | 78 |
| 第34図 | 遺構外 | 79 |
| 第35図 | 遺構外 | 80 |
| 第36図 | 遺構外 | 81 |
| 第37図 | 遺構外 | 82 |
| 第38図 | 遺構外 | 83 |

写 真 図 版

| | | |
|------|--------------------------|-----|
| 図版 1 | 4741遺構全体・4742遺構全体・72号住居址 | 86 |
| 図版 2 | 72・74号住居址 | 87 |
| 図版 3 | 76号住居址 | 88 |
| 図版 4 | 78号住居址 | 89 |
| 図版 5 | 82号住居址 | 90 |
| 図版 6 | 84・87号住居址 | 91 |
| 図版 7 | 87・175号住居址 | 92 |
| 図版 8 | 177・178号住居址 | 93 |
| 図版 9 | 179号住居址 | 94 |
| 図版10 | 179号住居址・建物址63 | 95 |
| 図版11 | 建物址64・溝址35 | 96 |
| 図版12 | 71・72・73号住居址 | 97 |
| 図版13 | 73・74号住居址 | 98 |
| 図版14 | 76号住居址 | 99 |
| 図版15 | 76・78号住居址 | 100 |
| 図版16 | 78・80号住居址 | 101 |
| 図版17 | 81・82・84号住居址 | 102 |
| 図版18 | 85・88・175・177号住居址 | 103 |
| 図版19 | 178・179号住居址 | 104 |
| 図版20 | 建物址24・63、遺構外 | 105 |
| 図版21 | 遺構外 | 106 |
| 図版22 | 出土 石器 | 107 |
| 図版23 | スナップ | 108 |

| 経 過

1. 調査に至るまでの経過

昭和52年以来、一般国道153号座光寺バイパス建設に先立つ発掘調査が実施され、多数の官衙的遺構・遺物が確認された。当該遺跡は、従前より古代伊那郡衙と推定されており、昭和57年度以降、国（文化庁）・県の補助を受けて、飯田市教育委員会において範囲確認調査を継続実施し、郡衙址の位置・規模・構成・変遷等諸問題を解明すべく努力しているが、平成7年度の調査で郡衙の一施設である「正倉」が確認された。

またこれと平行して、恒川遺跡群と周辺では、急速に進展する諸開発に先立ち、文化財保護の本旨からすれば次善の策ではあるが、緊急調査を実施し記録保存を図っている。

4742番地は昭和63年に店舗建設計画があり、長野県教育委員会・飯田市教育委員会・地権者でその保護について協議を行い建物建設部分について発掘調査し記録保存を図ることになった。発掘調査後店舗建設計画が中断し、平成8年度に至り新たに2店舗の建築申請がなされ、再度保護協議の結果1棟は昭和63年調査箇所が建設位置であり、もう1棟が本調査部分に建設されることから、改めて発掘調査し記録保存を図ることとなり、4741番地の建設部分450m²について調査実施を決定した。

2. 調査の経過

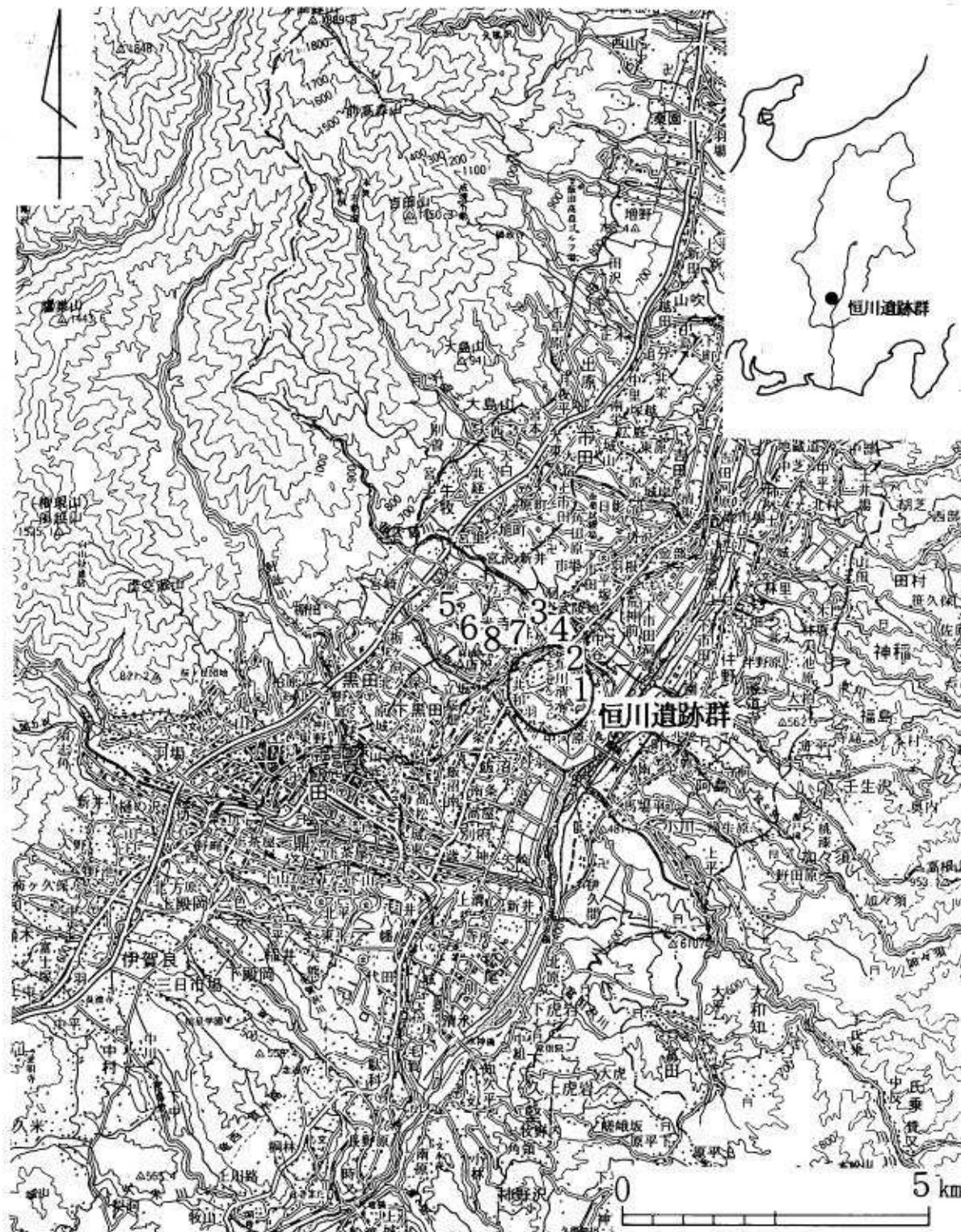
昭和63年度の調査では、店舗建設予定部分の375m²を発掘調査した。重機による表土剥ぎを8月1日（月）から始め、人手による発掘調査を1週間後から始めた。発掘作業員が少なく調査がはかどらないので、考古資料館の整理作業員に来てもらっての調査であった。9月22日（木）調査が終了しその後、重機で埋め戻しを行った。その後現地で記録・保存した遺物・図面・写真の整理を行ったが、報告書刊行までもう一步足りなかった。その未完の報告書も今回合わせて一つの報告書にしたので、図版等々構成に不備がある事をお含み頂きたい。

今回の発掘調査は諸協議の結果に基づいて、平成8年5月25日から表土剥ぎを行なった。2方に高さ2mの壁を作り山砂を入れてあり、その排土が困難をきわめた。排土が終了したところで（株）ジャステックに、基本メッシュの杭を打ってもらって、6月4日から発掘調査を始めた。検出作業で確認した遺構を順次掘り下げ調査した。調査区は造成した所を掘り下げた窪地の為、土はすべてベルコンで排出した。掘り下げ調査終了後、写真撮影・測量を行ない、7月12日現地での調査を終了した。

その後、平成9年3月末まで飯田市考古資料館において、現地で記録・保存した遺物・図面・写真類等の整理作業を行ない、当報告書作成作業にあたった。

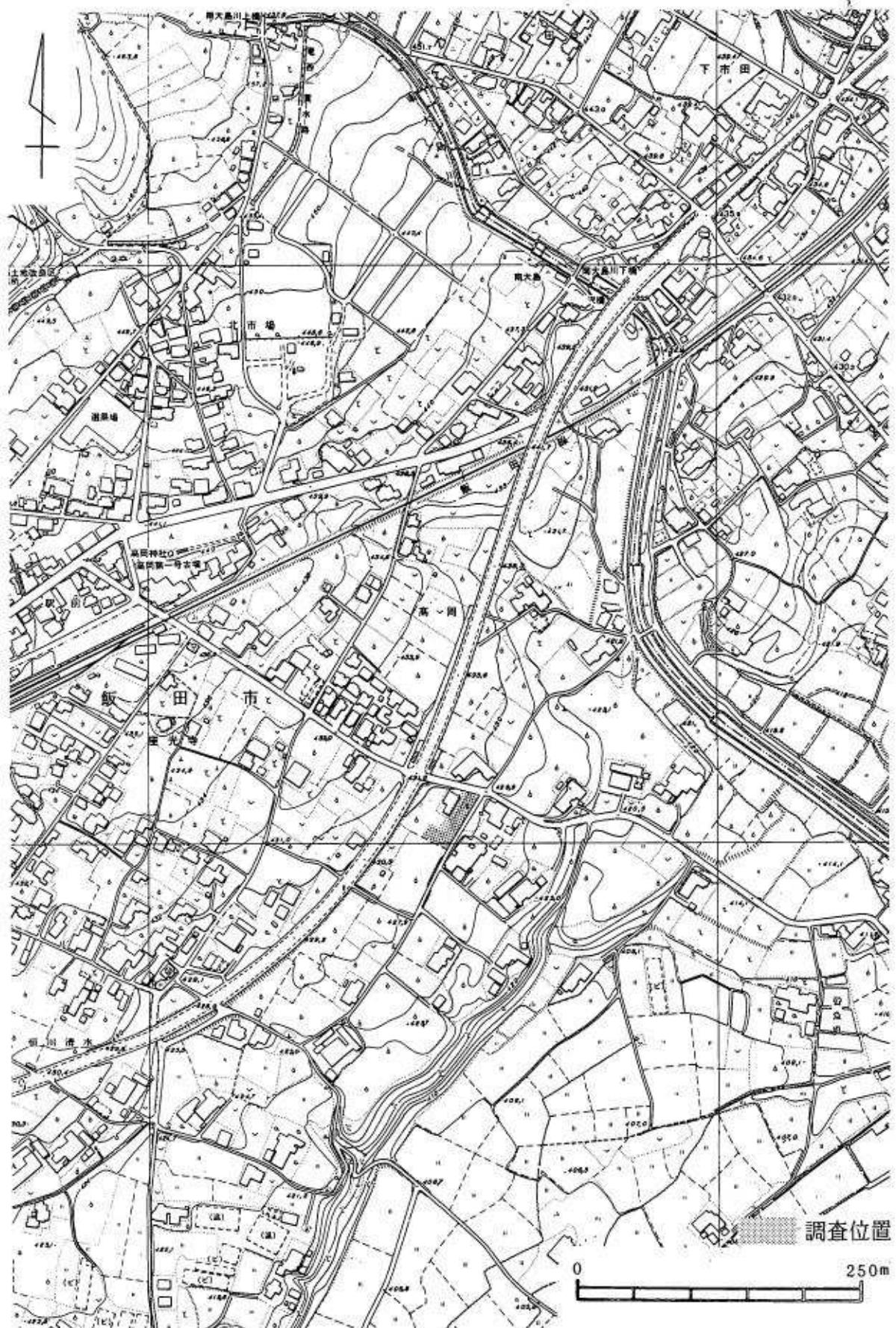
3. 調査組織

| | | | | |
|-------|---|---|--|---|
| 調査担当者 | 小林 正春 | | | |
| 調査員 | 佐々木嘉和・吉川 豊・馬場 保之・山下 誠一・吉川 金利・福澤 好晃 下平 博行・伊藤 尚志 | | | |
| 作業員 | 新井ゆり子・池田 幸子・今村 勝子・岡島 亘・金井 照子・金子 裕子 唐沢古千代・北村 重美・木下 早苗・木下 玲子・櫛原 勝子・熊谷 義章 小池金太郎・小池千津子・小島 妙子・小平不二子・小林 定雄・小林 千枝 斎藤 徳子・坂下やすゑ・佐藤知代子・中島 真弓・鳴海 紀彦・原田四郎八 平栗 陽子・福沢 幸子・福沢トシ子・古根 素子・牧内貴久子・牧内 八代 正木実重子・松井 明治・松本 恭子・松島 直美・三浦 厚子・南井 規子 宮内真理子・向田 一雄・森藤美知子・柳沢 謙二・吉川 悅子・吉川紀美子 吉川 正実 | | | |
| 事務局 | 飯田市教育委員会 | 横田 穆 矢沢 与平 小畠伊之助 小林 正春 吉川 豊 | 社会教育課長 博物館課長 博物館課埋蔵文化財係長 博物館課埋蔵文化財係 馬場 保之 山下 誠一 吉川 金利 福澤 好晃 下平 博行 伊藤 尚志 牧内 功 | 平成8年6月迄 〃 7月～平成9年3月迄 平成9年3月から 博物館課埋蔵文化財係 博物館課埋蔵文化財係 〃 〃 〃 〃 〃 博物館課庶務係 |

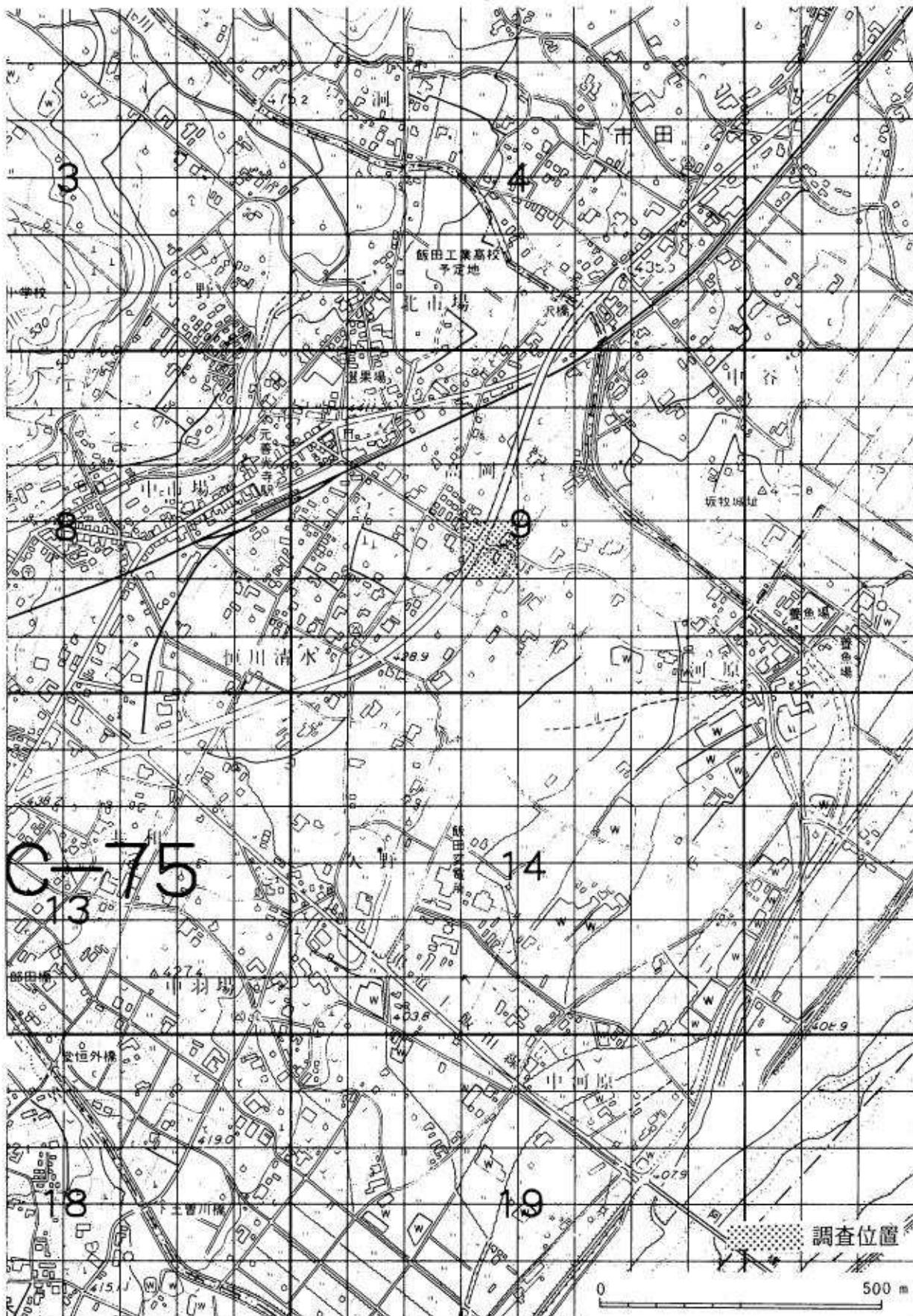


- | | | |
|-----------|-------------|-----------|
| 1 新屋敷遺跡 | 2 新井原第12号古墳 | 3 畠地第1号古墳 |
| 4 高岡第1号古墳 | 5 座光寺原遺跡 | 6 中島遺跡 |
| 7 北本城跡 | 8 南本城跡 | |

插図1 調査位置及び周辺遺跡位置図



插図2 調査位置及び周辺地図



插図3 基準メッシュ図区画調査位置図

II 遺跡の環境

1. 自然環境

新屋敷遺跡は、恒川遺跡群内北東の段丘端部に位置する。中位段丘端部の天竜川氾濫原から約20mの崖錐上部に広がったほぼ平坦な遺跡である。遺跡の面は地山が黄色砂土で乾燥し、段丘崖下に湧水があり原始より生活の場所として非常に良好な条件を備えている。

飯田市座光寺地区は市街地の北東4kmに位置し北は南大島川により下伊那郡高森町と、東は天竜川を挟んで同喬木村と、南は土曾川を境に飯田市上郷地区と接している。

飯田市は伊那山脈と木曽山脈に挟まれた伊那谷南部にあり、伊那谷のほぼ中央部を天竜川が南流する。市街地は天竜川から西方3km離れ、木曽山脈の支峰風越山麓に開けた町である。

両山脈の形成に関わる造山運動に伴った断層により、大きな段丘が形成され、総体で細長い盆地をなす。それを天竜川に流入する河川が切断し、複雑な段丘地形を呈している。座光寺地区は、両端を中心アルプス前山を源流とする河川に切断され、縦長の三角形に近い形をしている。その中を横断する形で、大きな段丘2段がありそれに小段丘が付随する。

2. 歴史環境

座光寺地区における発掘調査の最初は、大正11年11月に現在の東日本鉄道飯田線にかかわって調査された大塚古墳（新井原12号古墳）で、この頃鳥居龍藏氏の遺物調査も行なわれている。

大正12年には、畠地1号古墳石室が座光寺小学校職員と高等科生徒によって清掃調査され、銀製の「垂飾付長鎖式耳飾り」の他、玉類・馬具の破片等が発見されている。その後昭和30年代まで記録は無く、破壊のみが進んでいたと思われる。

昭和37（1962）年には、前年の梅雨前線による集中豪雨（36災）の災害復旧工事用採土に先立ち、下伊那教育会歴史調査部によって上段の一部座光寺原遺跡が調査され、弥生時代後期後半の標識「座光寺原式」が設定されている。

その後いくつかの発掘調査が行なわれ、昭和45年には中央自動車道建設に伴う発掘調査で、座光寺地区では宮崎・大門原など5遺跡が調査された。

昭和50年（1975）には、農業構造改善事業に伴う道路部分の調査で、中島遺跡が座光寺考古学研究会・下伊那教育会考古学委員会によって調査され、弥生時代終末期標識「中島式」の設定の元となった。

昭和51年（1976）度から一般国道153号座光寺バイパス建設に伴う発掘調査が、当飯田市教育委員会によって行なわれた。その結果、バイパスの通過する恒川遺跡群は多期にわたる遺跡の密集地であり、且つ重要遺構・遺物の出土があり、古代伊那郡の推定「郡衙」の一画として注目された。

その後、座光寺バイパス開通直後から、道路沿いに店舗等の民間諸開発が進み、それに先立つ発掘調査が行なわれた。当新屋敷遺跡4742番地も（有）セブンにより開発申請がなされ、昭和63年調査を行なった。

このバイパス沿いの開発は著しく、ほぼ終了してしまった様な状況にあるが、恒川遺跡群内に「郡衙」の確証を求めて、昭和57年度から文化庁の補助を受けた恒川遺跡群範囲確認調査を続けており、平成6年度の発掘調査で「郡衙」に所在する「正倉」を確認した。平成7年度は正庁の区画の溝と思われる遺構を確認し、その中から瓦を発見した。いよいよ「郡衙」の中心にせまりつつある。

恒川遺跡群内では、昭和60年のバイパス開通から今年度迄の11年間に試掘・発掘調査・範囲確認調査合わせて、約30ヶ所を調査した。

以上の地区内における埋蔵文化財の調査結果のいくつかをふまえ、地区内の歴史上の変遷を概観すると次の様である。

座光寺地区の埋蔵文化財包蔵地は20余りを数え、地区全域が包蔵地といつても過言ではなく、縄文時代から近世にいたるまで切れ間なく存在している。このうち地表に見える構造物としては、古墳と中世山城があげられる。古墳の多いこと、土器・石器の散布の多いことで知られており、家宝として銅鏡・玉類等を所蔵している人も多い。

地区内における遺跡の時期的な分布は、上段地帯に縄文・弥生時代の遺跡があり、山寄りほど縄文時代の遺跡濃度が増している。中央の段丘端部に山城、崖下に古墳があり、下段には縄文時代から近世の遺跡が複合して分布している。

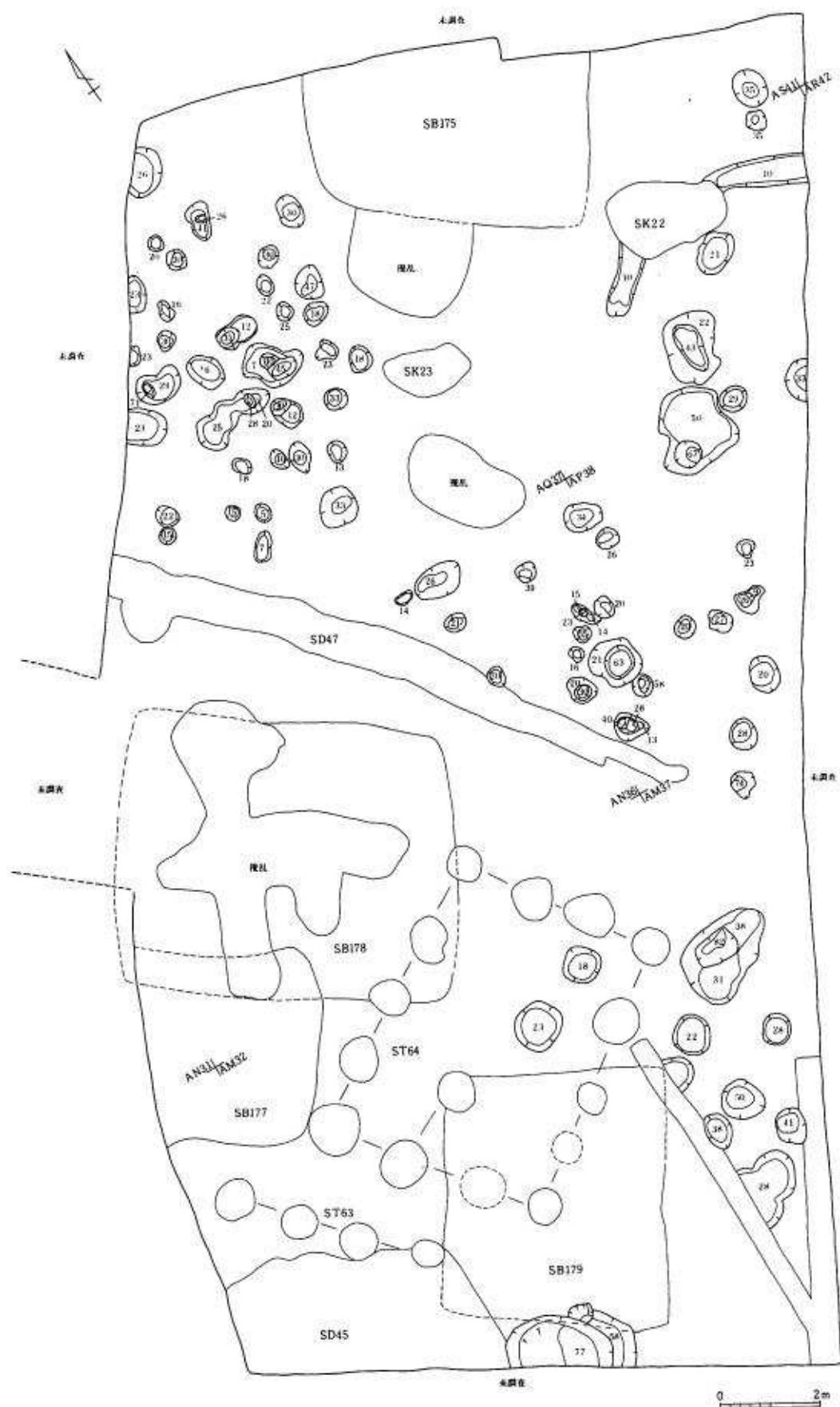
地区内での各時代の具体的な内容を見ると、縄文時代においては、その早期から晩期まで途切れることなく、各時代の遺物が上段・下段のほぼ全域から発見されている。この地区に、最初の足跡をした人々の痕跡としては、縄文時代早創期の有舌尖頭器の出土例であるが、これより前の旧石器時代からの生活が考えられ、縄文時代を通しての生活跡は多い。

続く、弥生時代においては、伊那谷南部の中心的な地であった姿がより明確に捉えられる。それは弥生時代中期から後期にかけて、恒川・座光寺原・中島といった三時期の大集落が展開したことで知られる。

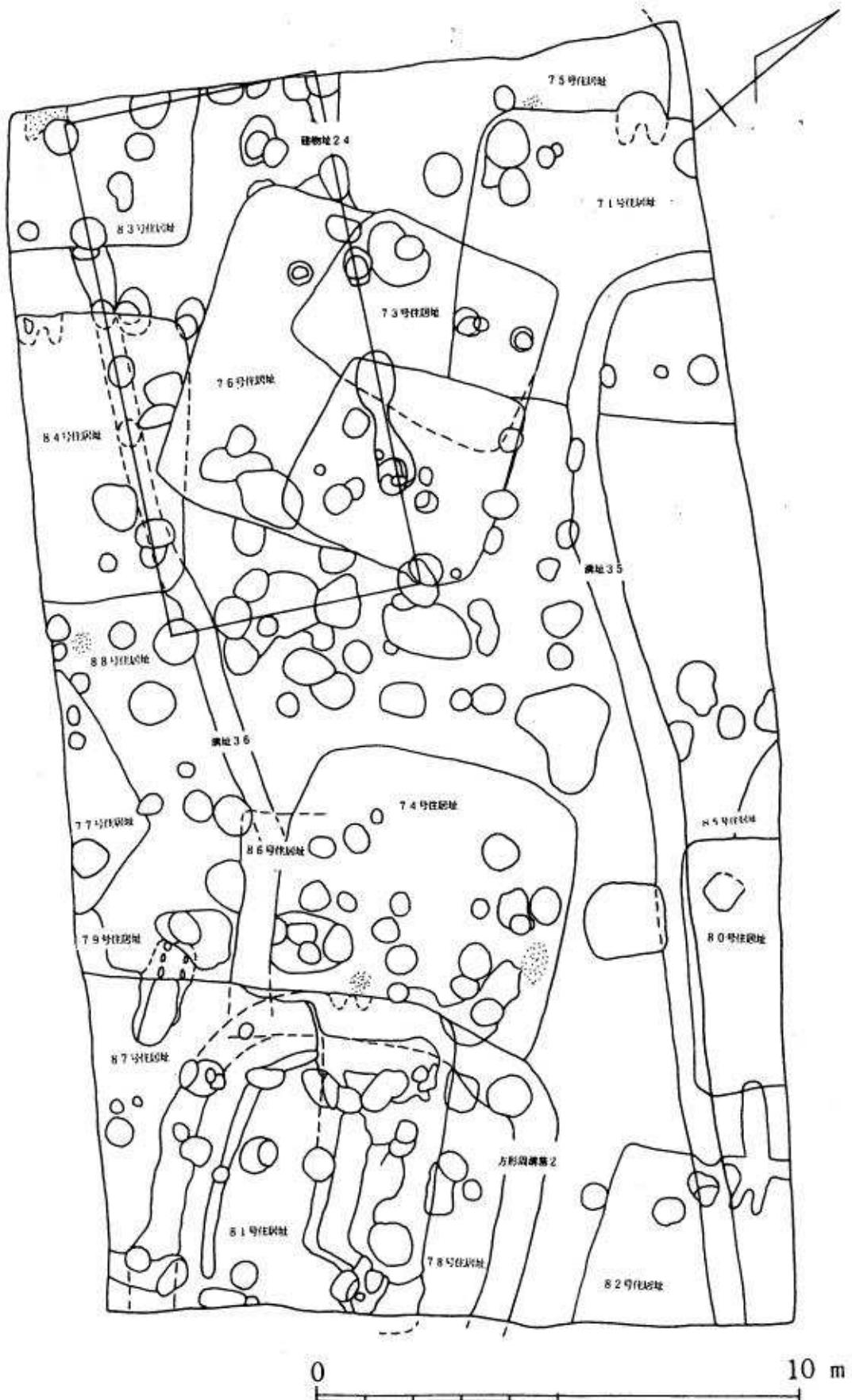
座光寺地区の古墳については、現存するものは10余りであるが、下伊那史には古墳総数66基の記録がある。その後、石行遺跡・高岡遺跡の調査等で、新たに10基の古墳が調査されている。当時代の住居址も、調査された各時代の内でもっとも多く、座光寺地が最も繁栄した時代の1つといえる。

続く、奈良・平安時代については、座光寺地区が歴史上最も重視されている時代である。それは、前述した恒川遺跡群における、古代伊那郡衙址の存在であり、定額寺院の寂光寺の存在である。この時代、伊那谷の政経の中心であったことは、いうまでもなく大和朝廷による国政遂行上でも、欠くことのできない地であったといえる。

次時代の中世以降は、座光寺地区において、歴史資料の希薄な時期である。南本城・北本城の二城があるにもかかわらず、具体的な歴史事実は未解明な状況である。しかし座光寺地区各所で行なわれている埋蔵文化財の発掘調査において、輸入磁器を含む他の地区に無いような優品を出土することが多く、史実には登場しないが、中世に於ても重要な役割をはたしていた事が推測される。



挿図4 調査区AR Y4741遺構全体図

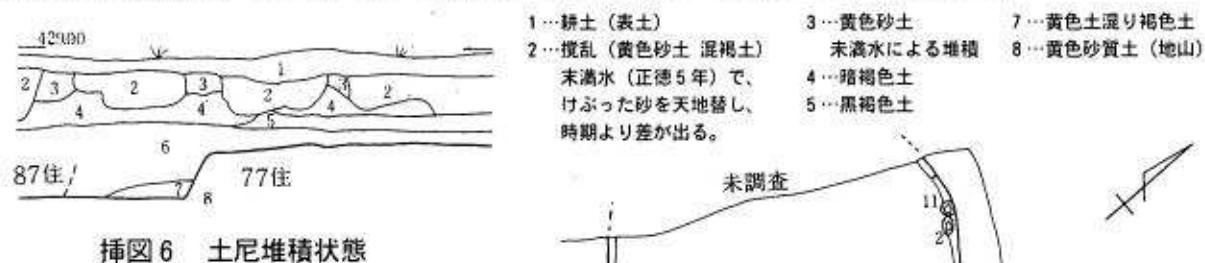


挿図5 調査区ARY4742遺構全体図

III 調査結果

1. 土層堆積状態

調査地点の土層堆積状態は、住居址に切られて残存部分は非常に少ない。少ない部分の自然堆積は、地表から黄色砂土の基盤まで約85cmであり、耕土約20cm・攢乱（未溝水で堆積した黄色砂を天地返しをして褐色土と混じる）30~20cm・褐色土20cm（遺構の覆土になる所では70cm）。基盤の黄色土混じり褐色土15cm（漸移層）である。しかし住居址に切られ地表から150cmに達する所もある。

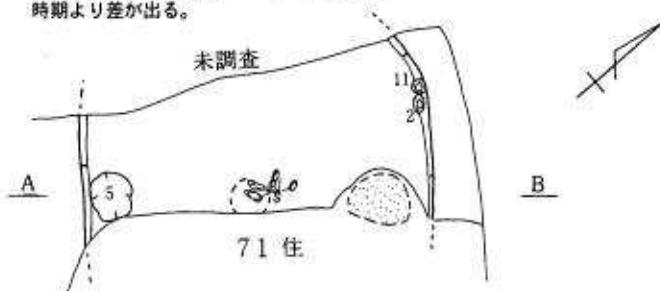


挿図6 土尼堆積状態

2. 遺構

1. 住居址

1) 弥生時代



挿図7 A 428.50

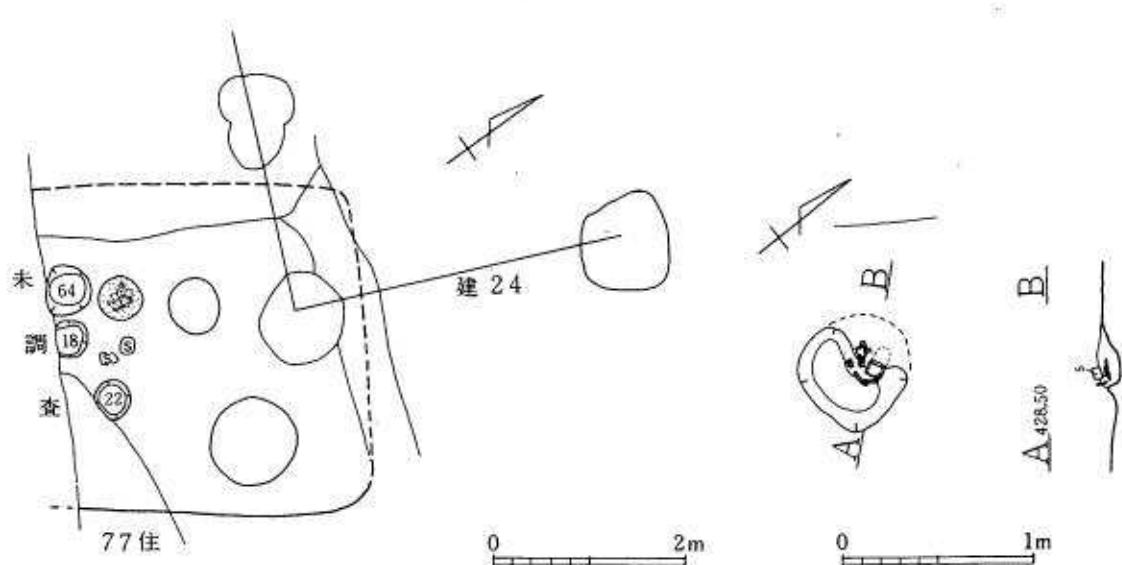
75号住居址

0 2m

①75号住居址 (挿図7)

| | | | |
|--|------------------------|------|---------------|
| 検出位置 | AK 2 3 | 覆土 | 褐色土一層 |
| 重切る | | 床面 | 平坦で良好 |
| 複切られる | ST 7 1・調査区外 | 主柱穴 | |
| プラン | (方形) | 住貯藏穴 | |
| 規模 | m 3.6 m × () | 入 口 | |
| 主軸 | N 52° W | 形 状 | 炉縁石を持つ地床炉 |
| 壁高 | cm 20 | 規 模 | cm 焼土直径 40 cm |
| 壁の状態 | 良好比較的急 | 特記事項 | 焼土が薄く残る |
| 出土遺物(第9図) 瓶の1は緩く口縁が開き胴上部に波状文と斜走短線文が施文される。瓶の2は台付き瓶と想定でき胴部球形で刷毛目が器面・口縁部は内側に、口唇部にキザミ目が施される。3は磨製石包丁の半欠で焼けて赤褐色を呈し石質不明 | | | |
| 特記事項 | 調査面積は少ないが特徴的な遺物の出土があった | | |
| 時期 | 弥生時代後期初頭 | 根拠 | 出土遺物 |

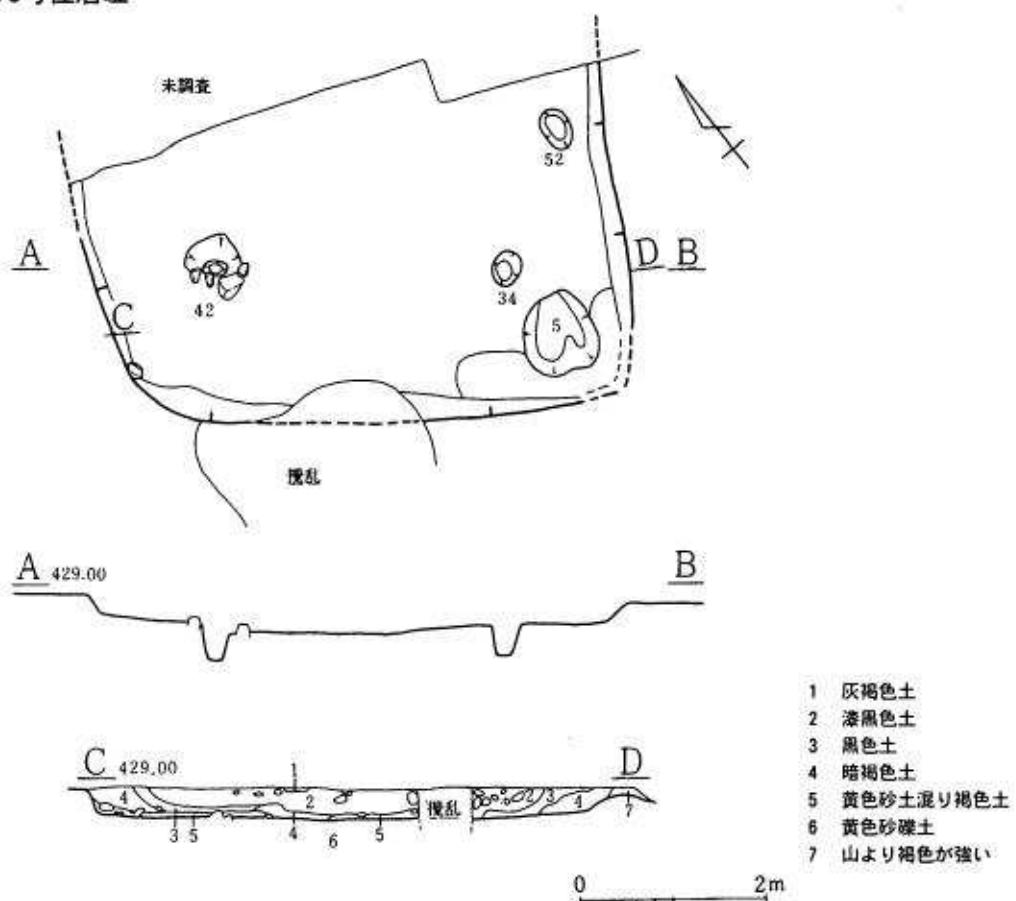
挿図8 88号住居址



② 88号住居址 (挿図8)

| | | | |
|------------|--|------|---------------|
| 検出位置 | AD 25 | 覆土 | |
| 重切る | | 床面 | 良好 |
| 複切られる | SB 77・84 ST 24 | 主柱穴 | |
| プラン | | 貯藏穴 | |
| 規模m | | 入口 | |
| 主軸 | | 形狀 | 地床炉底に土器片が敷かれる |
| 壁高cm | | 規模cm | |
| 壁の状態 | | 特記事項 | 焼土中に土器混入 |
| 出土遺物(第26図) | 壺1・2は双方共に破片であり、横線文等で飾られる。炉に入っていた甕の破片の中から炭化物がお量にして約2cm ² 出土した。直径5~3mmあり丸く、豆の類と推測した。3は磨製石斧の半欠で、横断面に候だ敲打痕が残る。4は打石斧で使用痕が残る。 | | |
| 特記事項 | 検出中に炉を検出 床面のみ確認 | | |
| 時期 | 弥生時代中期後半 | 根拠 | 炉焼土中の土器 |

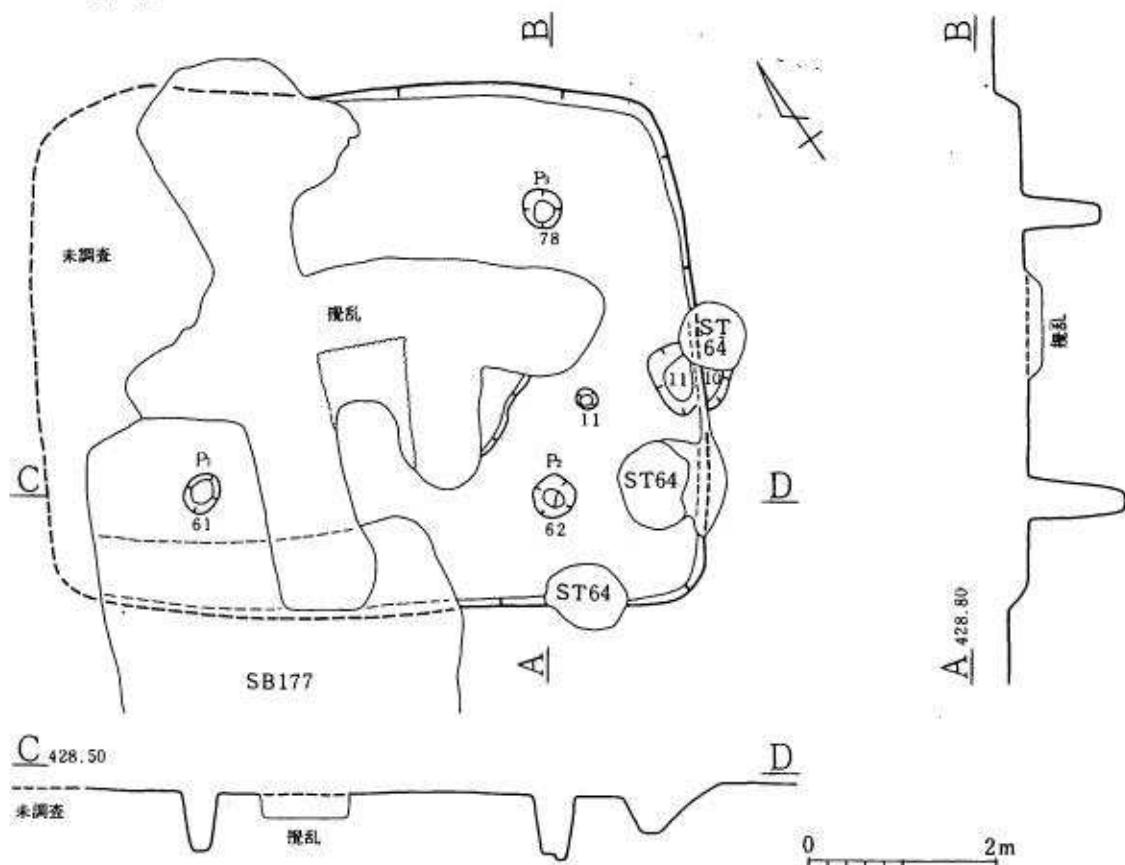
挿図9 175号住居址



③ 175号住居址 (挿図9)

| | | | |
|------------|--|-------|--------------------|
| 検出位置 | AT 38 | 覆土 | 漆黒色土が凸レンズに入る |
| 重複 | 切る | 床面 | 基盤の石(20~50cm)が全面露出 |
| 複数 | 切られる | 主柱穴 | 南西側2本 |
| 規格 | プラン | 住居内施設 | 貯蔵穴 |
| 規模 | m 5.5 × () | 入口 | 南東壁下の穴が推定される |
| 形 | 主軸 | 形狀 | |
| 壁高 | cm 30~20 | 炉 | 規模 cm |
| 壁の状態 | 全面基盤の石(20~5cm) | 特記事項 | 調査区外であろう |
| 出土遺物(第27図) | 比較的遺物が多い。1は小型壺の破片である。2は口縁部が緩く開く甕で横線文2条を施す。3はやや頸部が締まり口縁部がわずか開く甕で、斜走短線3条と緩い波状文1条が頸部を飾る。4は台付き甕の台でこの部分は完存している。7・8は小型無文の甕片、9は高壺の壺部片。10・11は打石斧、12は横刃型石斧。 | | |
| 特記事項 | 覆土が凸レンズ状に4層確認できた | | |
| 時期 | 弥生時代後期初頭 | 根拠 | 出土遺物 |

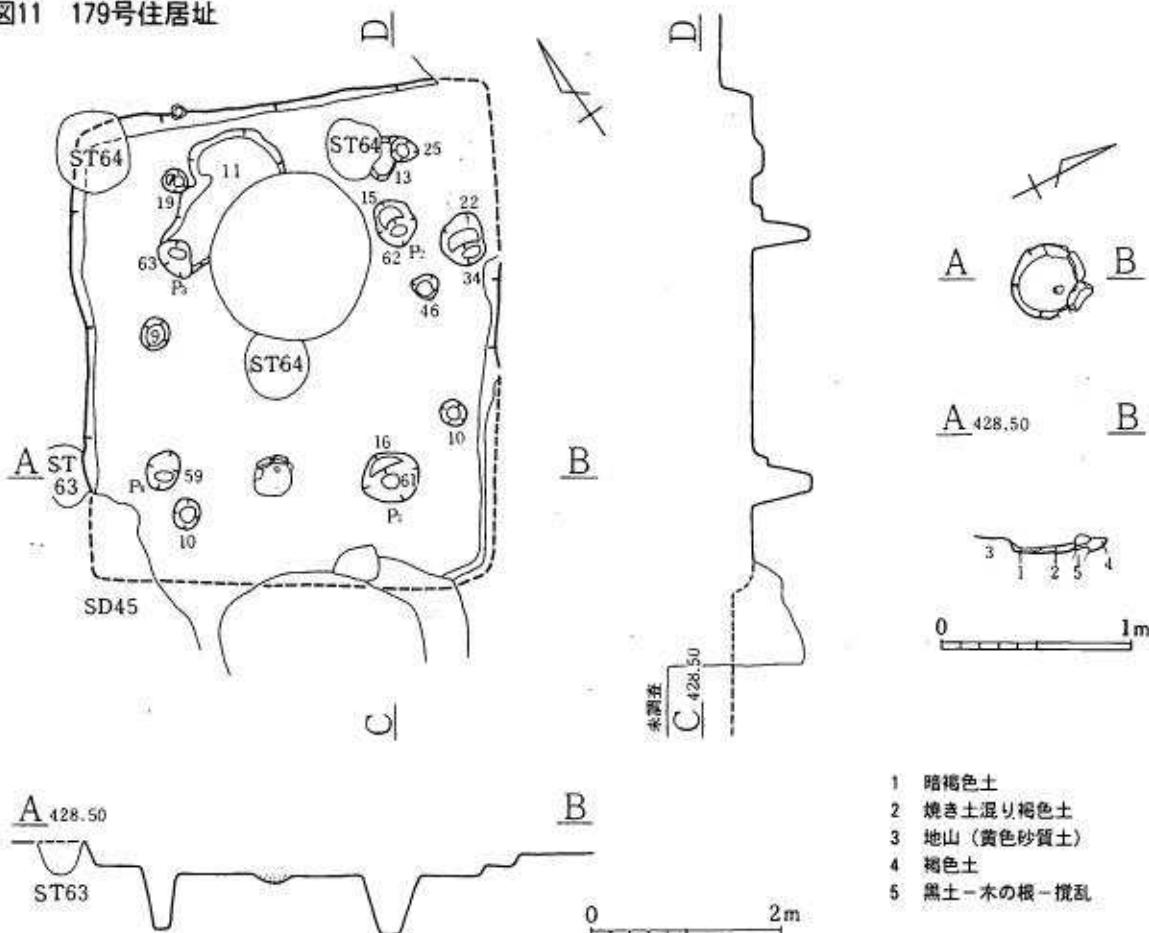
挿図10 178号住居址



④ 178号住居址 (挿図10)

| | | | |
|-----------|--|-------|-----------------|
| 検出位置 | AN 3 4 | 覆土 | 褐色土の一層 |
| 重切る | | 床面 | 非常に良好 |
| 複切られる | ST 6 4 現状の攢乱 | 主柱穴 | 攢乱部以外の3本確認 |
| プラン | 隅丸方形 | 貯蔵穴 | |
| 規模 | m 5 × () | 入口 | ST 6 4 に切られる穴か? |
| 模 | N 50° W | 形状 | |
| 形 | 28~15 | 規模 cm | |
| 壁の状態 | 急に立ち上がる | 特記事項 | 現代の攢乱に切られる |
| 出土遺物(第9図) | 多いが完形は無い。1は上げ底の甕で口唇部にかけて開き、頸部に2条の雑な波状文を施し口唇部に刻み目を持ち、上げ底の高台底部には木葉痕が、内側はナデ痕が残る。2の口唇部には刻み目、4はやや小型の甕で頸部に斜走短線2条と口唇部に刻み目を施す。6は内外面共に刷ナデで調整され器壁内に粉殻圧痕1個が残り、実測図の断面に入れた小さな楕円がそれである。30図8は小片であるが内外面共に朱塗りで、口縁部がやや内湾し小さな片口が付く。 | | |
| 特記事項 | 現代の芋室がこの住居址を破壊していたが、遺物は比較的残っていた。 | | |
| 時期 | 弥生時代後期初頭 | 根拠 | 出土遺物 |

挿図11 179号住居址

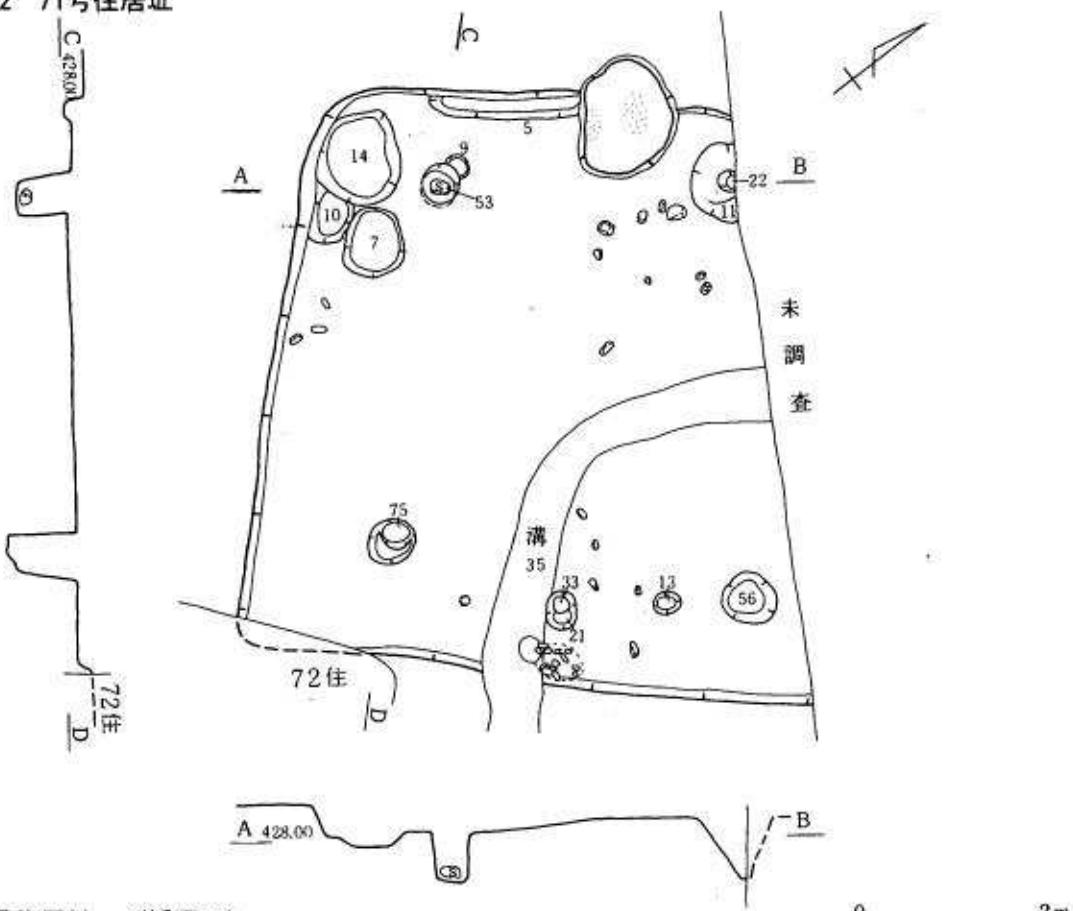


⑤ 179 号住居址 (挿図11)

| | | | |
|----------------|------------------|--|------------------|
| 検出位置 | AK 3 4 | 覆土 | 暗褐色土のはば一層 |
| 重切る | | 床面 | 良好 |
| 複切られる | ST64・SD45・現代のサイロ | 主柱穴 | 4本確認 |
| プラン | 隅丸方形 | 貯蔵穴 | |
| 規模 | m 5×4.2 | 住居内入口 | |
| 主軸 | S 31° W | 施設 | 形狀 炉縁石2個を持つ地床炉 |
| 壁高 | cm 35~27 | | 規模 cm 40×40 |
| 壁の状態 | 急に立ち上がる | | 特記事項 南西主柱穴間中央にあり |
| 出土遺物 (第30~32図) | | 多い。14はほぼ完形の壺で、頸部直下に櫛状工具でX字状を施文する。この施文は初見であり、パターンから外れており独創的な施文である。15は頸部が太く甕か壺か判断に苦しむ形であるが甕とし、頸部に斜走短線文を3条施す。16は歪みの著しい雑な作りの甕で無文である。 | |
| 特記事項 | | | |
| 時期 | 弥生時代後期初頭 | 根拠 | 炉の形態・出土遺物 |

2) 古墳時代

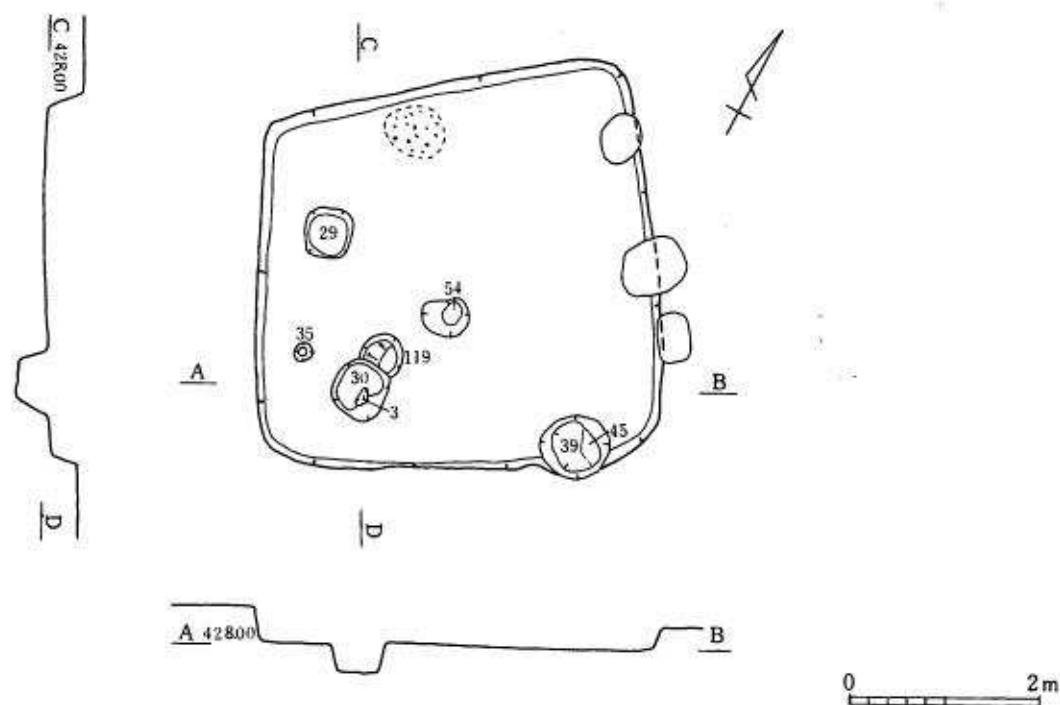
挿図12 71号住居址



① 71号住居址 (挿図12)

| | | | |
|--|---------------------------------------|----------|-----------------------|
| 検出位置 | A J 2 4 | 覆土 | 褐色土のほぼ一層 |
| 重切る | S B 7 3 • 7 5 • 7 6 | 床面 | ほぼ良好 S B 7 3 の部分に張床あり |
| 複切られる | S D 3 5 | 主柱穴 | 4本 |
| プラン | 隅丸方形 | 貯蔵穴 | |
| 規模 m | 6 × () | 入 口 | 南東壁中央 |
| 模形 | N 5 5 ° W | カ 形 状 | 粘土 |
| 壁高 cm | 3 5 ~ 1 8 | マ 規 模 cm | 1. 2 × 1 |
| 壁の状態 | 急に立ち上がる | ド 特記事項 | ほとんど崩れている |
| 出土遺物 (第1~3図) | 須恵器は無い。南西壁中央下から出土した編物石が13個あり掲載は9個である。 | | |
| 敲器と併用もある。2-2・3 は砥石。3-8・9・10は鉄製品で前者2個は刀子片である。11は大きな臼玉で青灰を呈し、滑石製である。 | | | |
| 特記事項 | 2 / 3 調査 | | |
| 時期 | 古墳時代後期 | 根拠 | カマドと出土土師器 |

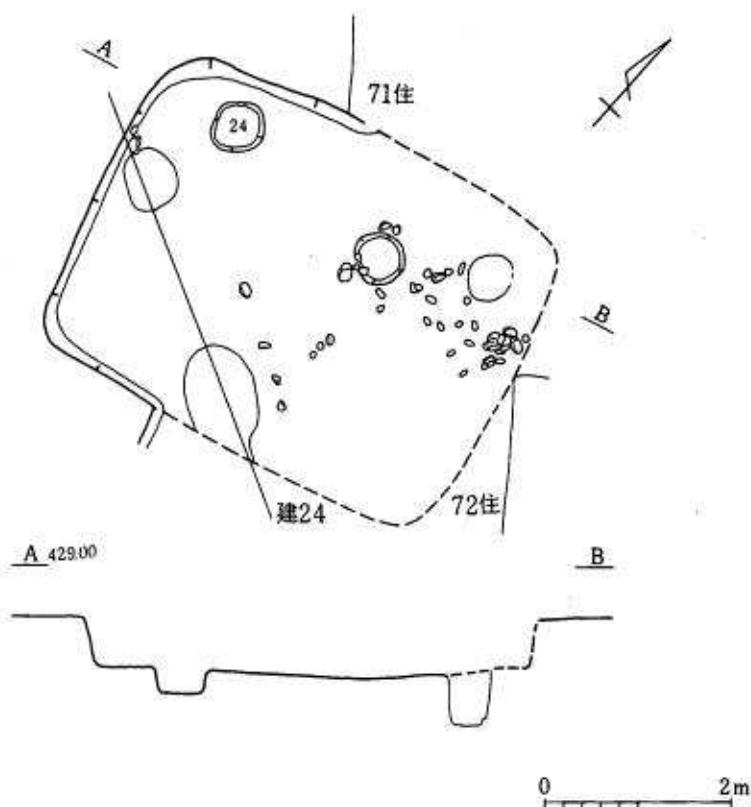
挿図13 72号住居址



② 72号住居址 (挿図13)

| | | | |
|------------|---|------|-----------------|
| 検出位置 | AH 2 5 | 覆土 | 暗褐色土一層 |
| 重切る | SB 7 6 | 床面 | 良好 |
| 複切られる | SB 7 3 ST 2 4 | 主柱穴 | 精査したが1個のみ確認 |
| プラン | 隅丸方形 | 住貯藏穴 | |
| 規模 | m 4 × 4 | 居入口 | |
| 軸 | | 内施設 | カ形状 |
| 壁高 | cm 37 ~ 23 | マ | 規模 cm |
| 壁の状態 | やや緩い | ド | 特記事項 北西に壁下に炭が散布 |
| 出土遺物 (第4図) | 少なく土師器は小形であり、須恵器は無い。海浜石3個12~14。図化しない物に 鉄片と、カマドがあったと推測できるAH 2 4から焼骨が出土している。 | | |
| 特記事項 | SB 7 6にスッポリ入っている SB 7 3が当住居址より新しいが先に掘ってしまった | | |
| 時期 | 古墳時代後期 | 根拠 | 切り合い関係と出土土師器 |

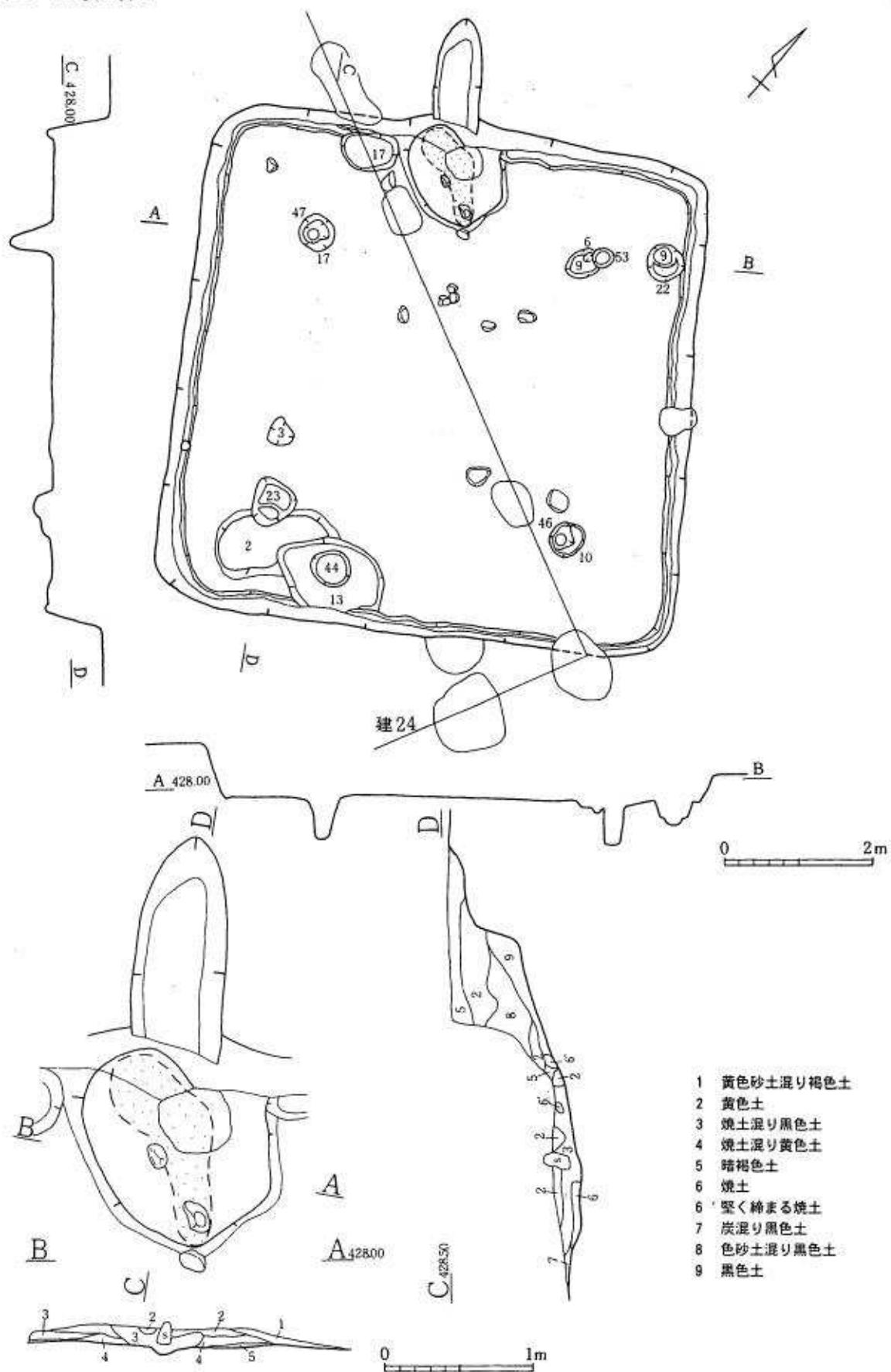
挿図14 73号住居址



③ 73号住居址 (挿図14)

| | | | |
|--------------|---|----------|-----------|
| 検出位置 | A H 2 4 | 覆土 | 褐色土の一層 |
| 重切る | S B 7 2 • 7 6 | 床面 | 残存部少ないが良好 |
| 複切られる | S B 7 1 S T 2 4 | 主柱穴 | 精査したが不明 |
| プラン | 隅丸長方形 | 貯蔵穴 | |
| 規模 m | 3.4 × (4.6) | 入 口 | |
| 主軸 | | カ 形 状 | |
| 壁高 cm | 50前後 | マ 規 模 cm | |
| 壁の状態 | S B 7 1 • 7 2 に切られる部分不明 | ド 特記事項 | 切られて不明 |
| 出土遺物 (第5~6図) | 普通に出土している。5-9は甌である。須恵器は無い。鉄製品2点6-11・12の出土があり11は刀子の切先で12は不明である。床面に少量の炭の散布があり取りあげた。6-13~15は混入遺物で弥生時代の磨製石鏃の未製品である。 | | |
| 特記事項 | 切られない部分の壁は50cmあり掘り込みも良好である。 | | |
| 時期 | 古墳時代後期 | 根拠 | 切り合いと出土遺物 |

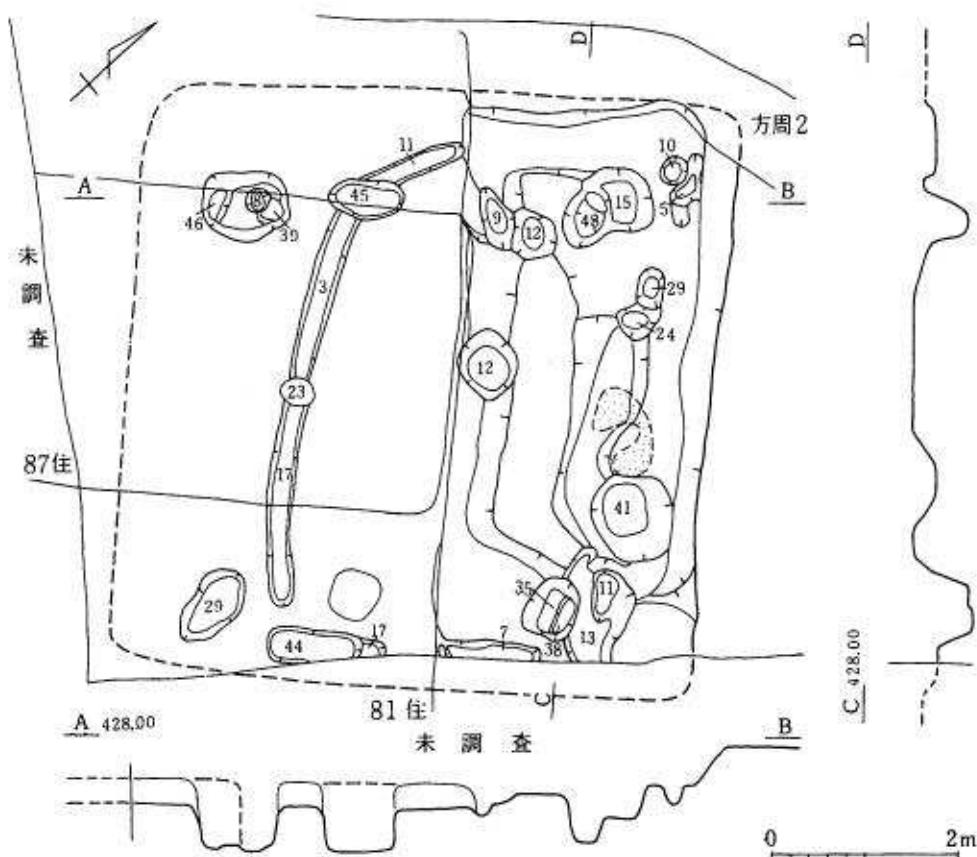
插図15 76号住居址



④ 76号住居址 (挿図15)

| | | | |
|--------------|--|-------|-------------------------|
| 検出位置 | AG 24 | 覆土 | ほぼ暗褐色土一層 |
| 重切る | | 床面 | 非常に良好 |
| 複切られる | SB71・72・73・84 ST24 | 主柱穴 | 4本 南隅1本が浅い |
| プラン | 隅丸方形 | 住居内施設 | 貯藏穴 |
| 規模m | 6.6 × 7 | 内 | 入 口 南主柱穴東の穴であろう西側少し高くなる |
| 主軸 | N 63° W | 施設 | カ形状 粘土 |
| 壁高cm | 74～35 | マ | 規模cm 1.5 煙道1.4 |
| 壁の状態 | 全周確認 | ド | 特記事項 支脚石 崩れている |
| 出土遺物(第9～13図) | 多い 蓋には大形～小形がある9-4～9 10-1・2。10-3は鉢であるが直接接合はない。壺の形態にも様々あるが底部が箇削りされるのが共通である。高壺はほとんどに箇磨きが施され暗文状に残る物と、横なでのみ12-2・4がある。鉄製品2点の内8は完形で錐か鎌である。9は刀子茎片。11・12は臼玉で小さい。図化しない物に柱穴から出土した鉄・覆土中からの朱がある。第13図9・10は混入の磨製石鎌未製品である。 | | |
| 特記事項 | 掘り込みが深く残存状態良好である 主柱穴は小型で一本の掘方は浅い 周溝は壁下に全周あり | | |
| 時期 | 古墳時代後期 | 根拠 | カマドと出土遺物 |

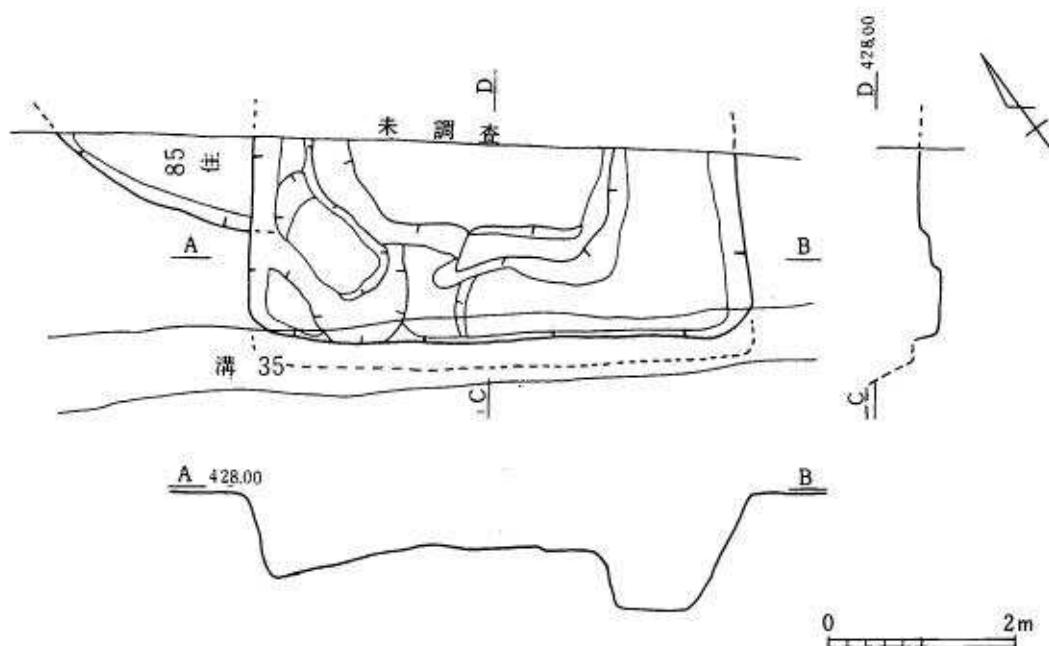
挿図16 78号住居址



⑤ 78号住居址 (挿図17)

| | | | |
|----------------|-------------------|--|-----------|
| 検出位置 | AD 3 2 | 覆土 | 褐色土 |
| 重複 | 切る | 床面 | 良好 |
| | 切られる | 主柱穴 | 4本 |
| 規模 | プラン 規模 m 主軸 | 住居内施設 | 貯藏穴 |
| 形 | 推定 $6 \times ()$ | 入 口 | |
| | 壁高 cm | カ 形 状 | |
| | 50 | マ 規 模 cm | |
| | 壁の状態 | ド 特記事項 | 北東壁下に焼土あり |
| 出土遺物 (第14~18図) | | 多い。土師器壺は大小あるがほとんどがやや胴長である。坏・高坏に黒色土器がある。須恵器横瓶16-4、5は甕の口縁 6・7・8は長頸壺であるが7は甕かも?。甕10はほぼ完形17-12は鉄滓の割れた物で片側が丸みをおびている。刀子18-4は小さいがほぼ完形で鞘の残欠らしい木質が鋲化している。図化しない特殊な遺物はカマド中から焼骨・炭が出土している。混入遺物も多数あり17-2・4~6 18-1~3 もそれである。 | |
| 特記事項 | | 北東壁下に焼土があった為カマドとしていたが、根柢となるものが無い。焼土付近からは炭も出ている。 | |
| 時期 | 古墳時代後期 | 根拠 | 出土遺物 |

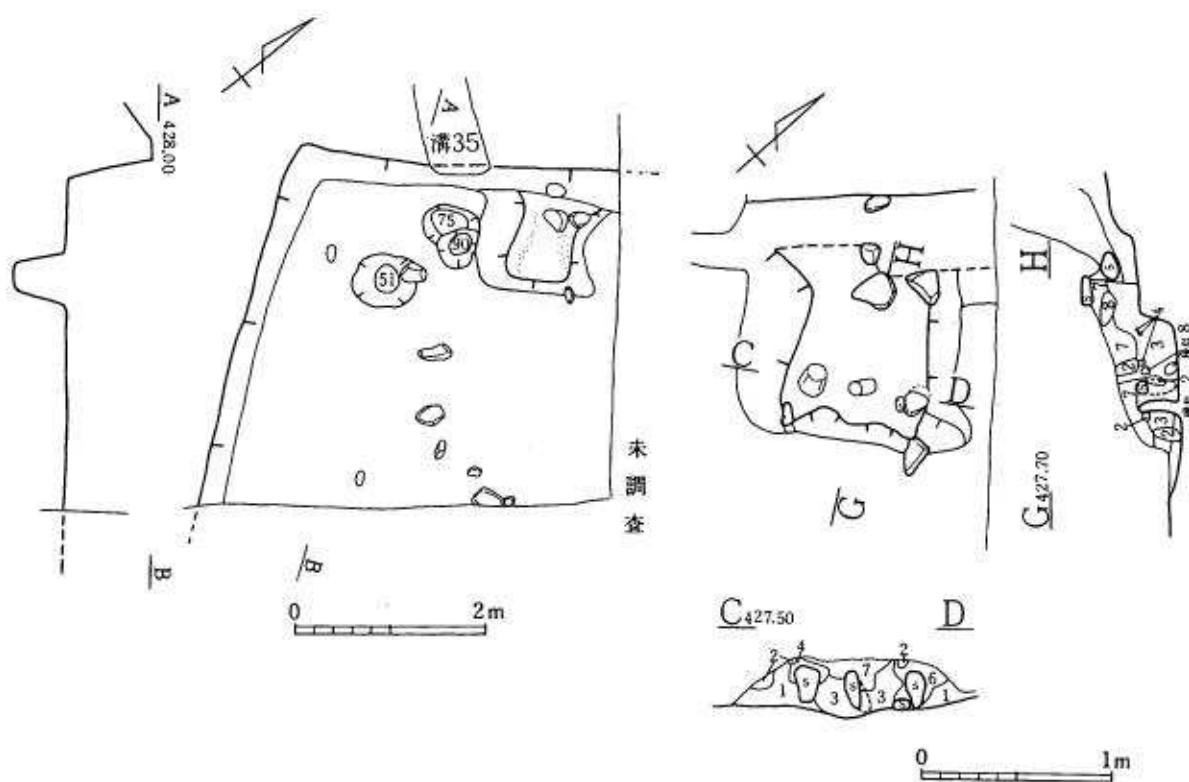
挿図17 80・85号住居址



⑥ 80号住居址 (挿図17)

| | | | |
|------------|--|--------|---------------|
| 検出位置 | A H 3 8 | 覆土 | |
| 重切る | | 床面 | 良好 西隅10cm高くなる |
| 複切られる | S D 3 5 | 主柱穴 | |
| プラン | 隅丸方形 | 貯藏穴 | |
| 規模m | 5.2×() | 入 口 | |
| 主軸 | | カ形状 | |
| 壁高cm | 40前後 | マ 規模cm | |
| 壁の状態 | 急に立ち上がる | ド 特記事項 | |
| 出土遺物(第18図) | 少ない 土師器甕5・6、壺7は3/4現存し、黒色土器で内側は櫛状工具で調整後 籠磨きしている。須恵器8は高台内側に窯印があり、9は高壺の脚部である。10は硬質泥岩の砥石 で裏面に刃物痕が溝状に残っている。 | | |
| 特記事項 | 調査区外北東壁にかかり約1/4調査 壁下に暗褐色土が幅1m前後床面から50~20cm下 がり周溝状になった | | |
| 時期 | 古墳時代後期 | 根拠 | 出土遺物 |

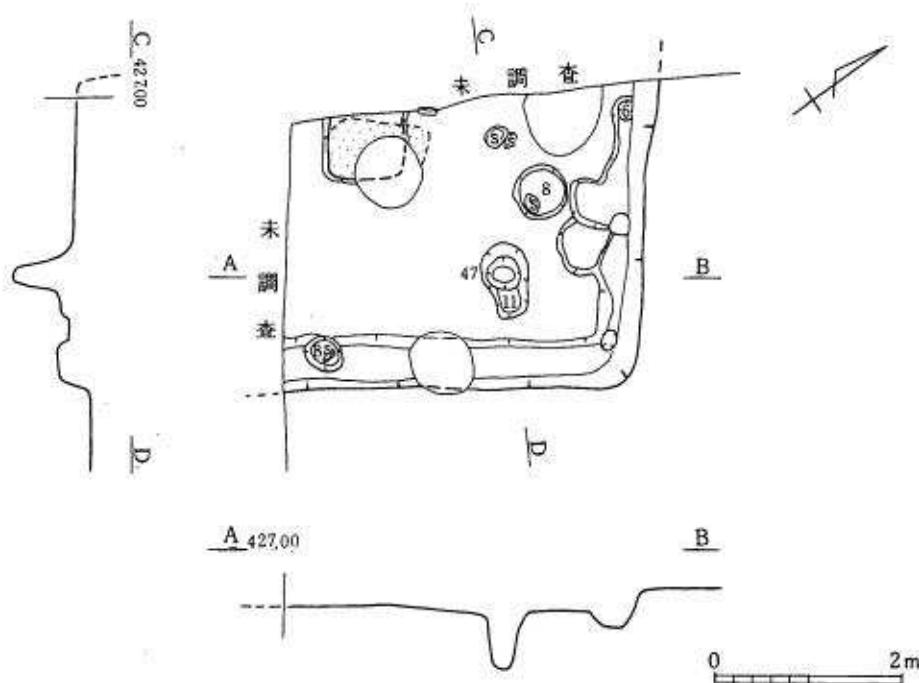
挿図18 82号住居址



⑦ 82号住居址 (挿図18)

| | | | |
|---------------|---|-------|---------------------|
| 検出位置 | A F 3 4 | 覆土 | 調査部分に切り合が無く凸レンズ状に入る |
| 重切る | | 床面 | 良好 |
| 複切られる | S D 3 5 調査区外 | 主柱穴 | 調査部分に1本 |
| プラン | 方形 | 住居内施設 | 貯藏穴 |
| 規模m | | 入 口 | |
| 主軸 | | カ | 形 状 袖石1個づつを入れた粘土 |
| 壁高cm | 8 5 | マ | 規 模 cm 1×0.9 |
| 壁の状態 | 急に立ち上がる | ド | 特記事項 築き直しあり |
| 出土遺物(第20~21図) | やや少ない。掲載した図版の半分は石器である。20-4は混入の弥生時代壺の底部で布目痕が残る。土師壺5~9は6を除いて、外面に範磨きが施され底部は範削りで調整される。6は横・乱れ撫でで調整され底部は範削りであるがきれいに調整される。21-4は台石で焼けて赤褐色に変色しており、硬砂岩である。5・6は磁石で5は砂岩、6は硬砂岩である。図化しない遺物にカマド中から出土した焼骨・炭がある。 | | |
| 特記事項 | 1/4調査 調査部分に切り合が無く壁の残存良好 | | |
| 時期 | 古墳時代後期 | 根拠 | カマドと出土遺物 |

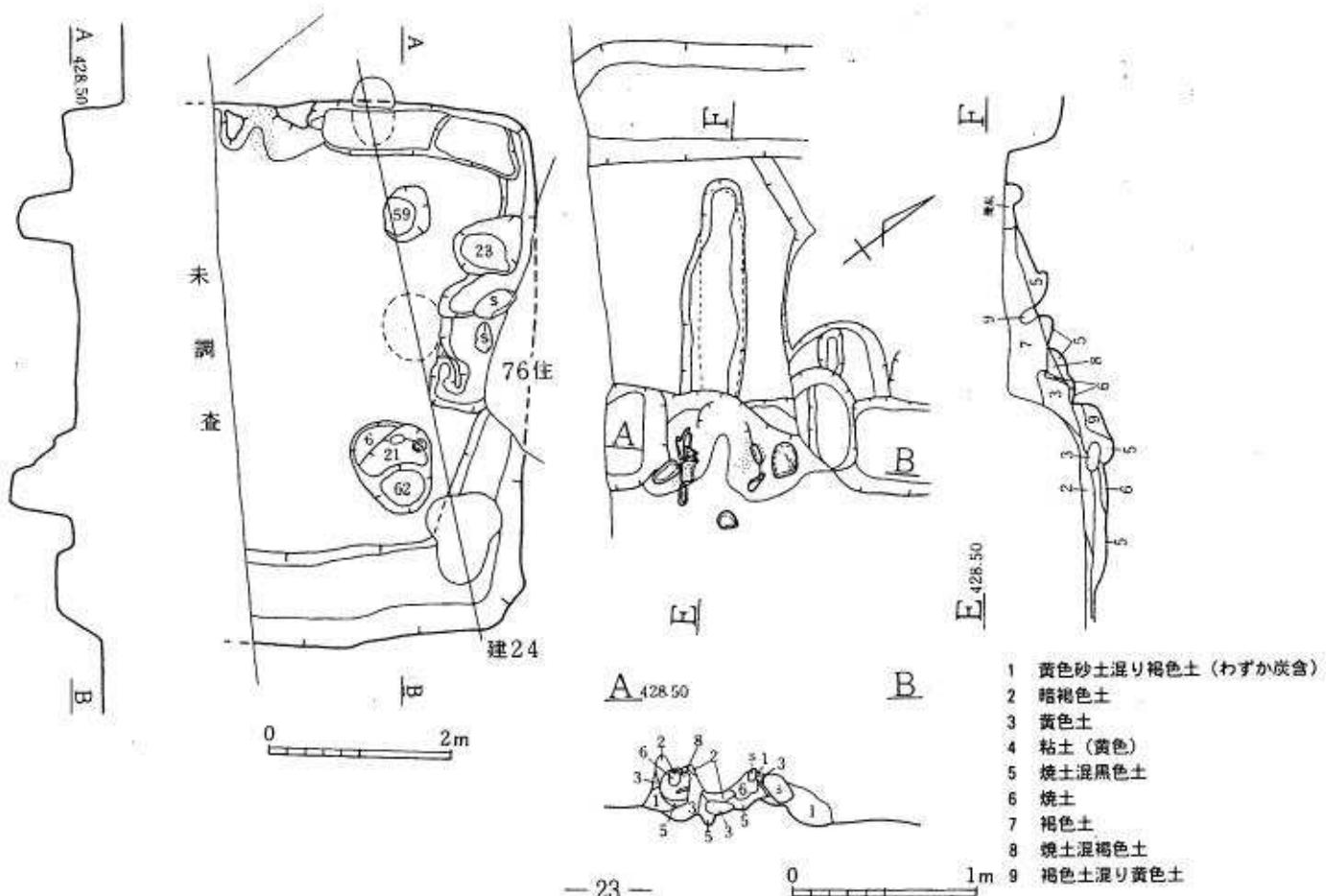
挿図19 83号住居址



⑧ 83号住居址 (挿図19)

| | | | |
|----------------|--|----------|------------------|
| 検出位置 | AF 20 | 覆土 | 暗褐色土・褐色土凸レンズ状に入る |
| 重複切る | | 床面 | 良好 |
| 複切られる | ST 24 調査区外 | 主柱穴 | 1本確認 |
| 規格 | プラン 隅丸方形 | 貯藏穴 | |
| 規模 | m | 入 口 | |
| ・形 | 主軸 | カ 形 状 | |
| 壁高 cm | 20前後 | マ 規 模 cm | |
| 壁の状態 | 急に立ち上がる | ド 特記事項 | 床面中央付近に焼土あり |
| 出土遺物 (第21-22図) | わずかである。図の取れた須恵器坏21-7が1点他は甕の破片である。土師器で実測可能な物は無い。編物石22-1~6が多い。石製紡錘車8は完形品である。7は敲打器。 | | |
| 特記事項 | 1/3調査 壁下に幅の広い周溝あり | | |
| 時期 | 古墳時代後期 | 根拠 | 出土遺物と切り合い |

挿図20 84号住居址



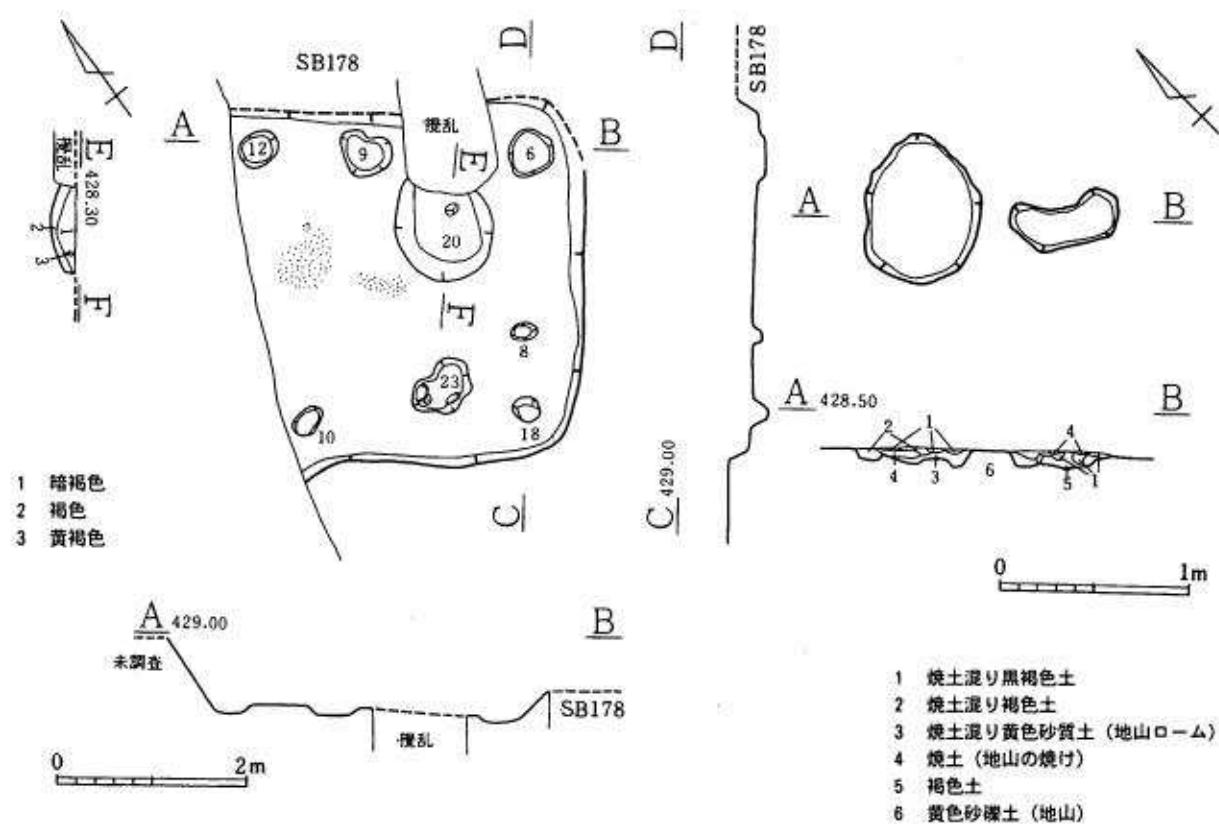
⑨ 84号住居址 (挿図20)

| | | | |
|----------------|---|-------|----------------------|
| 検出位置 | AD 2 3 | 覆土 | 暗褐色土のほぼ一層 |
| 重切る | SB 7 6 | 床面 | 良好 |
| 複切られる | ST 2 4 調査区外 | 主柱穴 | 調査部分で2本確認 |
| プラン | 隅丸方形 | 住居内施設 | 貯蔵穴 |
| 規模 | m 5.7 × () | 内施設 | 入口 |
| 主軸 | N 60° W | カマド | 形状 袖先端に石1個を入れる粘土 |
| 壁高 | cm 30 | マ | 規模 cm 1 × 1.8 煙道 2.2 |
| 壁の状態 | 急に立ち上がる | ド | 特記事項 煙道を確認 |
| 出土遺物 (第23・24図) | やや多い。土師器甕23-1~12 大小、胴部の形に差あり。高坏が少なく、土師器の坏部24-1・2で実測可能な物はこれだけで、2点共に黒色処理が成される。3は須恵器高坏の脚部である。7は砂岩の砥石である。 | | |
| 特記事項 | 1 / 2 調査。壁下に幅の広い周溝あり。カマドの煙道長い。 | | |
| 時期 | 古墳時代後期 | 根拠 | カマドと出土遺物 |

⑩ 85号住居址 (挿図16)

| | | | |
|-------------|--|-------|-------|
| 検出位置 | A 1 3 0 | 覆土 | 褐色土一層 |
| 重切る | | 床面 | やや軟 |
| 複切られる | SB 8 0 | 主柱穴 | |
| プラン | | 住居内施設 | 貯蔵穴 |
| 規模 | | 内施設 | 入口 |
| 主軸 | | カマド | 形状 |
| 壁高 | cm 50前後 | マ | 規模 cm |
| 壁の状態 | 急に立ち上がる | ド | 特記事項 |
| 出土遺物 (第24図) | ごく少ない。図取り可能な物は、土師器8と使用痕光沢の付いた石器9の2点である。9は有肩扇状石斧で欠損の混入品である。 | | |
| 特記事項 | SB 8 0 に切られごくわずか調査した | | |
| 時期 | 古墳時代後期 | 根拠 | 出土遺物 |

挿図21 177号住居址

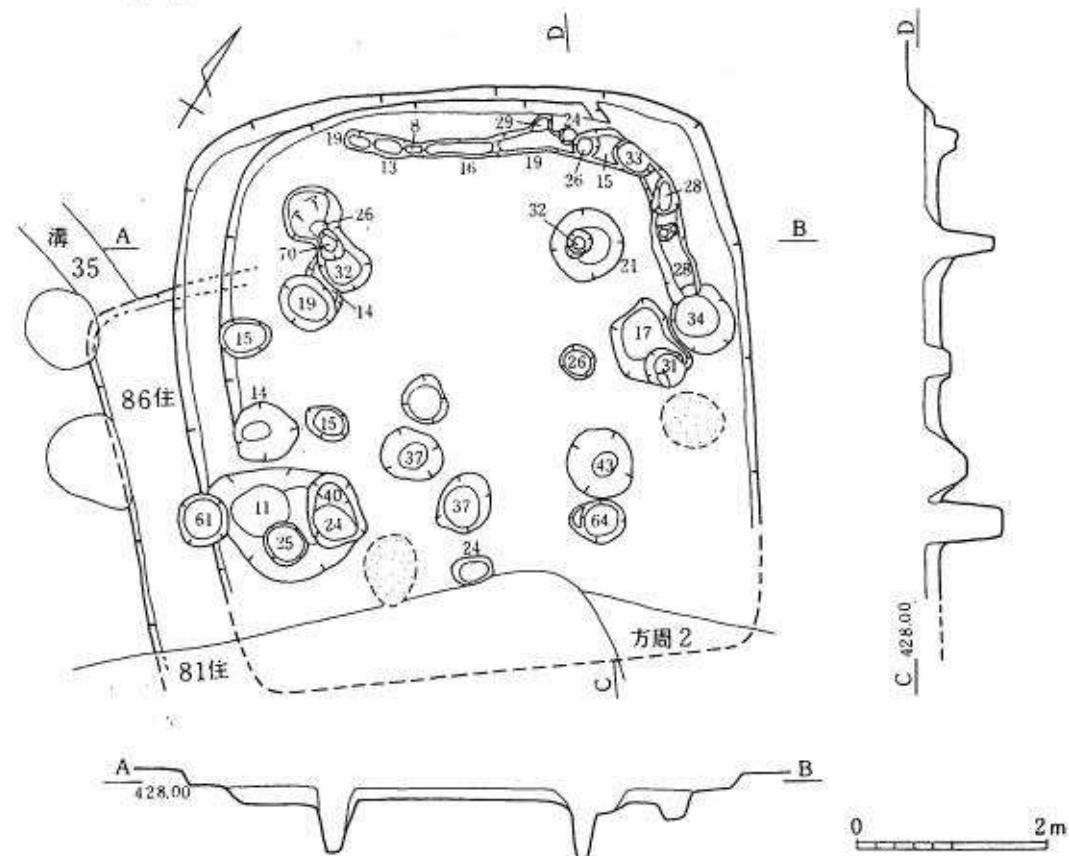


⑪ 177号住居址 (挿図21)

| | | | |
|-------------|--------------------------------------|---------|--------------------|
| 検出位置 | AN 3 2 | 覆土 | 褐色土ほぼ一層 |
| 重切る | SB178 | 床面 | 良好 |
| 複切られる | 調査区外 搅乱 | 主柱穴 | 住居址内の穴皆浅い |
| プラン | 隅丸方形 | 貯藏穴 | |
| 規模 m | 3.8 × () | 入 口 | |
| 主軸 | | カ形状 | |
| 壁高 cm | 22~14 | マ 規模 cm | |
| 壁の状態 | 急に立ち上がる | ド 特記事項 | 床面中央付近に地床炉的な物2か所あり |
| 出土遺物 (第28図) | 出土量は少なくすべて破片で、全体形の把握できる物は無い。土師器壺・甕・塙 | | |
| | ・高坏、須恵器壺・甕である。 | | |
| 特記事項 | 精査しても主柱穴が確認できなかった | | |
| 時期 | 古墳時代後期 | 根拠 | 出土遺物に須恵器あり |

3) 奈良・平安時代

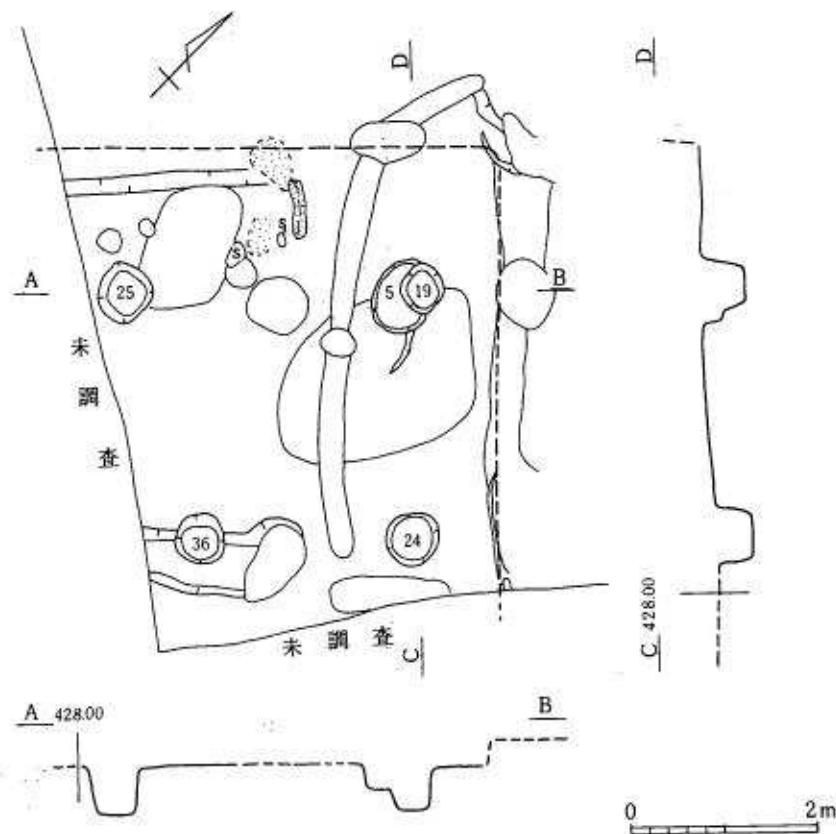
挿図22 74・86号住居址



① 74号住居址 (挿図22)

| | | | |
|---|----------------------|-------|-------|
| 検出位置 | AE 2 9 | 覆土 | 褐色土 |
| 重複 | 切る SB 81・86・87 SM 2 | 床面 | 良好 |
| 規模 | 切られる | 主柱穴 | 4本 |
| 形 | プラン 隅丸方形 | 住居内施設 | 貯藏穴 |
| 規模 | m 6 × 6 | 入 | 口 |
| 形 | 主軸 | カ | 形狀 |
| 壁高 | cm 20前後 | マ | 規模 cm |
| 壁の状態 | 緩く立ち上がる | ド | 特記事項 |
| 出土遺物 (第7~8図) やや少ない。7-1~3 土師器甕で長胴。4は土師器瓶である。7は土師器鉢で内面下半分が雑に箒磨きされ、外側底部は箒削り調整される。8~10は土師器壺で黒色処理されたものがある。須恵器は11~13で、11が1/2 現存の他は図が取れるだけの現存である。8図の石器はほとんどが混入品であろう。5~8は弥生時代の磨製石鎌未製品である。 | | | |
| 特記事項 | 西壁は2段になり壁と壁の間は40cm前後 | | |
| 時期 | 奈良時代初頭 | 根拠 | 出土遺物 |

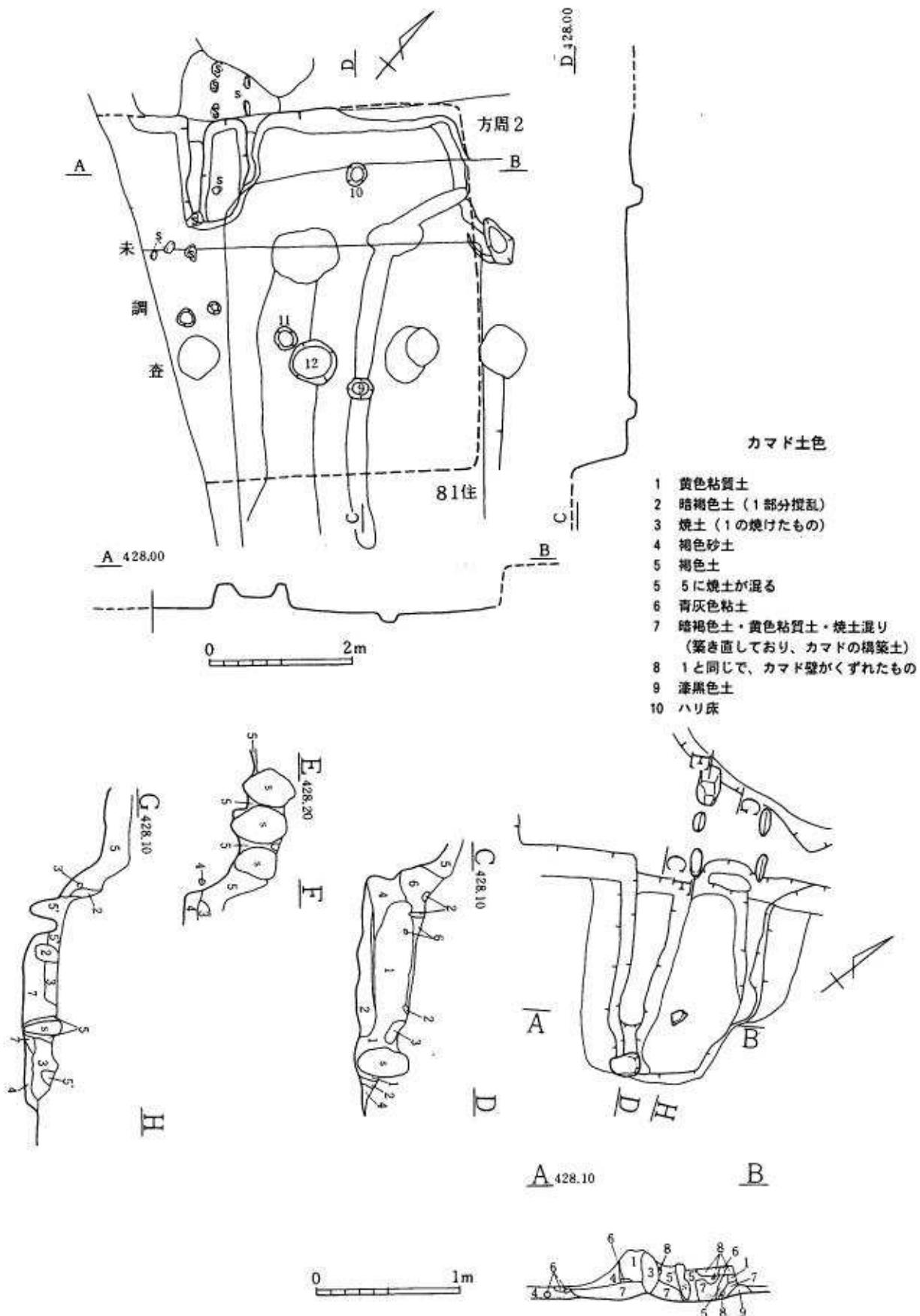
挿図23 81号住居址



② 81号住居址 (挿図23)

| | | | |
|----------------|--|--------|----------|
| 検出位置 | AC 3 1 | 覆土 | |
| 重切る | SB 7 8 | 床面 | 凹凸あり |
| 複切られる | SB 8 7 調査区外 | 主柱穴 | 調査部分3本確認 |
| プラン | 推定隅丸方形 | 貯藏穴 | |
| 規模 m | 推定(5) × (5) | 入口 | |
| 主軸 | 推定N 55° W | カ形状 | |
| 壁高 cm | | マ規模 cm | |
| 壁の状態 | 不良 | ド特記事項 | 土と支脚の石のみ |
| 出土遺物 (第18~19図) | 少ない。18-11は土師器甕で2/3現存しており長胴である。6はフイゴの羽口。19-7は鋳物の型らしく部分的に滑らかになっており、砂の塊で軽く表面は鋳色を呈する。8は鉄製品でカスガイと推測した。弥生時代~古墳時代の混入遺物が多く石器9・14・15がそうである。 | | |
| 特記事項 | 羽口・鉄滓の出土があり鍛冶工房址の可能性も比定できる。周溝が少し残っていた。張床が状態良く2か所残っていた。 | | |
| 時期 | 奈良時代後半 | 根拠 | 住居址の切り合い |

挿図24 87号住居址

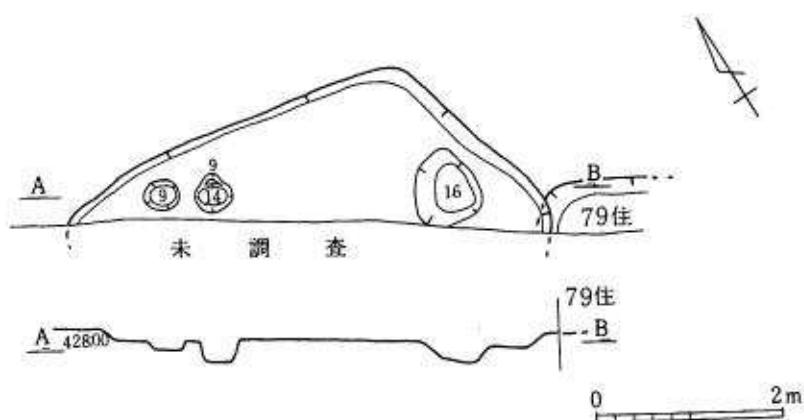


③ 87号住居址 (挿図24)

| | | | |
|------------|---|-------|--------------------|
| 検出位置 | AC 28にカマド | 覆土 | |
| 重切る | SB 78・81 | 床面 | SB 81との区別つかず |
| 複切られる | | 主柱穴 | 2本確認 |
| プラン | 推定隅丸方形 | 貯藏穴 | |
| 規模m | | 入口 | |
| 主軸 | N 63° W | カ形状 | 袖先端に石を持つ粘土煙道に石を入れる |
| 壁高cm | 60前後 | マ規模cm | 1.4×1 煙道残0.8 |
| 壁の状態 | 残っている部分は不良 | ド特記事項 | 煙道に石を使う |
| 出土遺物(第24図) | 少ない。10は土師器甕で実測部分ほぼ現存。11・12は須恵器で11は壺の胴下部、12は壺の底部で乾燥台痕残る。 | | |
| 特記事項 | カマドの現存が良好のみ | | |
| 時期 | 平安時代前半 | 根拠 | 出土遺物と切り合い |

4) 時期不明

挿図25 77・79号住居址



① 77号住居址 (挿図25)

| | | | |
|------------|---|-----|---------|
| 検出位置 | AC 2 6 | 覆土 | 褐色土ほぼ一層 |
| 重切る | | 床面 | 良好 |
| 複切られる | 調査区外 | 主柱穴 | |
| プラン | 隅丸方形 | 貯蔵穴 | |
| 規模m | | 入口 | |
| 主軸 | | 内施設 | 形状 |
| 壁高cm | 10前後 | マ | 規模cm |
| 壁の状態 | 良好 | ド | 特記事項 |
| 出土遺物(第14図) | ごくわずか出土したのみ。土師器壺の底部14-1・2。須恵器の胸部片3。石器4~8 でありあとは実測不可。 | | |
| 特記事項 | 調査部分わずか | | |
| 時期 | 不明 | 根拠 | 遺物量が少ない |

② 79号住居址 (挿図25)

| | | | |
|------------|---------------|-----|----------|
| 検出位置 | AB 2 7 | 覆土 | |
| 重切る | SB 77・87と切り合う | 床面 | |
| 複切られる | 調査区外 | 主柱穴 | |
| プラン | 推定隅丸方形 | 貯蔵穴 | |
| 規模m | | 入口 | |
| 主軸 | | 内施設 | 形状 |
| 壁高cm | | マ | 規模cm |
| 壁の状態 | | ド | 特記事項 |
| 出土遺物(第18図) | きな臼玉1個のみ | | |
| 特記事項 | ごくわずか調査した | | |
| 時期 | 不明 | 根拠 | 遺物ほとんど無い |

③ 86号住居址 (挿図22)

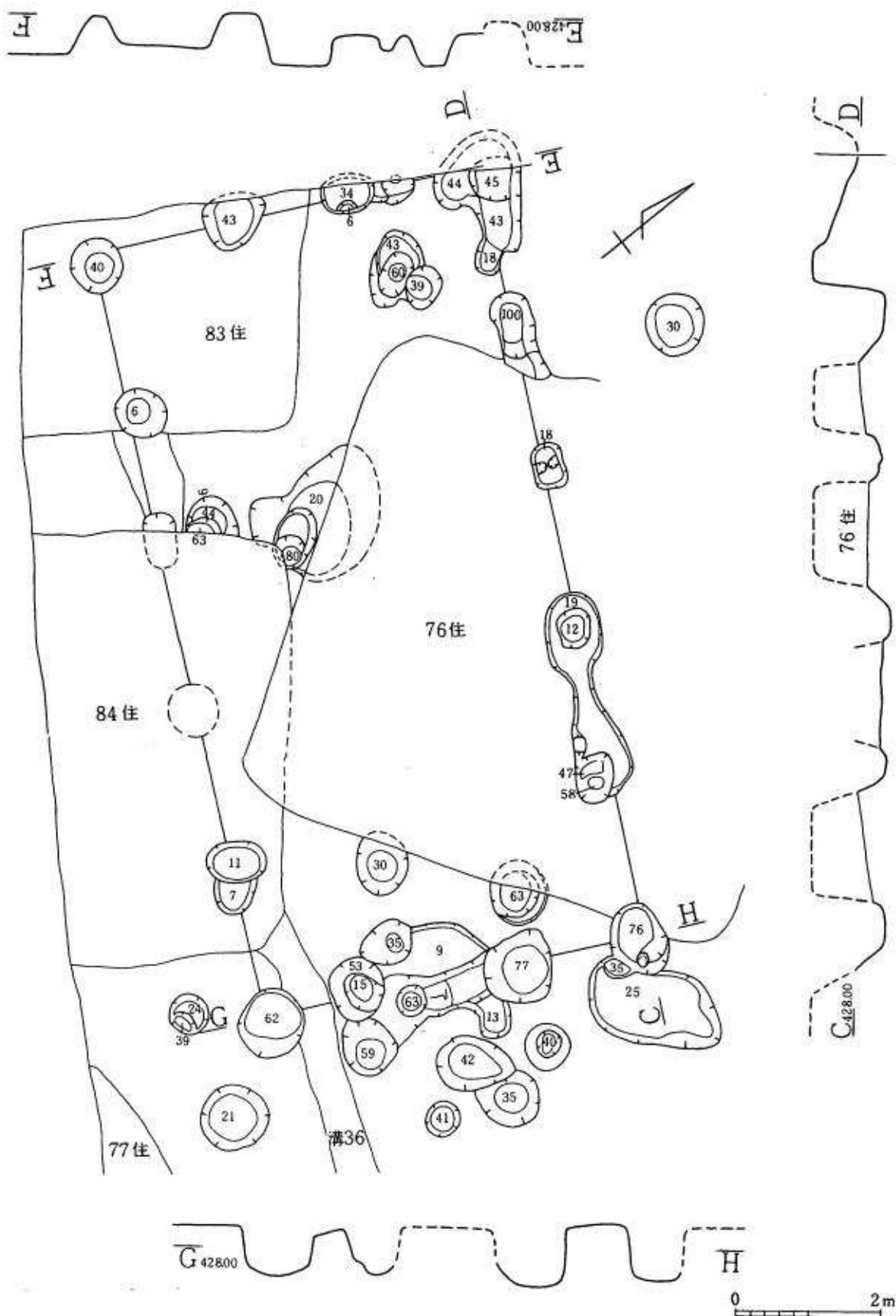
| | | | |
|--------------|-------------------|-------|-------------------------------------|
| 検出位置 | AD 2 8 | 覆土 | |
| 重切る | AB 7 4・8 1と切り合う | 床面 | |
| 複切られる | SD 3 5 | 主柱穴 | |
| 規模 | プラン 規模 m 主軸 | 住居内施設 | 貯藏穴 入口 カ形状 マ規模 cm ド特記事項 |
| 形 | 壁高 cm 壁の状態 | | |
| 出土遺物 (第7~8図) | 遺物で実測可能な物は無い | | |
| 特記事項 | ごくわずか調査 | | |
| 時期 | 不明 | 根拠 | 遺物ごく少ない |

2 掘立柱建物址

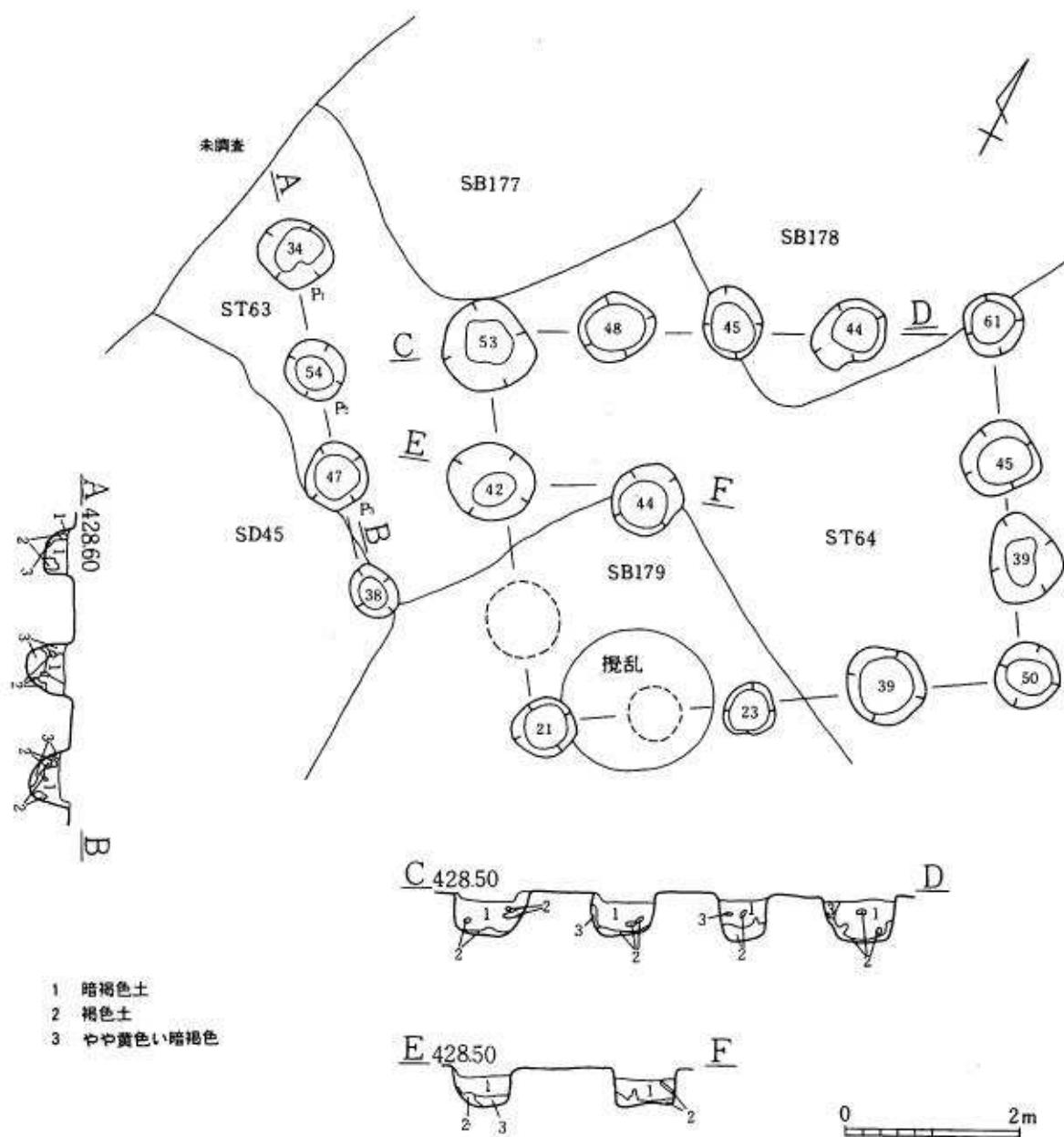
① 掘立柱建物址24 (挿図26)

| | | | |
|-------------|----------------------------------|----|------------|
| 種別 | 側柱 | 形狀 | 楕円~円 隅丸方形 |
| 検出位置 | AD~AF 2 0~2 6 | 堀 | 最長経 m 1 |
| 行方位 | N 7 3° W | | 最短経 m 0. 4 |
| 規 | 梁柱間 3 | 深 | 最深 cm 7 0 |
| 行 | 長さ m 6 | さ | 最浅 cm 3 4 |
| 模 | 桁柱間 5 | 方 | 埋土 暗褐色土 |
| 行 | 長さ m 1 1. 5 | | 柱痕 |
| 切り合い | SB 7 2・7 3・7 6・8 3・8 4 SD 3 6を切る | | |
| 出土遺物 (第33図) | 1・3 はP11出土、3 はP11のグリットから出土している。 | | |
| 特記事項 | S B 8 4 中の柱穴 1 個不明 | | |
| 時期 | 古墳時代末~奈良時代 | 根拠 | 須恵器の蓋片から |

挿図27 建物址63・64



挿図27 建物址63・64



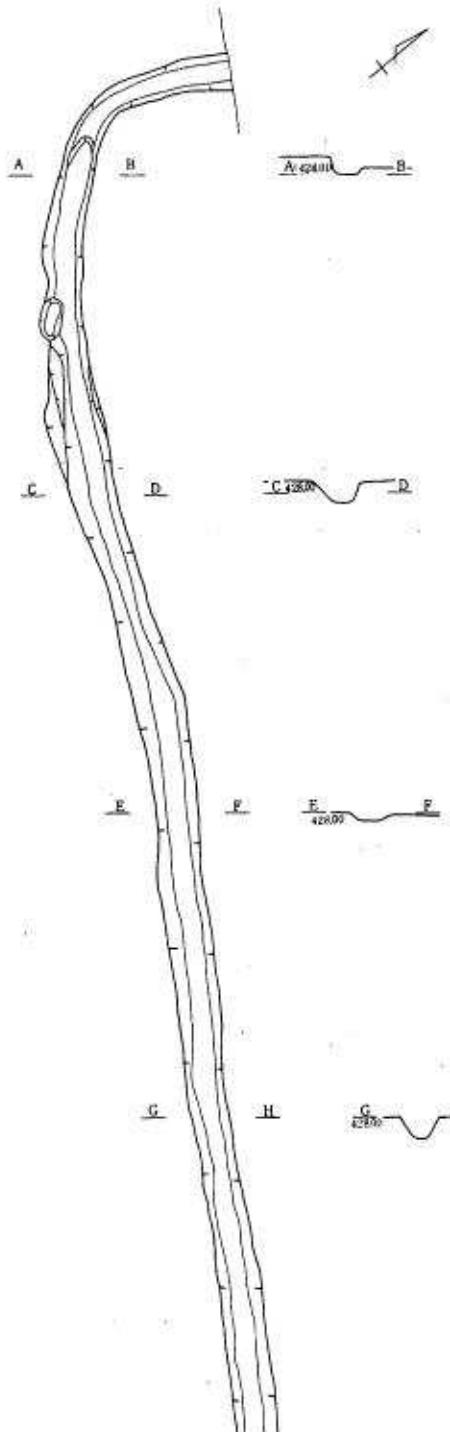
② 掘立柱建物址63 (挿図27)

| | | | | | | |
|-------------|--|--------|-------------------|-------|----------|--|
| 種別 | 梁行き 1列のみ | | 掘 | 形狀 | ほぼ円形 | |
| 検出位置 | AK 32・AL 31 | | | 最長経 m | 80 | |
| 桁行方位 | 推定 N 38° W | | | 最短経 m | 45 | |
| 規 行 | 梁柱間 | 推定 3 | | 深さ | 最深 cm 54 | |
| | 長さ m | 推定 4.6 | | 最浅 cm | 34 | |
| 模 行 | 桁柱間 | | | 埋土 | 暗褐色土・褐色土 | |
| | 長さ m | | | 柱痕 | | |
| 切り合い | SD 45 を切る。調査区外にかかる。 | | | | | |
| 出土遺物 (第33図) | P3 出土の高台付壙片がSD45の遺物と接合したがSD45を切っている為である。 | | | | | |
| 特記事項 | SD45覆土中の掘方は確認できず推定梁行きを1列調査したのみ。 | | | | | |
| 時期 | 古墳時代末～奈良時代 | 根拠 | 須恵器わずか返りのある蓋が出ている | | | |

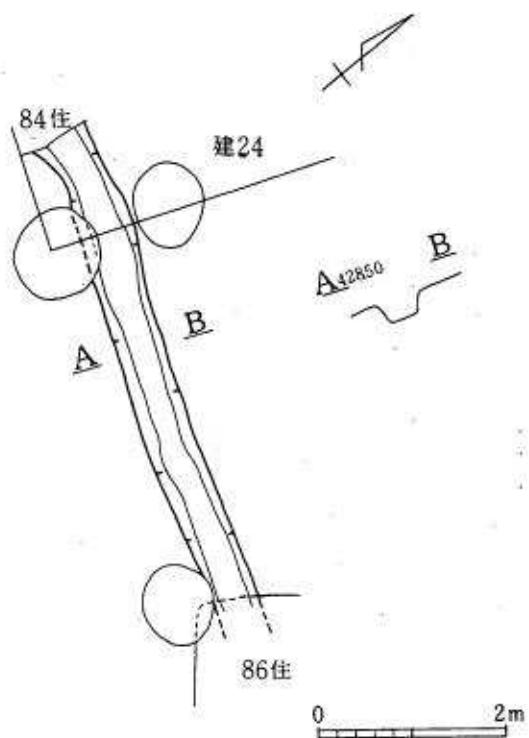
③ 掘立柱建物址64 (挿図27)

| | | | | | | |
|-------------|---|-----|------|-------|----------|--|
| 種別 | 側柱 | | 掘 | 形狀 | 円～不整円 | |
| 検出位置 | AL 34 が中央 | | | 最長経 m | 100 | |
| 桁行方位 | N 55° E | | | 最短経 m | 80 | |
| 規 行 | 梁柱間 | 3 | | 深さ | 最深 cm 61 | |
| | 長さ m | 4.8 | | 最浅 cm | 39 | |
| 模 行 | 桁柱間 | 4 | | 埋土 | 暗褐色土 | |
| | 長さ m | 6.6 | | 柱痕 | | |
| 切り合い | SB 178・179 を切る | | | | | |
| 出土遺物 (第33図) | 5は内側に反りのある蓋。5の石器は弥生時代住居址の178・179号住居址を切っている為である。 | | | | | |
| 特記事項 | 切り合いの無い所は明瞭 | | | | | |
| 時期 | 古墳時代末～奈良時代 | 根拠 | 須恵器蓋 | | | |

挿図28 溝址35・36



溝址35



溝址36

3 溝址

① 溝址35 (挿図28)

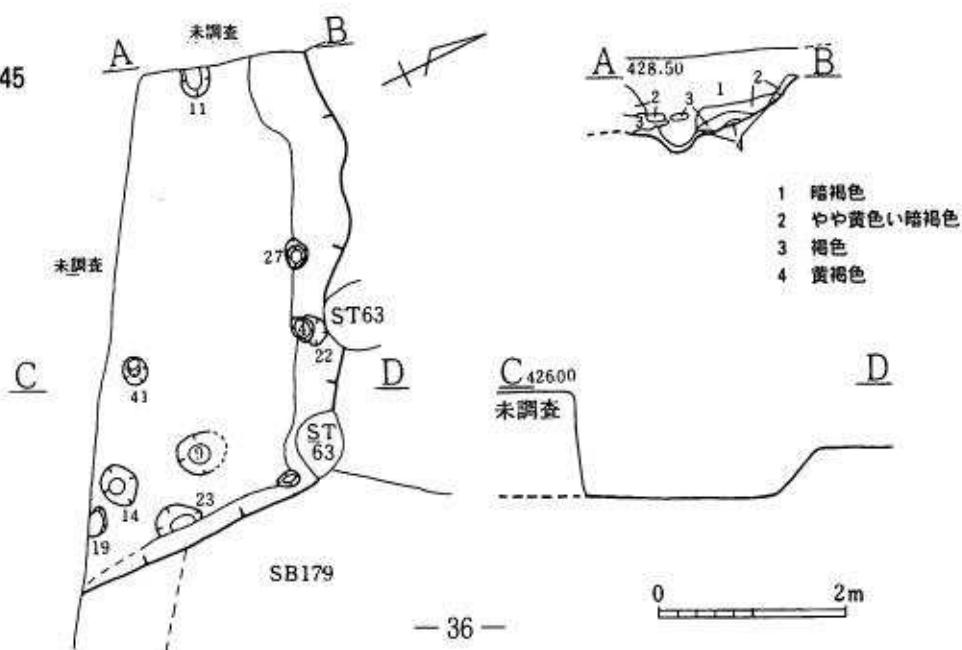
| | | | |
|-------------|--|---------------------|------------------------------------|
| 検出位置 | AF34～AK25 | 覆土 | 暗褐色土のほぼ一層 |
| 切り合い | SB71・80・82 | 調査部両端 | |
| 形状 | U字形 | 比高差 cm | 30 |
| 規模 | 長さ m 幅 cm 深さ cm | 23 75前後 30～15 | 性格 区画の溝 主なる方位 N75°W N20°E |
| 出土遺物 (第33図) | 12は灰釉のかかった天目茶碗片。AH28から11の鹿角が出土している。混入の石器が多い。 | | |
| 特記事項 | SB71覆土中で曲がるのが明瞭に検出できた。 | | |
| 時期 | 中世 | 根拠 | 天目茶碗 |

② 溝址36 (挿図28)

| | | | |
|-----------|--------------------------|--------------------------|----------------------|
| 検出位置 | AD・AE22～28 | 覆土 | 褐色土ほぼ一層 |
| 切り合い | SB81・83・84・86 | 調査部両端 | |
| 形状 | U字形 | 比高差 cm | 40 |
| 規模 | 長さ m 幅 cm 深さ cm | 調査部分10 50～40 30～15 | 性格 主なる方位 N78°W |
| 出土遺物 (第図) | 古墳時代の土師器片が少量、図化できるものは無い。 | | |
| 特記事項 | 古墳時代後期の住居址覆土中には検出できない | | |
| 時期 | 古墳時代前期 | 根拠 | 弥生時代の土器が入らず須恵器も無い |

挿図29

溝址45

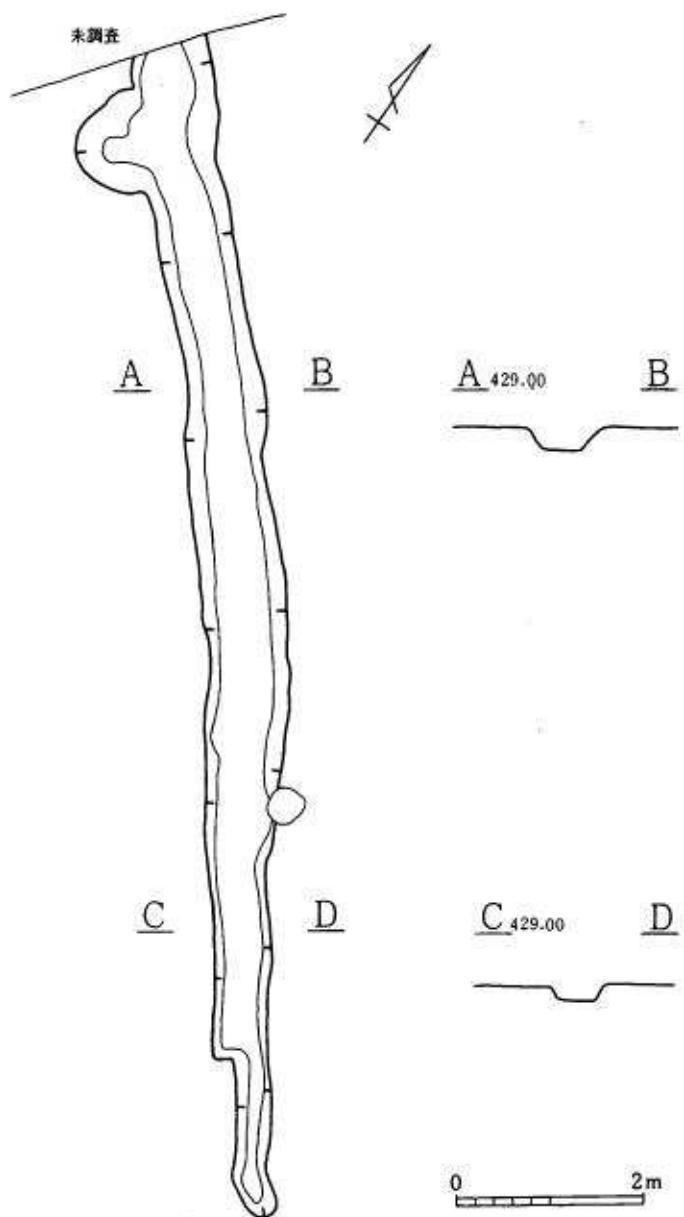


③ 溝址45 (挿図29)

| | | | |
|-------------|---------------------------------|--------|---------|
| 検出位置 | A I・AK 30~33 | 覆土 | 暗褐色土 |
| 切り合い | S B197切る ST63切られる | 調査部両端 | |
| 形状 | 大きな凹状 | 比高差 cm | 30 |
| 規模 | 長さ m 調査部分 5 幅 cm 深さ cm 45 | 性格 | |
| | | 主なる方位 | N 78° W |
| 出土遺物 (第33図) | 古墳時代土師器の甕 | | |
| 特記事項 | S 63年の調査範囲では検出せず | | |
| 時期 | 古墳時代後期 | 根拠 | 出土遺物 |

挿図30

溝址47

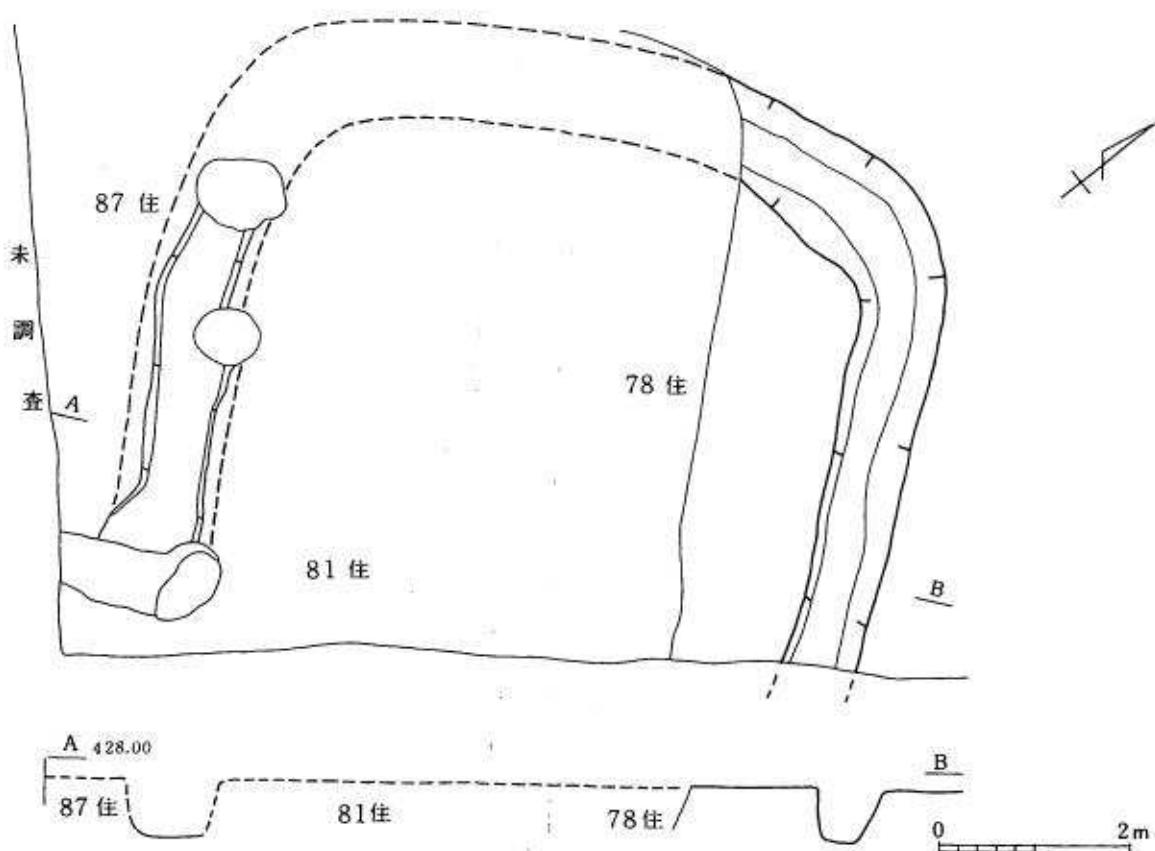


⑤ 溝址47 (挿図30)

| | | | |
|-------------|-----------------------|--------------|----------|
| 検出位置 | AN~AR 33~37 | 覆土 | 漆黒色土~黒色土 |
| 切り合ひ | 穴 | 調査部両端 | |
| 形 状 | 浅いU字形 | 比高差 cm | 1.4 |
| 規 模 | 長さ m 幅 cm 深さ cm | 性 格 主なる方位 | N 40° W |
| 出土遺物 (第33図) | 15の土師器坏が実測可能であったのみ。 | | |
| 特記事項 | 明瞭に検出できたが性格不明 | | |
| 時期 | 古墳時代 | 根拠 | 出土遺物 |

4. 方形周溝墓

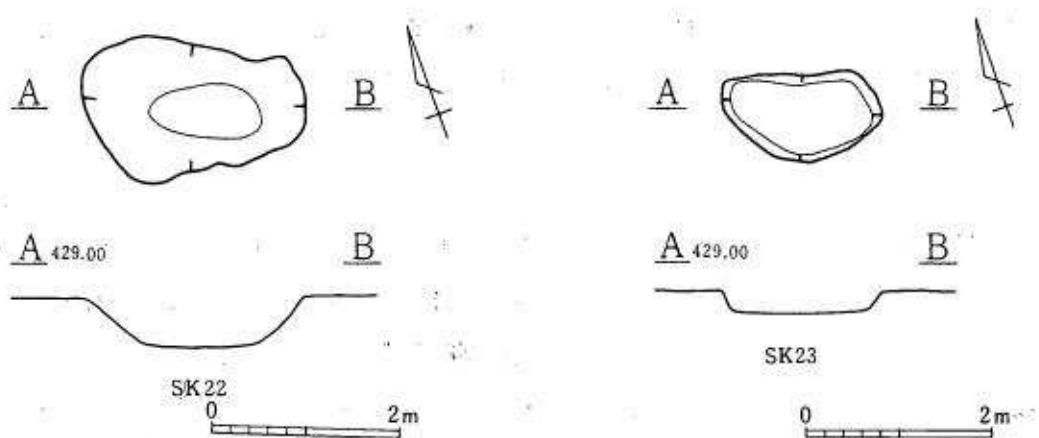
挿図31 方形周溝墓 2



① 方形周溝墓 2 (挿図31)

| | | | | |
|--------|----------------|----|-------------|----------------|
| 検出位置 | AD・AE 30~33 | | 主体部 | |
| 切られる | SB 74・78・81・87 | | 覆土 | 褐色土 |
| 溝の形状 | 不整U字形 | | 長経方位 | |
| 規 模 | 長径 m | 4 | 出土遺物 (第33図) | 図化できたのは打斧16のみ。 |
| | 短径 m | | | |
| | 深さ cm | 25 | | |
| 特記事項 | | | | |
| 時期 | 弥生時代 | | 根拠 | 溝の形状 |

5. 土坑



挿図31 土坑22・23

① 土坑22 (挿図32)

| | | | | | | | | |
|------|----------|-----|------|------|------|---------|--------|------------|
| 検出位置 | AR 39・40 | | 覆土 | 暗褐色土 | 長経方位 | N 80° W | 形状 | 隅丸不整長方形 |
| 長経m | 1. 2 | 短経m | 0. 5 | 深さcm | 30 | 出土遺物 | 小破片が少量 | 特記事項 性格等不明 |

| | | | | | | | | |
|------|----------|-----|------|------|------|---------|--------|------------|
| 検出位置 | AR 39・40 | | 覆土 | 暗褐色土 | 長経方位 | N 70° W | 形状 | 不整楕円形 |
| 長経m | 1. 6 | 短経m | 0. 8 | 深さcm | 20 | 出土遺物 | 小破片が少量 | 特記事項 性格等不明 |

5 遺構外出土遺物 (第34~38図)

1) 縄文時代

概期で実測可能な土器は無く、中期～晚期の土器片である。概期の遺構は確認されておらず、すべて付近からの混入である。36-1～3は中期の深鉢片で、4・5は晚期の深鉢片である。

2) 弥生時代

概期の土器片は多出しているが、復元・実測可能な物はわずかである。挿図34・35は4742番地の遺構外遺物である。34-10は小型の甕で3／4現存している。8・9は壺の底部ではほぼ現存しており、底は前者が滑らかで後者は布痕が残る。他は拓本で、中期～後期の壺の胴上部から頸部である。石器には磨製・打製の石斧があり打製には使用痕が残る。他に横刃型石器・打製石包丁・高支打器がある。高支打器には長い物と、短い物がある。36～38図は4741番地で、概期は36-7～11、37-12・13、38-3～5である。36-6～8は壺の胴上部～頸部の施文部である。9は中期甕で口縁部に最大径を持ち、口唇部に縄文頸部に大きな波状文、胴部に羽状条線文が施される。10は甕の底部で木葉痕、11は壺の底部で布痕と粉殻圧痕が残る。打製石斧は硬砂岩製の37-12・13である。38-3～5は磨製石鎌とその未製品であり、3はほぼ完成品であるが孔が貫通していない。4・5は未整品である。

3) 古墳時代

概期は土師器・須恵器・鉄製品があり、小片であるが出土量は多い。土師器は甕36-12高坏34-11・36-13～19、須恵器34-12～17・37-1～9、鉄器37-14、ガラス玉37-15である。土師器甕の破片が多いが実測できたのは36-12の一つだけである。高坏脚部の残りが良く、実測できたのも多い。34-11は脚台部で稜が着き、坏部にも稜を持つと考えられる。36-13・14も高坏の坏部で14には稜が一段残り、内側には種子の痕跡が残りが粉殻の可能性が高い。36-15～19は脚の胴部で形態は似ている。須恵器は蓋・壺・高坏・瓦泉であり、34-12・13は内側に反りを持つ形態で、後期終末に位置付けられる。壺は34-14・37-1～5・8であり14は長頸壺の頸部、37-1～5は短頸壺の頸部と胴部片である。高坏は34-15～17・37-6・7である。6・7の高坏は初期須恵器で5世紀中項に位置付けられる。34-16も古い形態で一条の稜と沈線二条に重ねて波状文が施され、脚部の折れ口は磨ってあり坏への転用が推測される。15・17は比較的新しい形態を持ち15の脚部折れ口も磨ってある。鉄製品は37-14の鎌で、逆棘が片方の形態であり茎を欠く。

4) 奈良・平安時代

奈良時代の遺物は無く、平安時代の遺物は、糸切り平底の土師器坏の破片一点と灰釉陶器皿片二点である。灰釉陶器皿34-18は1／5現存し全体形が把握できる。同じく37-10は底部1／6の現存であり、前者より大型である。前者の釉薬は筆で丁寧に掛けられており、後者は漬掛である。高台は両者共に貼っており、後者の高台内側稜に乾燥台痕が残る。

5) 中世

概期遺物には陶磁器片がある。山茶碗片二点34-19、37-11は、共に貼り高台で高台内側に回転糸切りが残っている。前者は1／3残っており、高台には枠殻圧痕がある。後者の高台は焼成に焼き着いたらしく先端部が欠けており、内面に重焼の枠殻圧痕がある。

6) 時期不明

石器・鉄器・磁石・ガラス小玉など時期不明遺物が多い。

IV まとめ

1985年（昭和60年）にバイパスが開通し、バイパスに接した土地の開発は目覚ましく進んでいる。建設調査で遺跡の重要性が確認され、沿線開発には建物部分の遺跡発掘調査が行われた。また昭和57年度から飯田市教育委員会が継続実施している重要遺跡遺跡範囲確認調査で、平成6年度に郡衙の正倉が確認され正庁の位置もそこから遠くない位置に所在すると推定されるに至っている。本書の2つの調査区は、1988年（昭和63年）と1996年（平成8年）の2回にわたり調査を行うことになったが、郡庁付属機関の存在が推測された場所である。2つの調査区はバイパスに向かってL字を呈する。L字の2方向が約30mであるが出土遺構に差がある。4742番地に古墳時代もしくは時代のやや下がる建物址、4741番地に弥生時代の住居址がある。弥生時代住居址の炉が4742番地にもあり該期の住居址は散在的に広範囲に及ぶ可能性がある。4742番地の古墳時代の住居址は重複があり、この地点から南西に広がっていたことがR153バイパス調査等から確認できる。時代毎概観することで調査報告書のまとめとしたい。

（1）弥生時代

該期は5軒の竪穴住居址を確認した。中期後葉が一軒で他は後期初頭である。当調査地点には後期中葉～後葉の遺構が確認されず、R153バイパス調査時にも同様であった。中期後葉～後期初頭の集落がここを含めて広がっていたといえる。後期初頭四軒に土器形態から見て二時期があり、175・178号住居址はやや古さが見られ、75・179号住居址はその次の時期であろう。4742番地は弥生時代の遺物は出土するが古墳時代の住居址が重複し、住居址の把握はできなかった。

（2）古墳時代

該期で確認できた住居址はすべて後期で、さらにいくつかの小時期に細分される。4742番地では密に分布し、本調査箇所周辺での調査により古墳時代竪穴住居址の数は極めて多く、本遺跡群の人口が飛躍的に増加したことが推測される。調査箇所北北西350m位置する高岡1号古墳を盟主とした座光寺古墳群が形成されており、それを支えた大規模な集落と、古墳を構築できる生産力が指摘できる。4742番地の調査中に東接する市道に、上水道を入れる工事があり市道がわずか高くなつた箇所が古墳であることが確認された。4741番地の中間で、古墳住居址の検出されない所があり、古墳と住居址の区割り意識の存在も推測される。

（3）奈良・平安時代

住居址は3軒、建物址3軒が古墳時代末から奈良時代に比定される。住居址の詳細時期は74号が古墳時代終末～奈良時代初頭、81号が奈良時代後半、87号が平安時代に比定した。建物址3軒からは、須恵器蓋の内側に反りが着いた遺物、須恵器高台壺が出土している。建物址24は桁行5間で11.5mあり大きく、バイパス調査時の建物址との関連が考えられ、郡衙の一角に含まれる建物址であろう。

(4) 中世

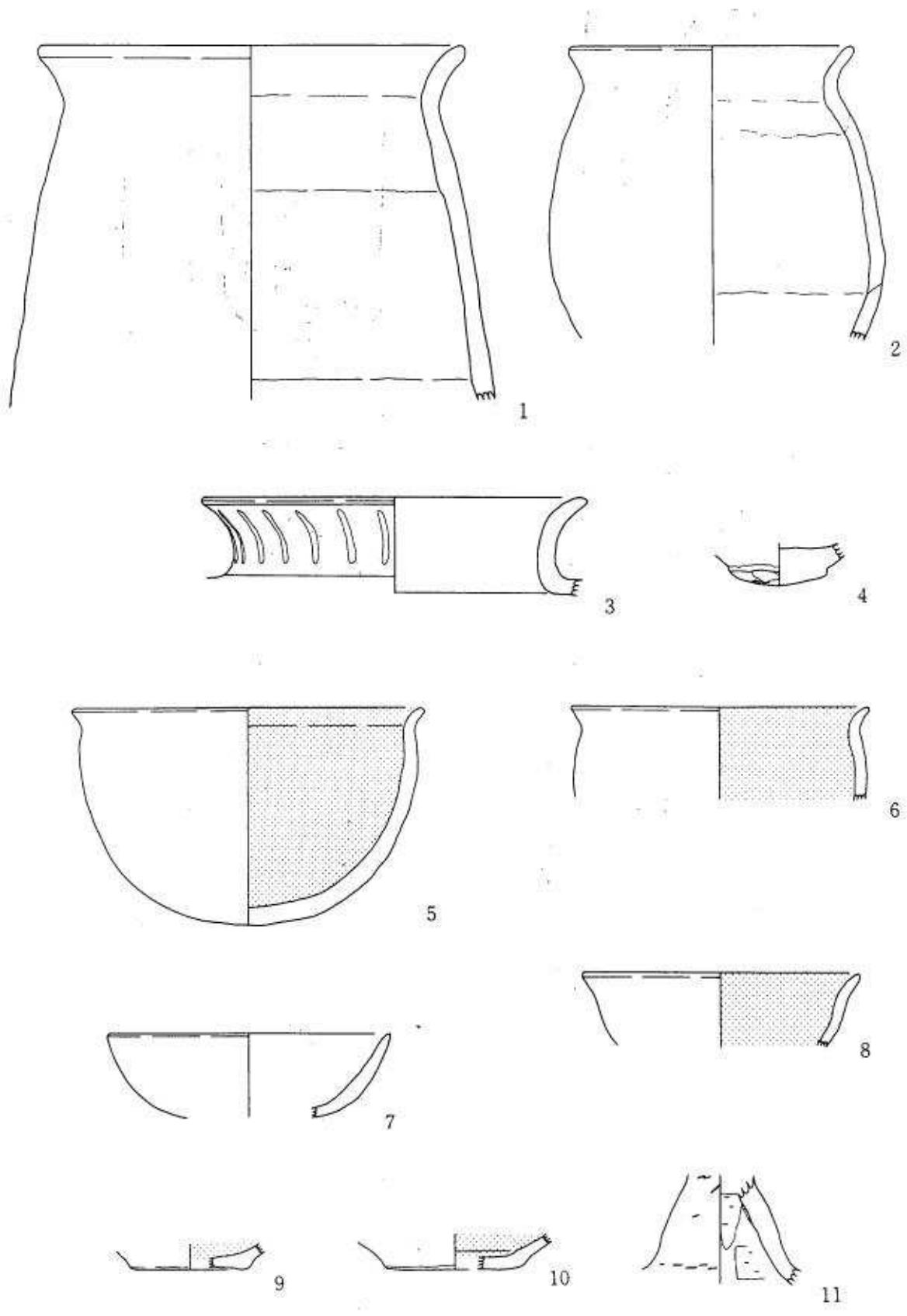
中世と比定できたのは溝址35のみである。調査区内で90° 方向を変えるのが確認でき屋敷の区溝と推定できる。遺物は調査区全体から少量の散布が見られる。

以上、調査区出土遺構を概観すると古墳時代の遺構が群を抜いて多く、恒川遺跡群内で確認されている古代「伊那郡衙」の前段としての繁栄であろう。弥生時代後期初頭と古墳時代後期分布が混在しているが、調査地点は段丘面の端部まで約100mと近く、4741番地では古墳時代住居址の分布がやや薄くなり、本地点から約30m段丘崖側には縄文時代の遺構・遺物が検出され、時代毎に遺構分布の変換する地点が当該地付近にあると考えられる。国道153バイパス周辺の開発には目を見張る物があり、事前調査の要請は消える事が無く、その結果から序々にではあるが原始・古代の当遺跡群の姿が把握できるであろう。

引用・参考文献

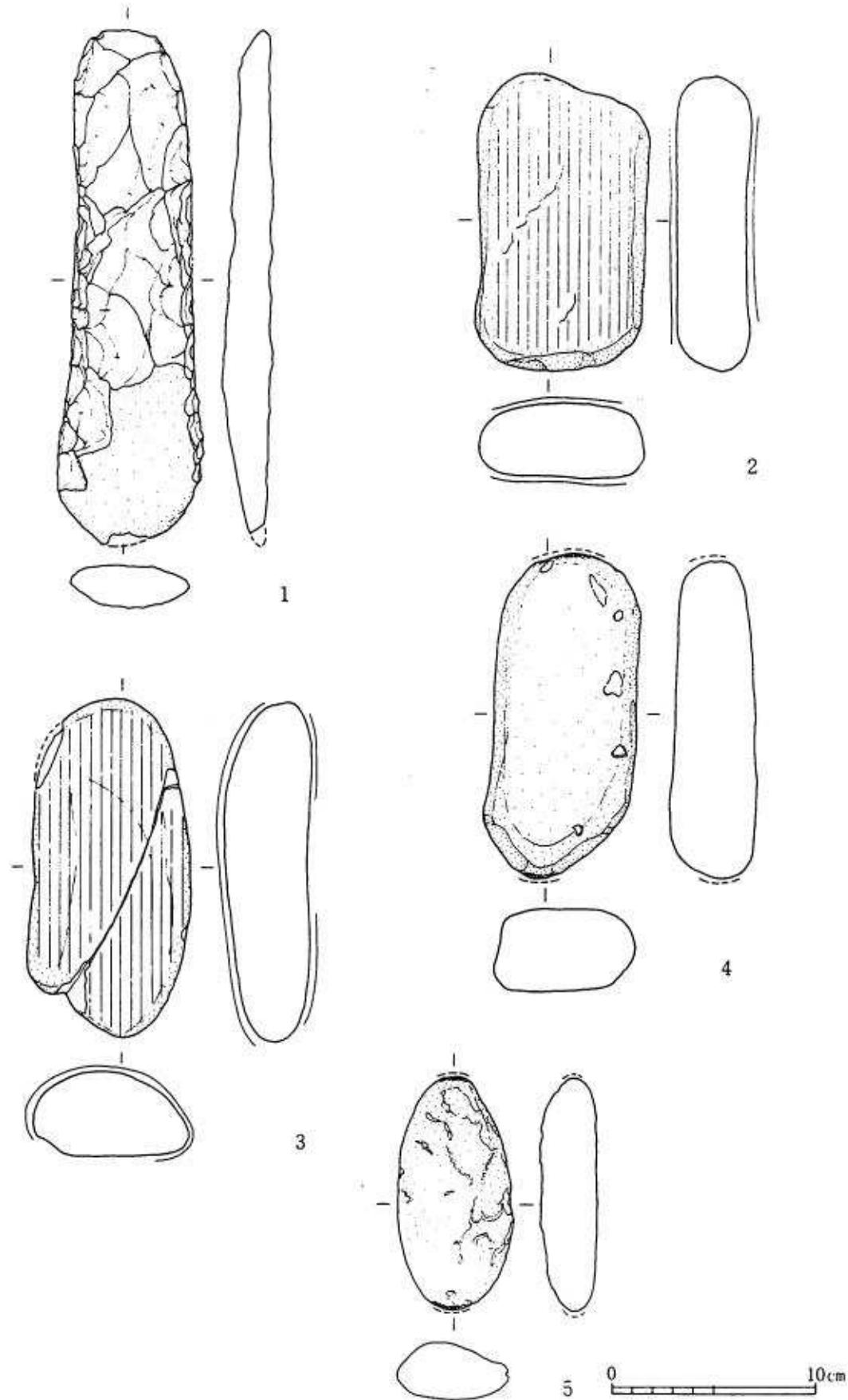
| | | |
|---------|----------|------------------|
| 1955 | 市村咸人編 | 『下伊那誌 第二巻』 |
| 1978～90 | 飯田市教育委員会 | 『恒川遺跡群 範囲確認調査概報』 |
| 1986 | 飯田市教育委員会 | 『恒川遺跡群』 |
| 1988 | 飯田市教育委員会 | 『恒川遺跡 田中・倉垣外地籍』 |
| 1990 | 飯田市教育委員会 | 『恒川遺跡 田中・倉垣外地籍』 |
| 1991 | 飯田市教育委員会 | 『恒川遺跡群 新屋敷遺跡』 |

図 版

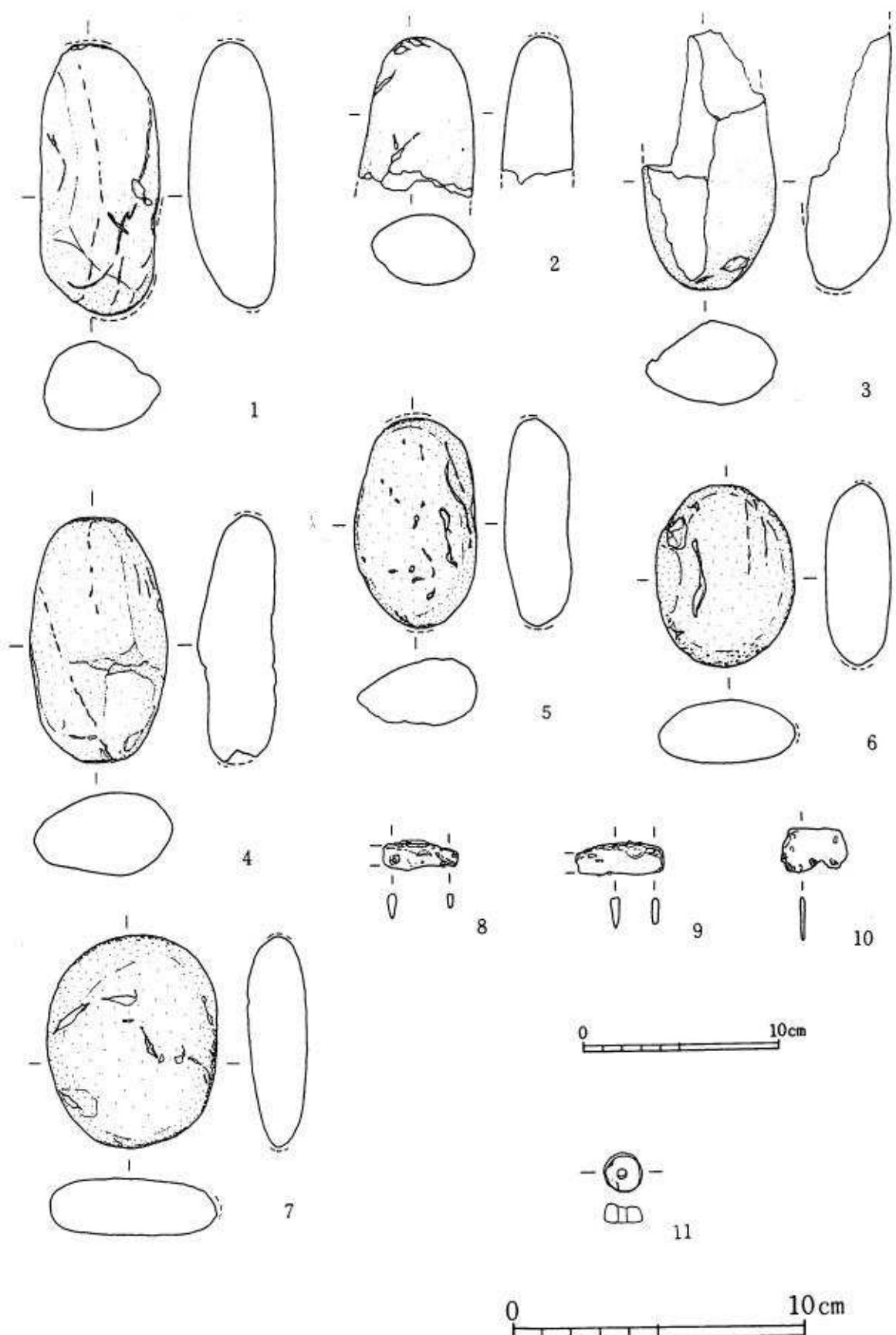


第1図 71号住居址

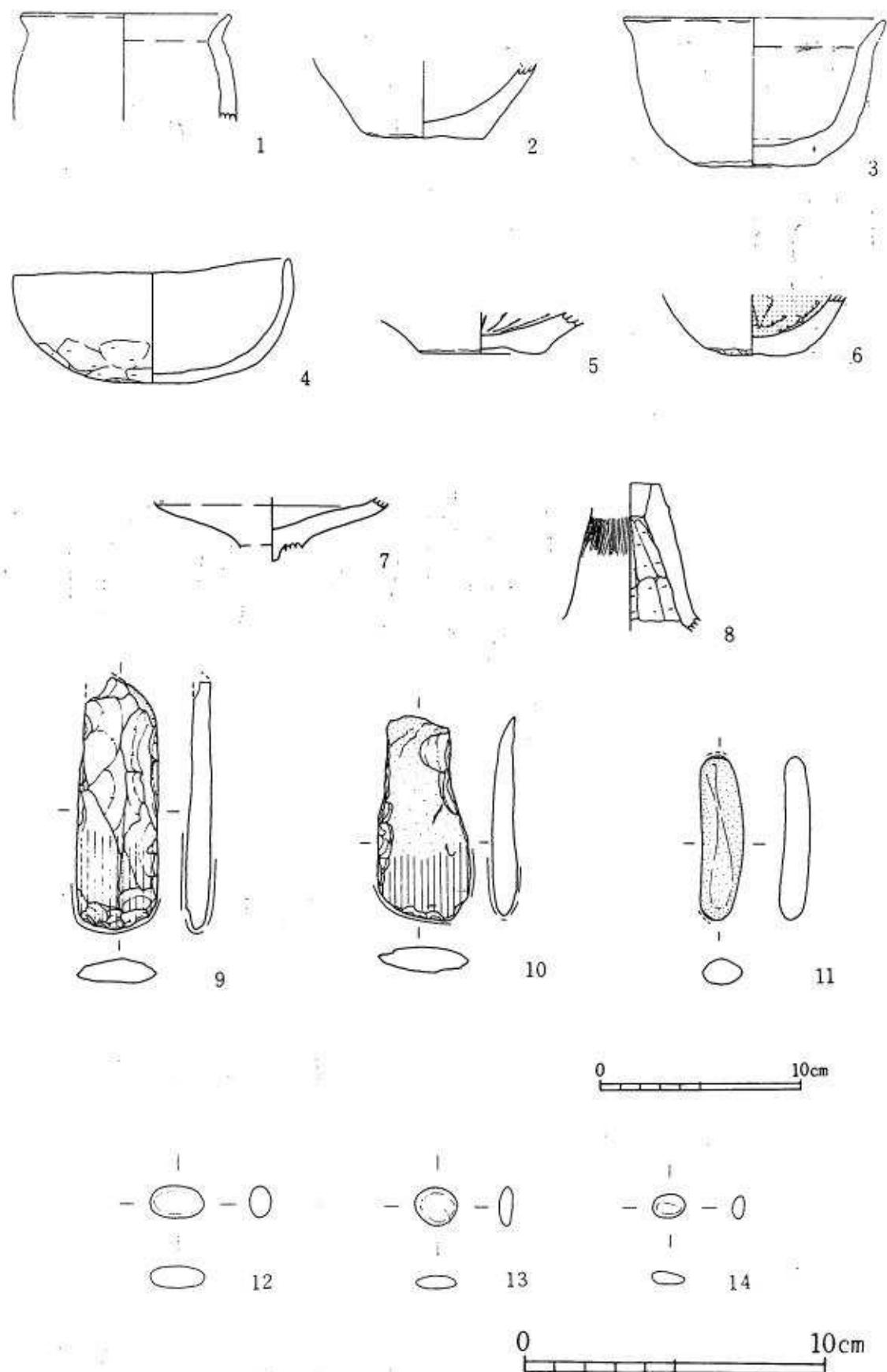
0 10cm



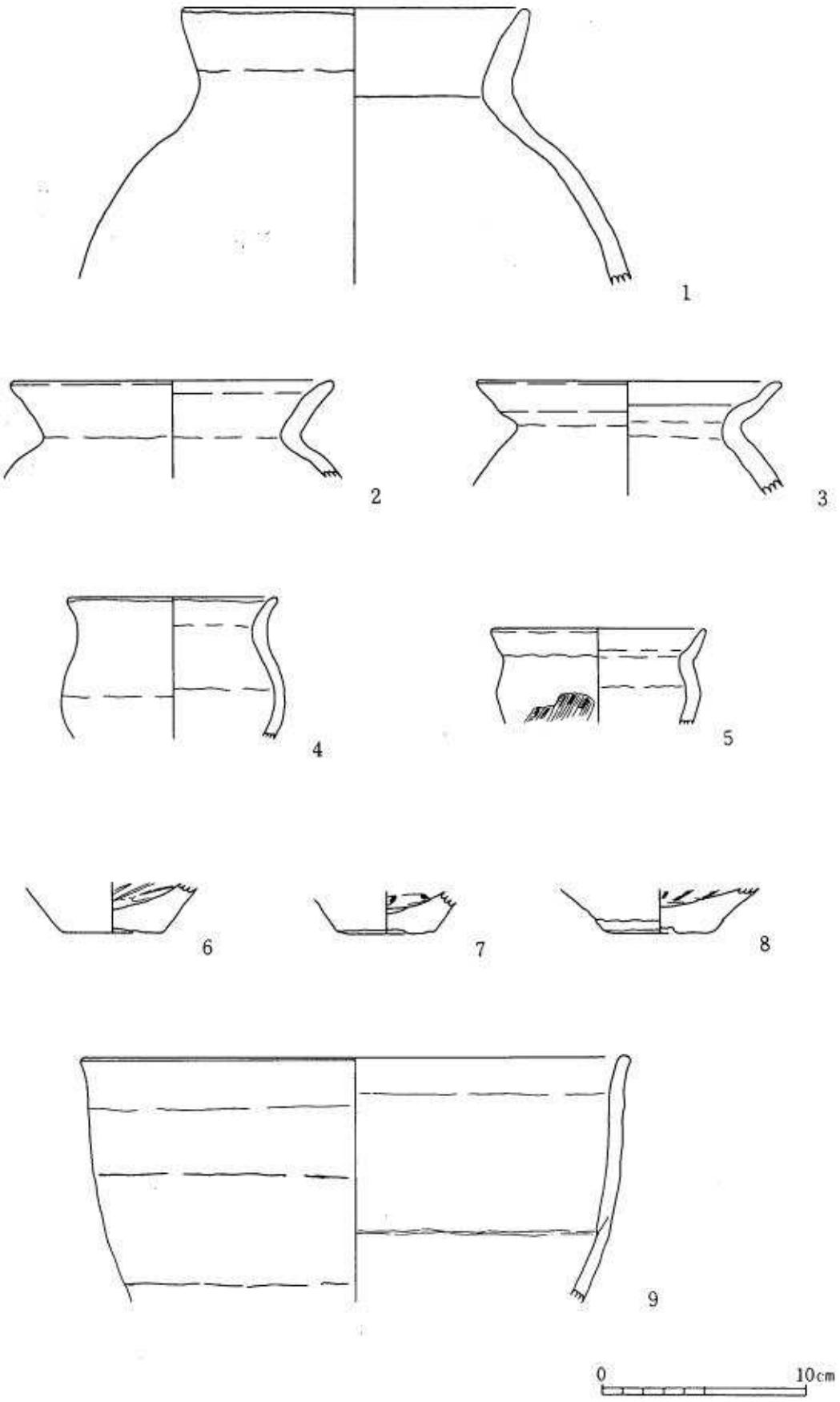
第2図 71号住居址



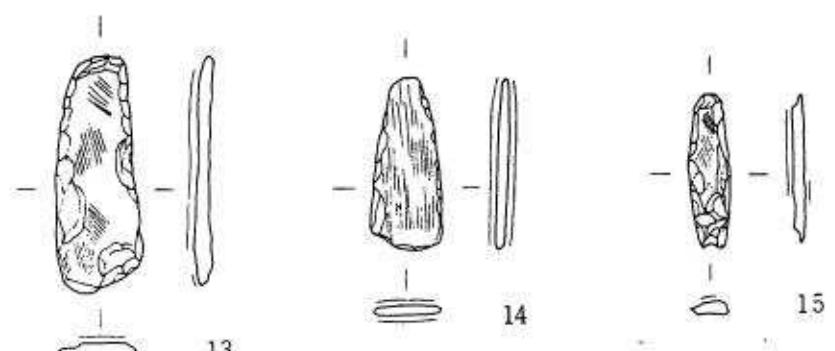
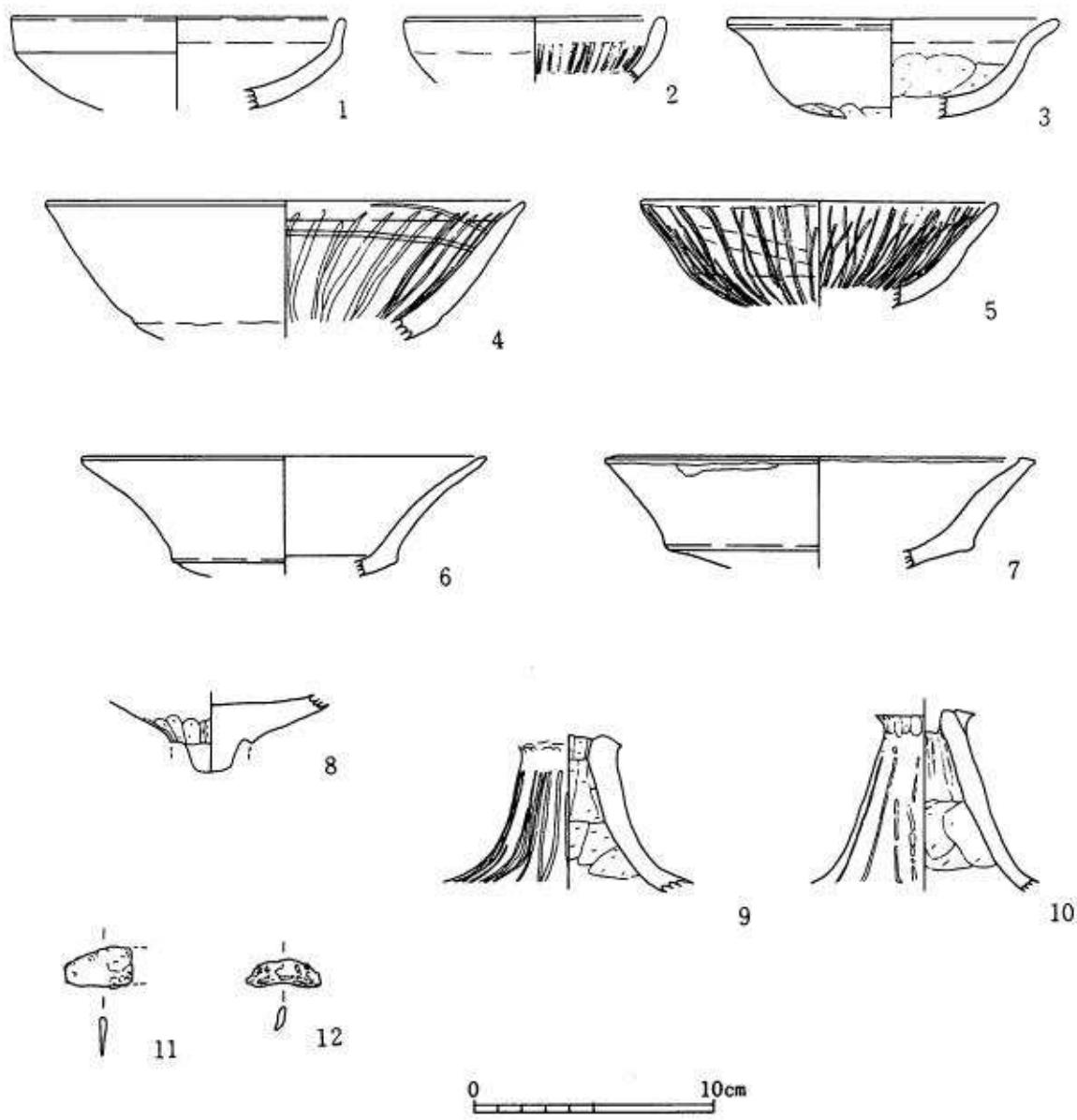
第3図 71号住居址



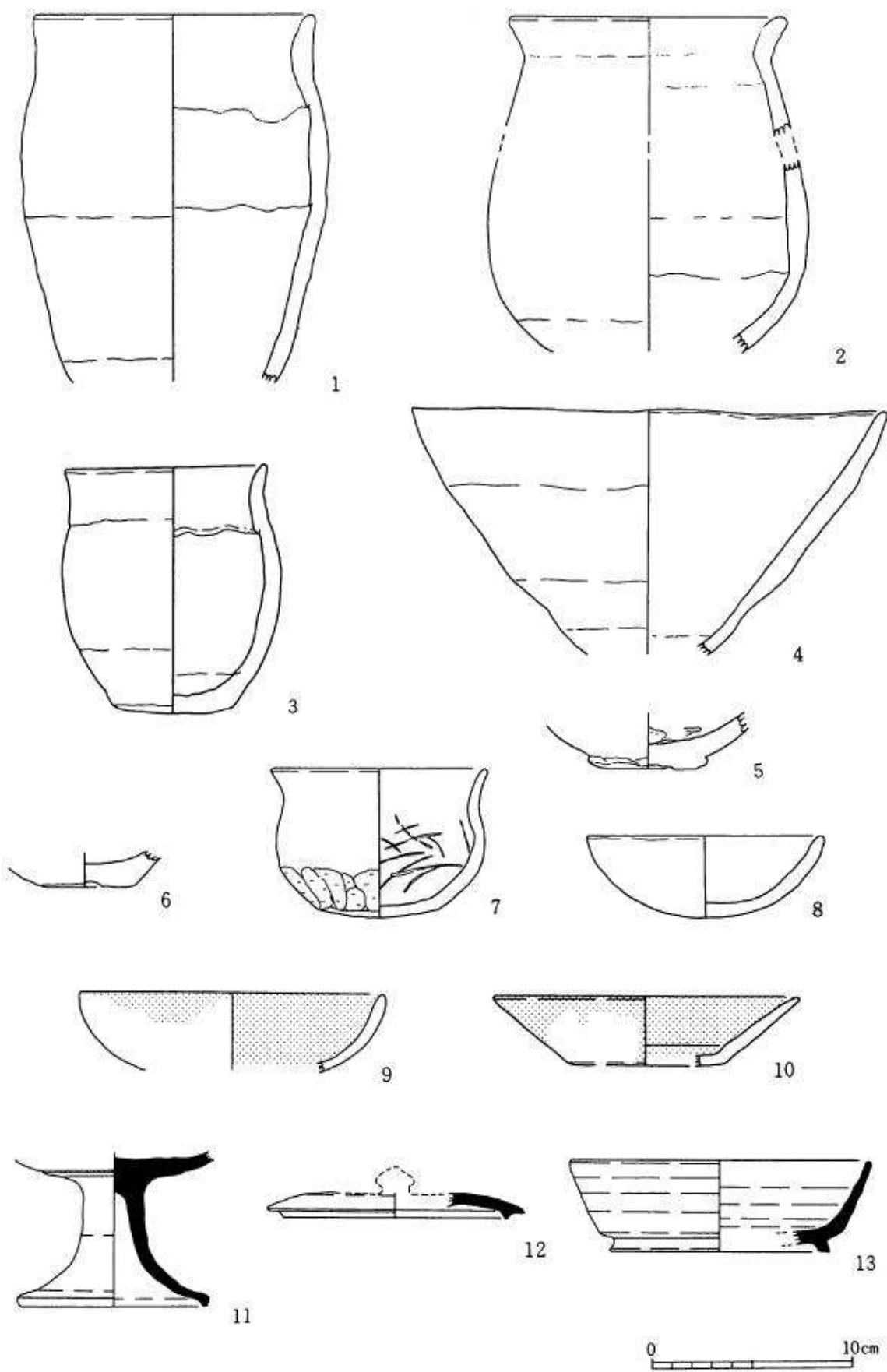
第4図 72号住居址



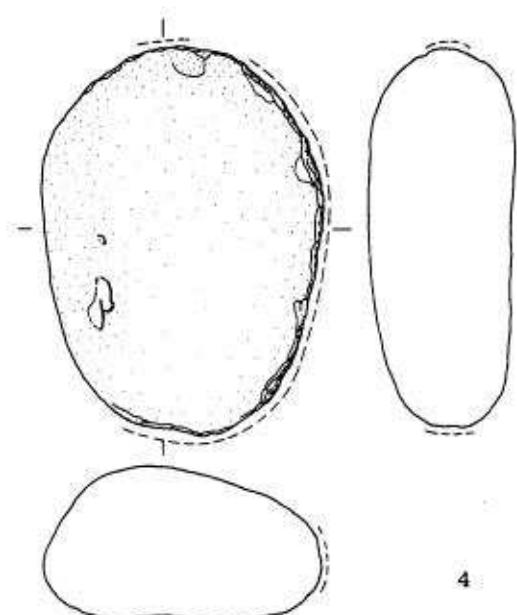
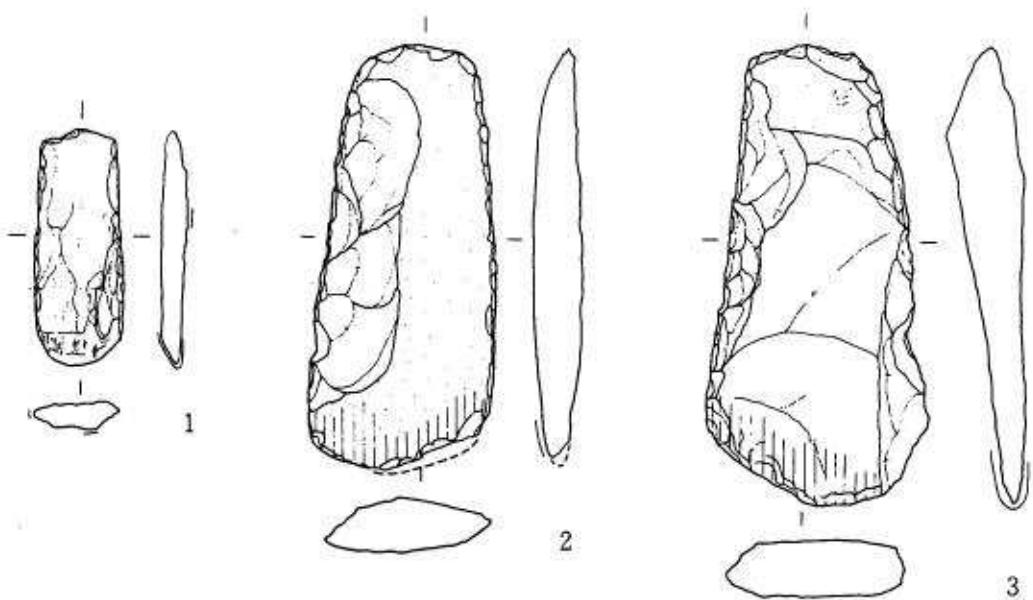
第5図 73号住居址



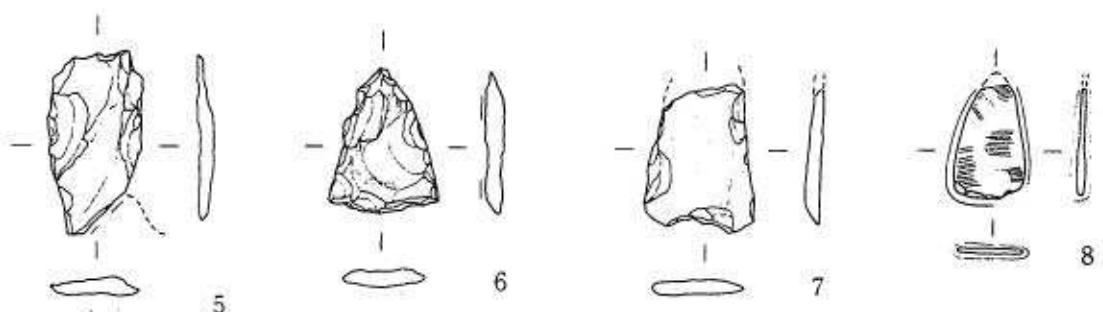
第6図 73号住居址



第7図 74号住居址

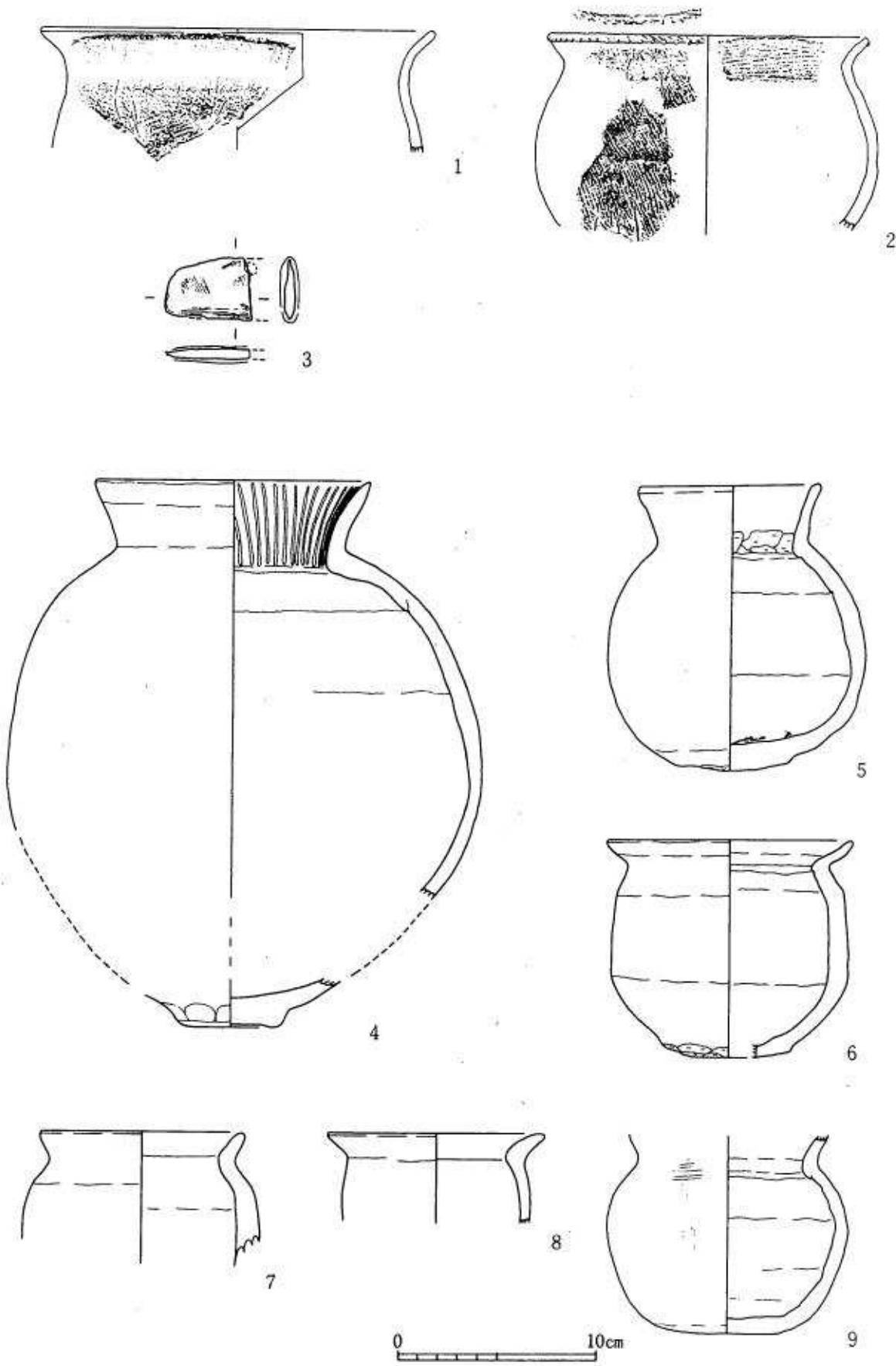


0 10 cm

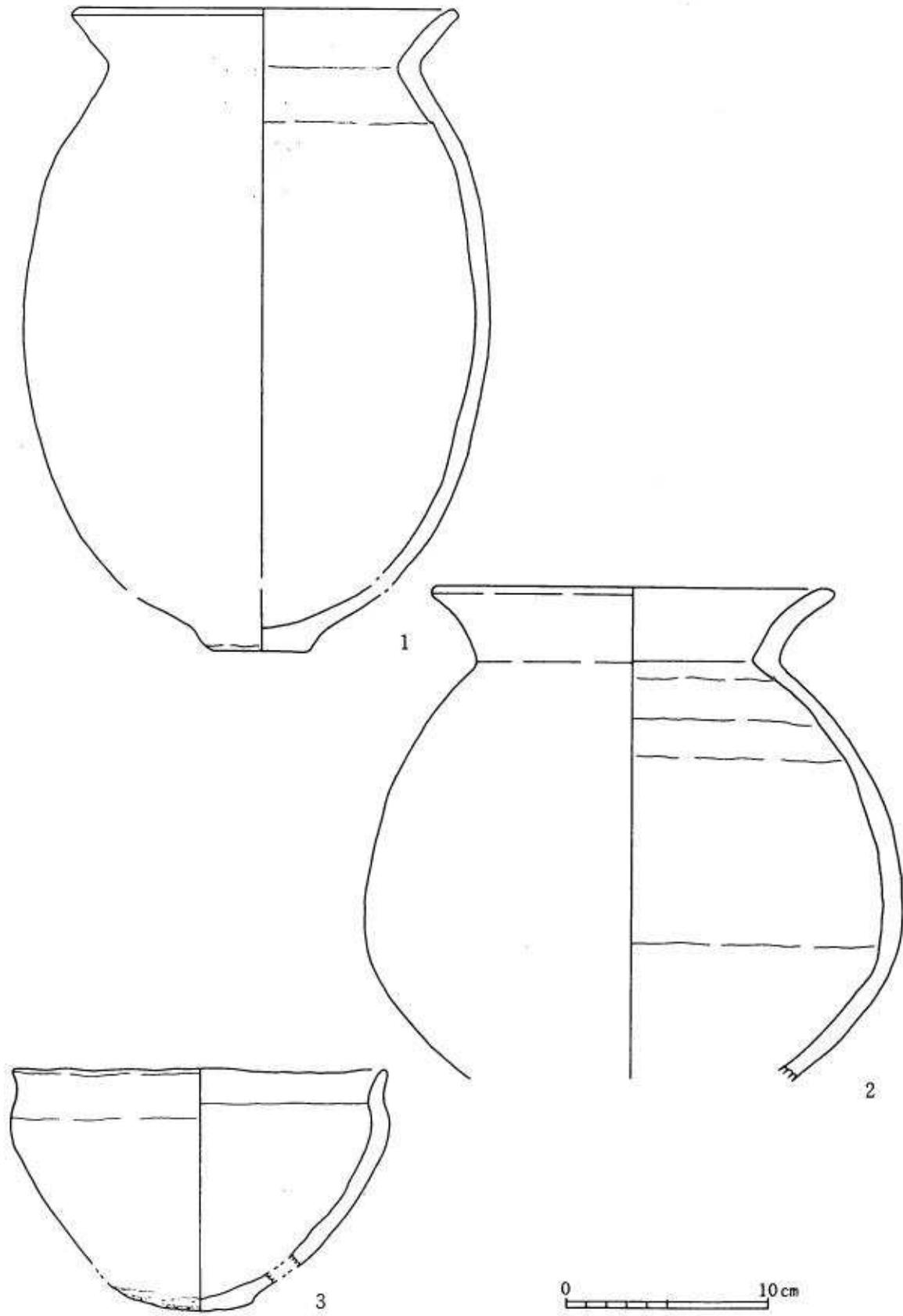


0 10 cm

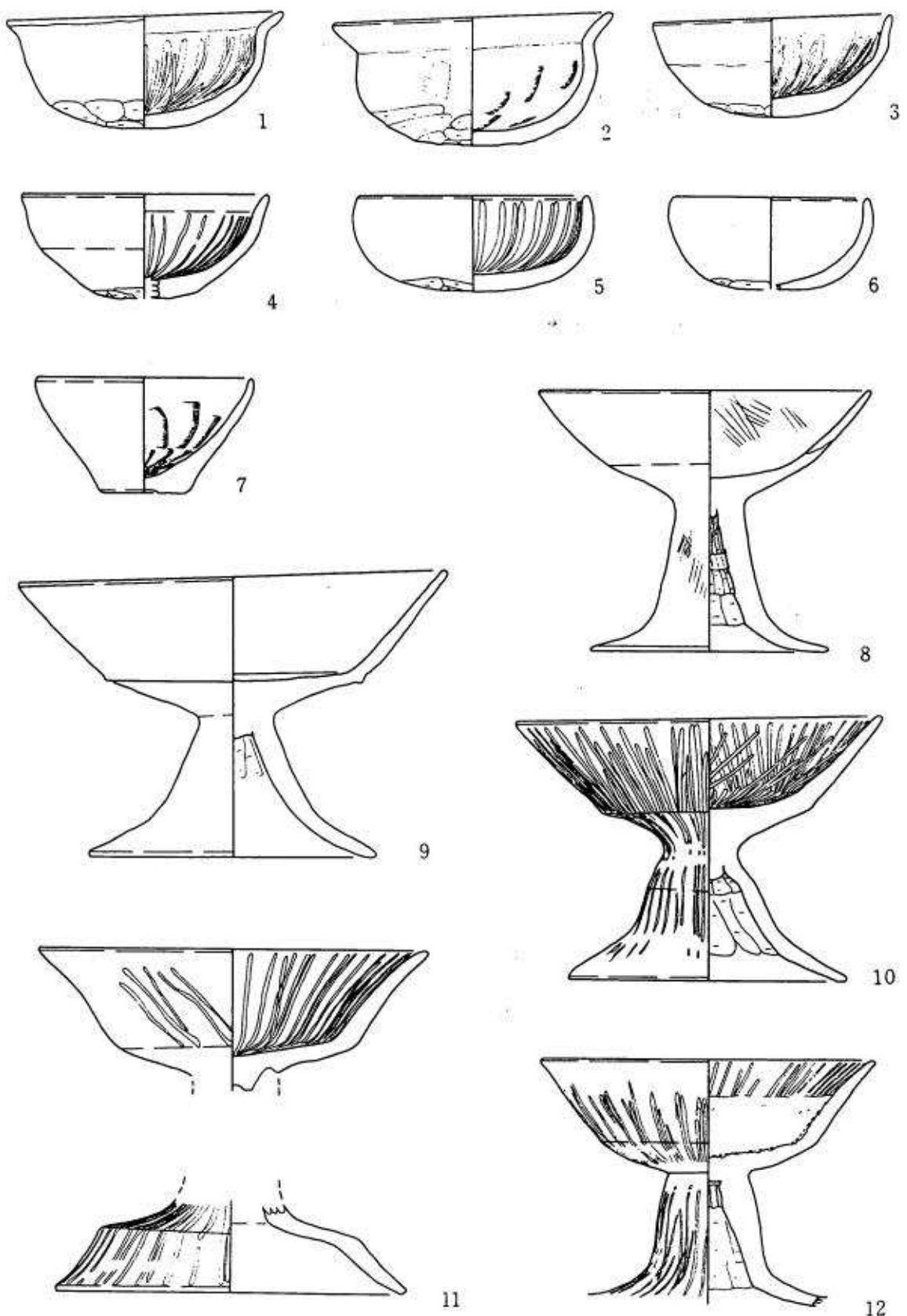
第8図 74号住居址



第9図 75(1~3)・76(4~9)号住居址

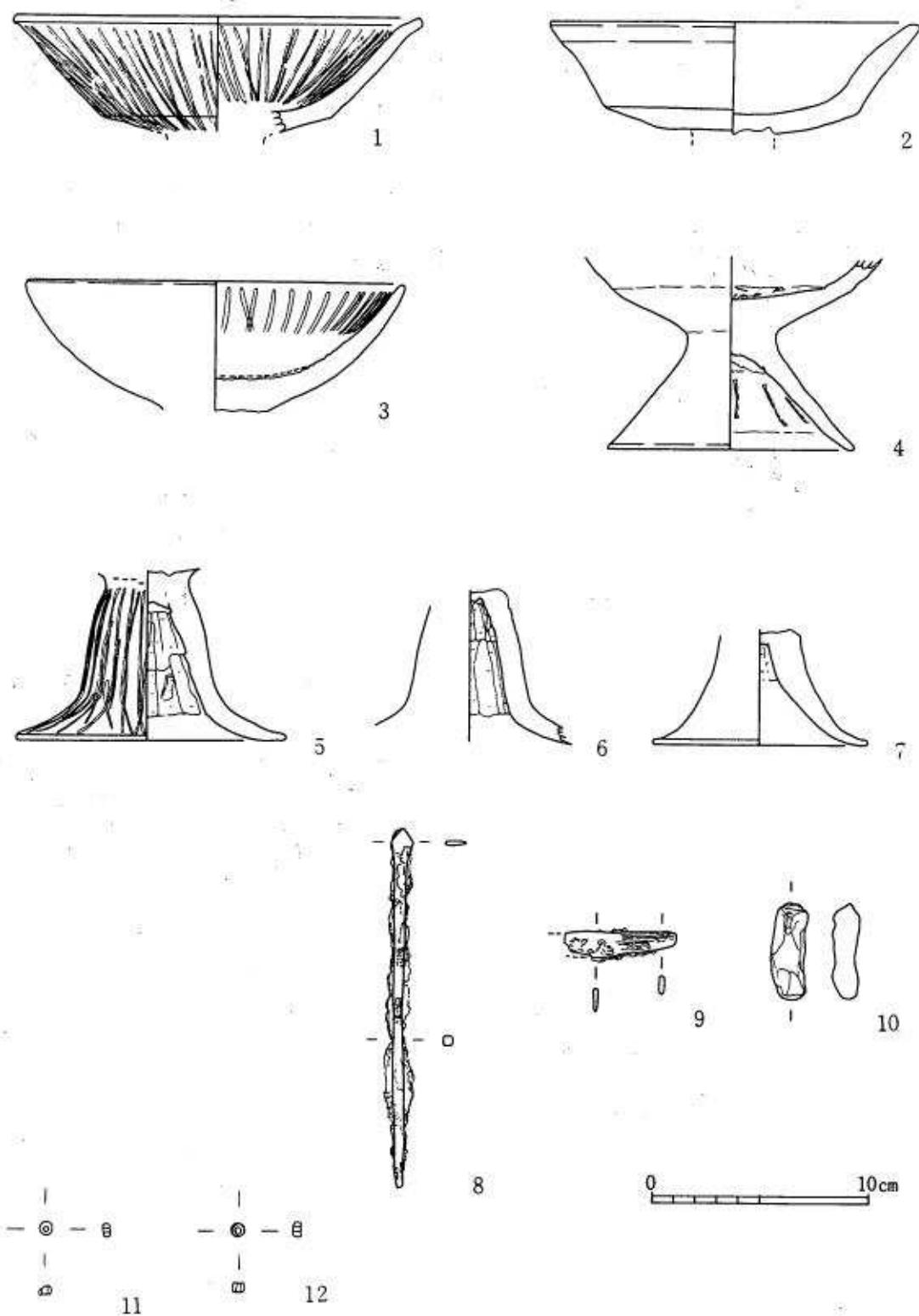


第10図 76号住居址

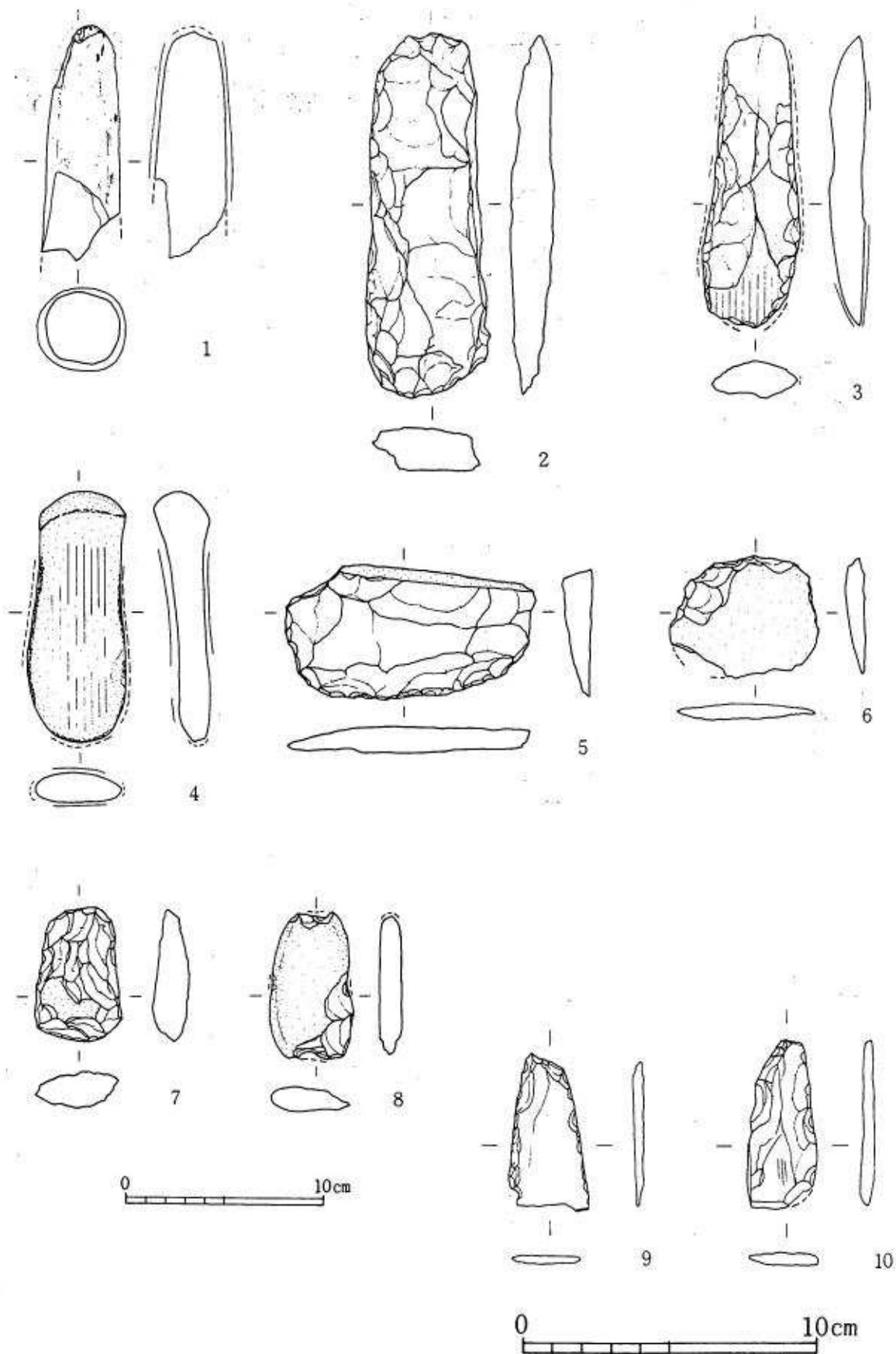


第11図 76号住居址

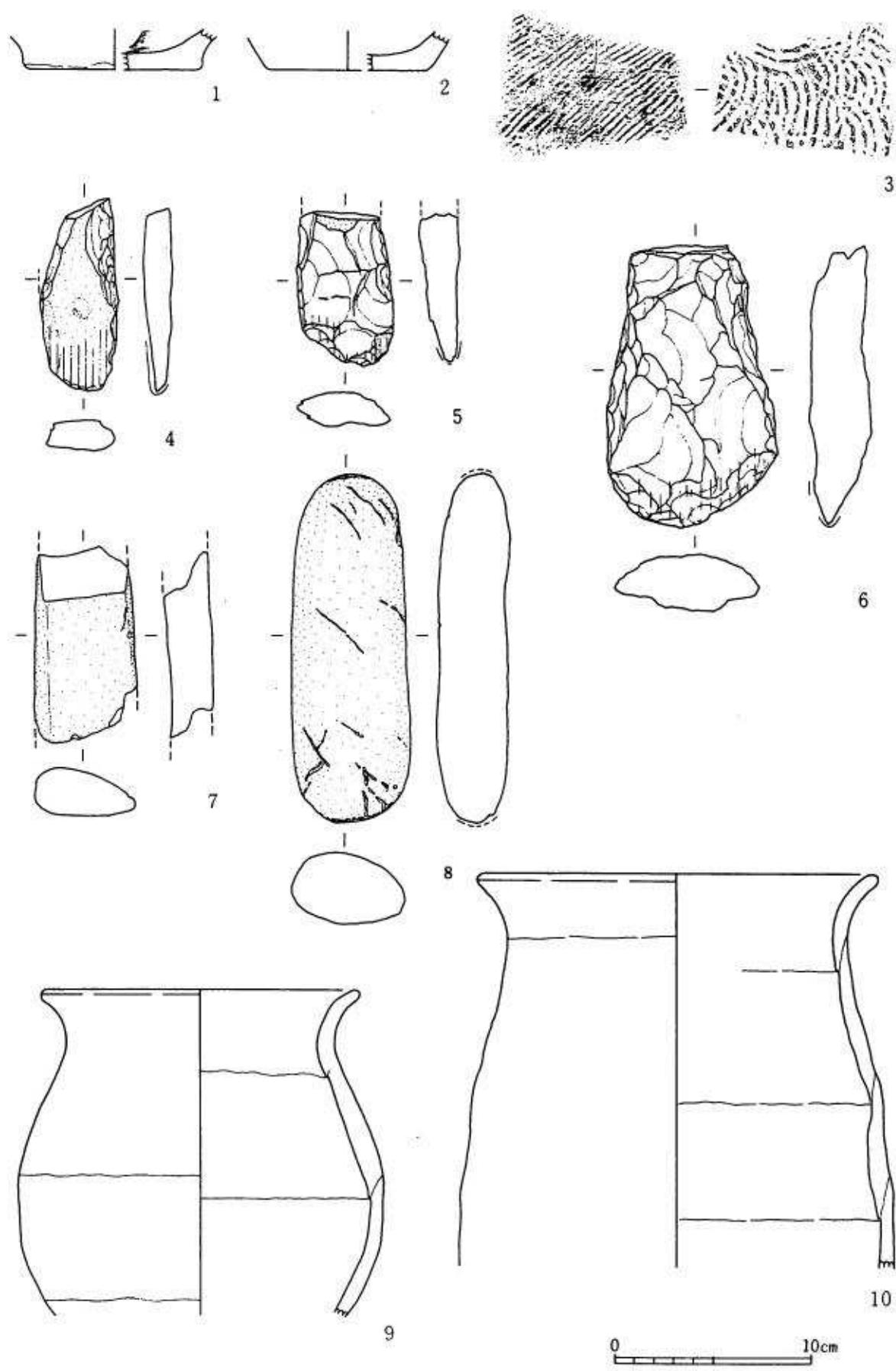
0 10cm



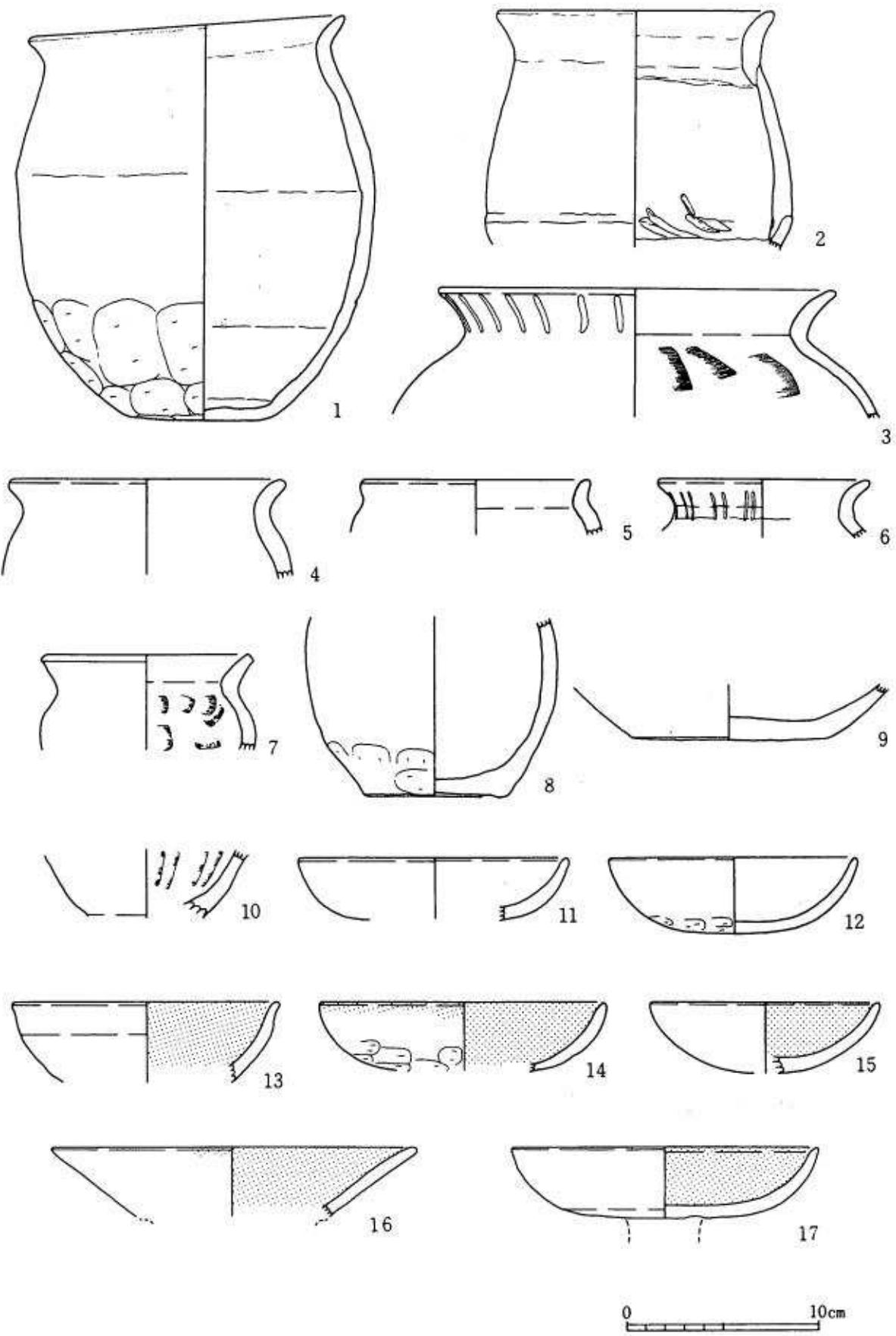
第12図 76号住居址



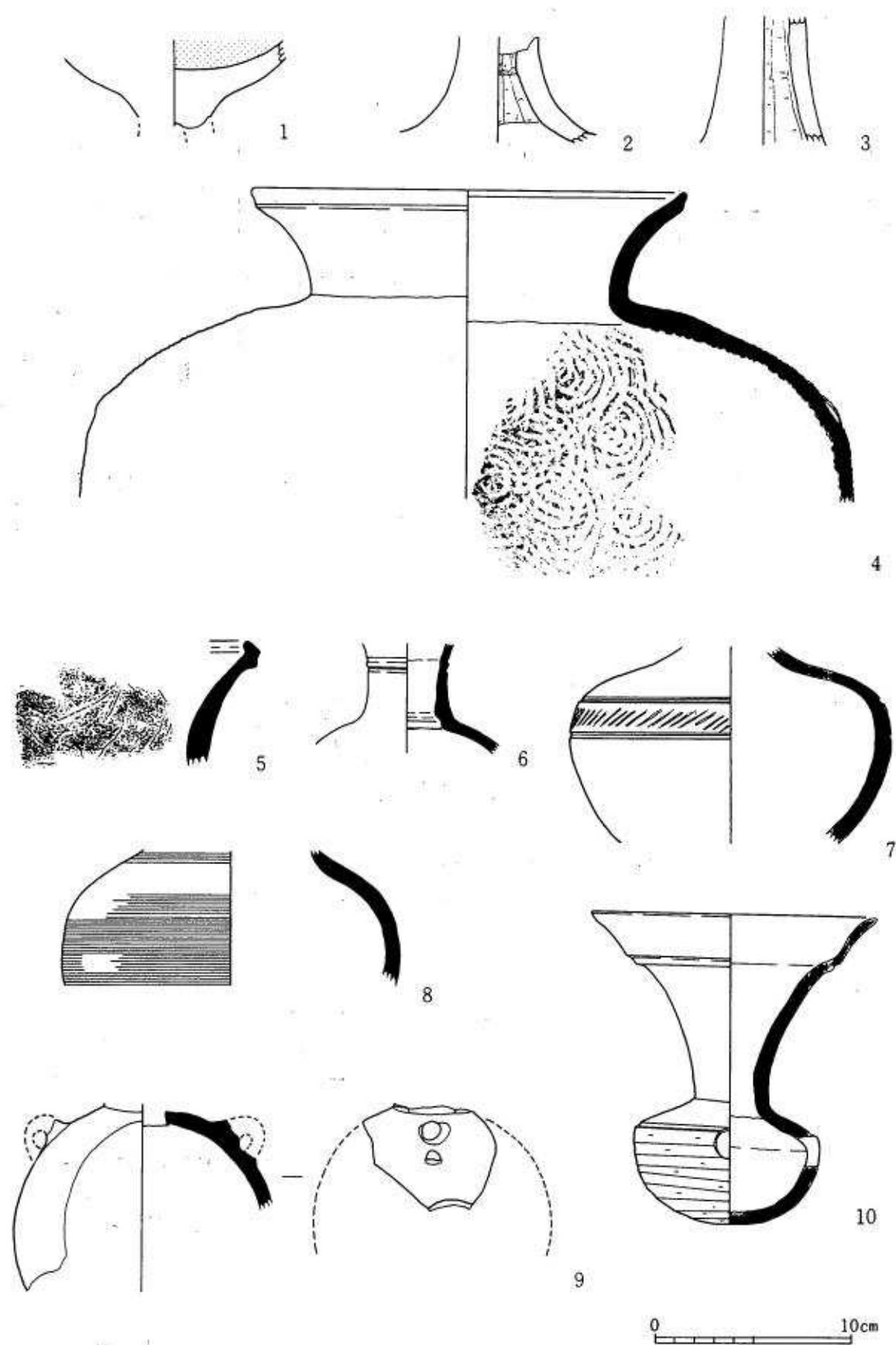
第13図 76号住居址



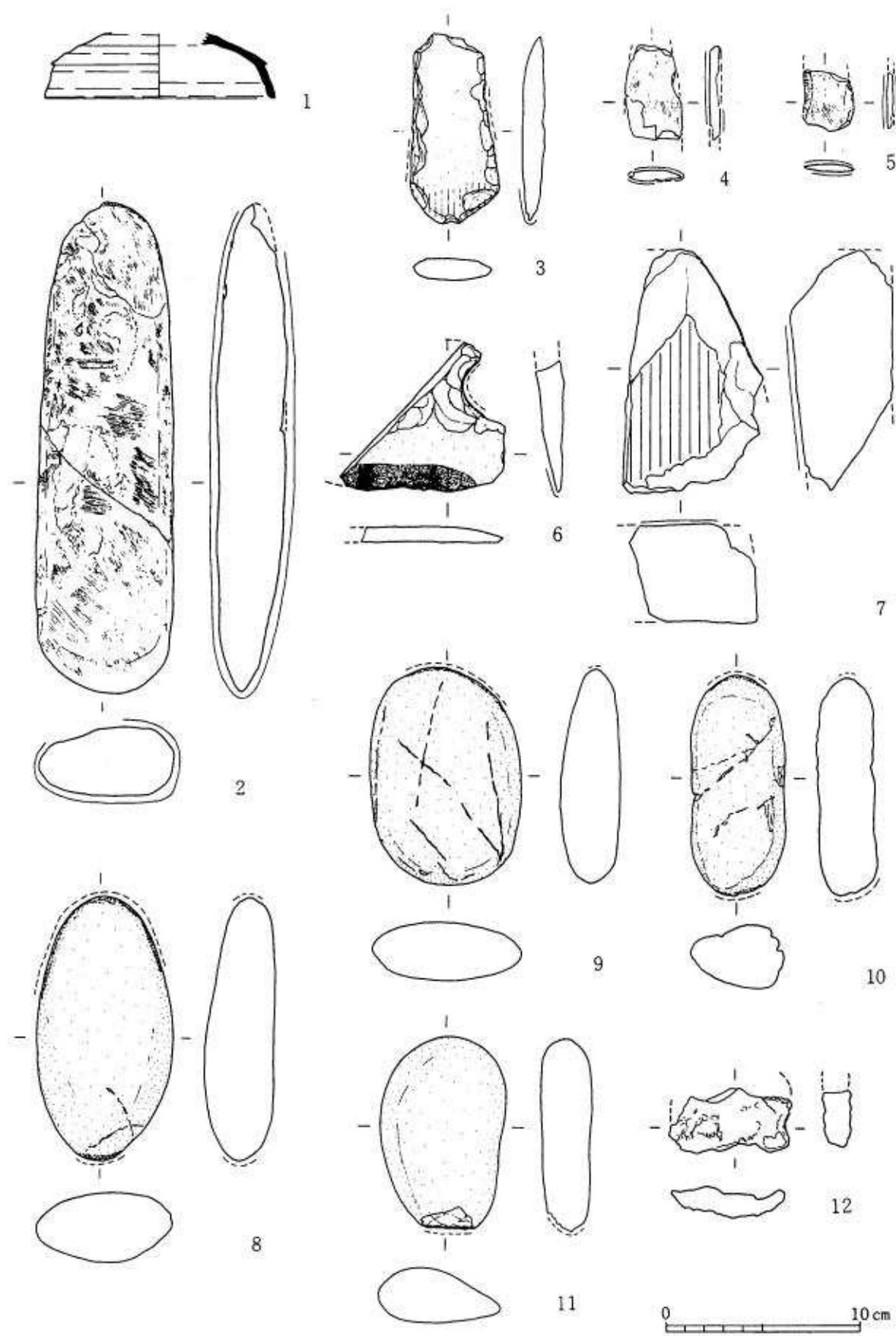
第14図 77(1~8)・78(9・10)号住居址



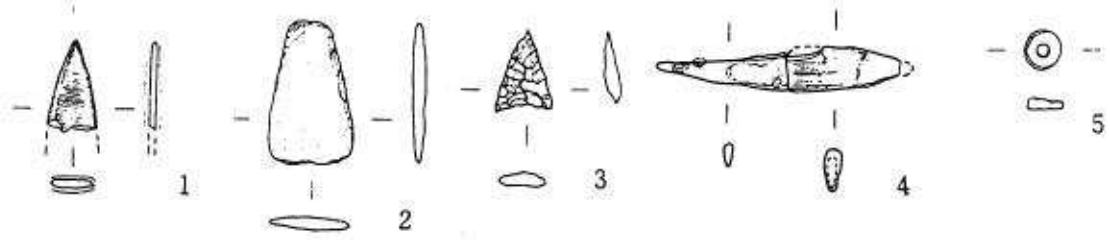
第15図 78号住居址



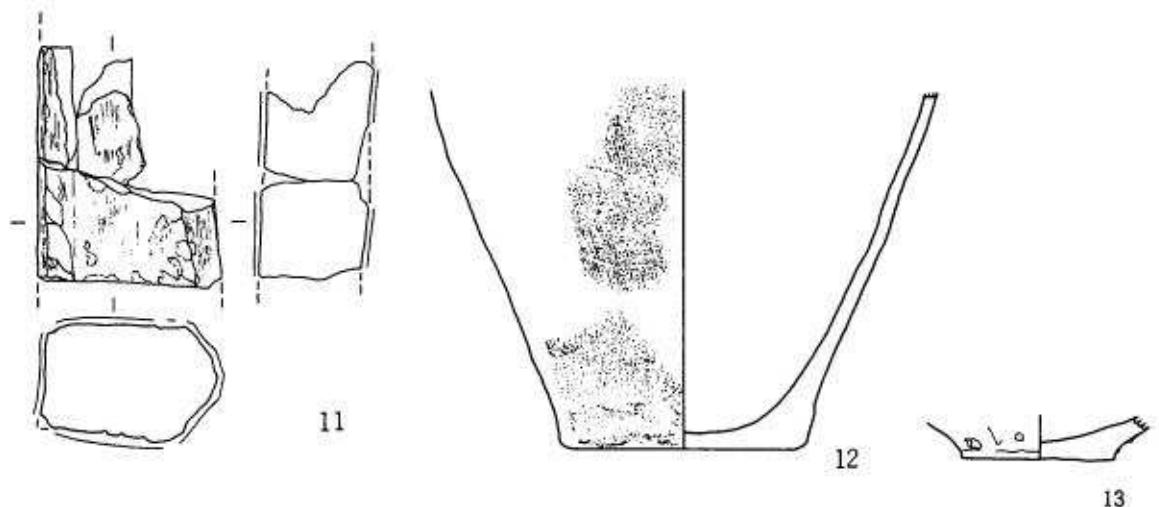
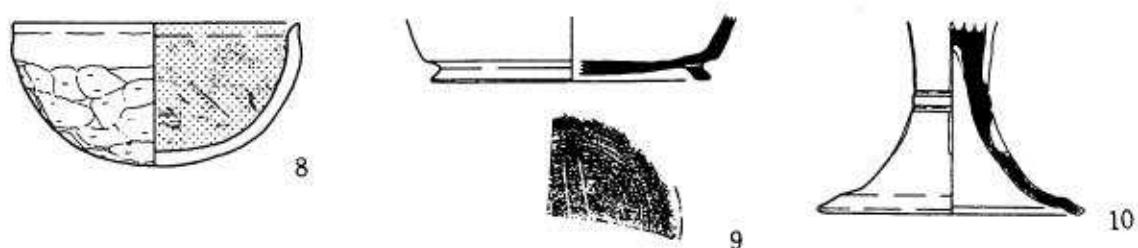
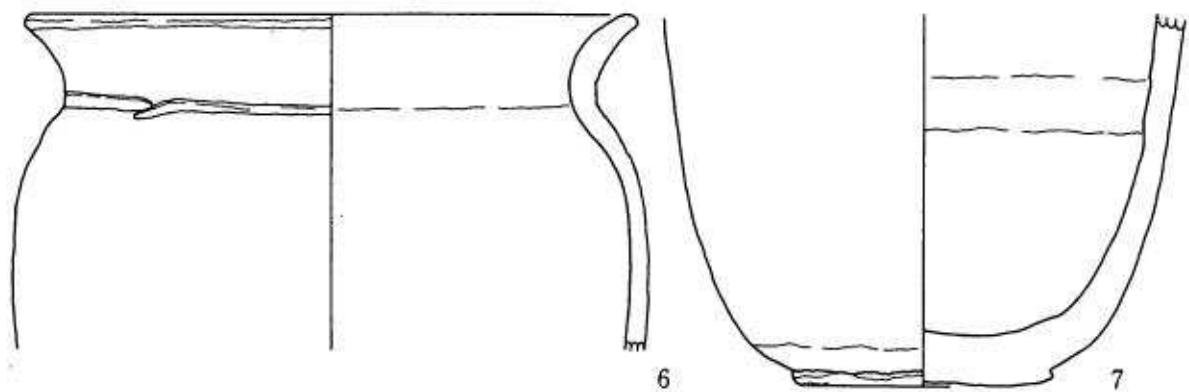
第16図 78号住居址



第17号 78号住居址

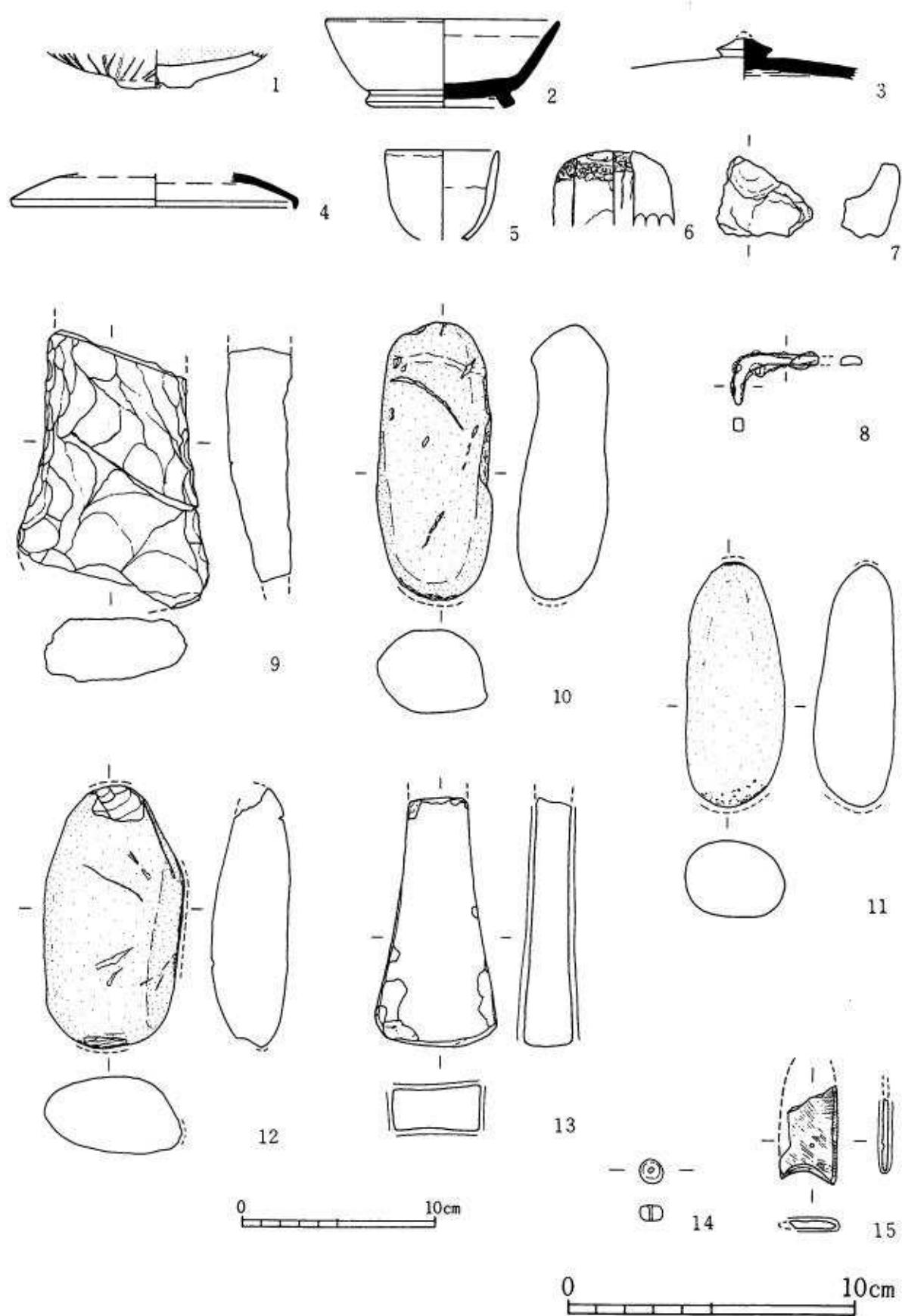


0 10cm

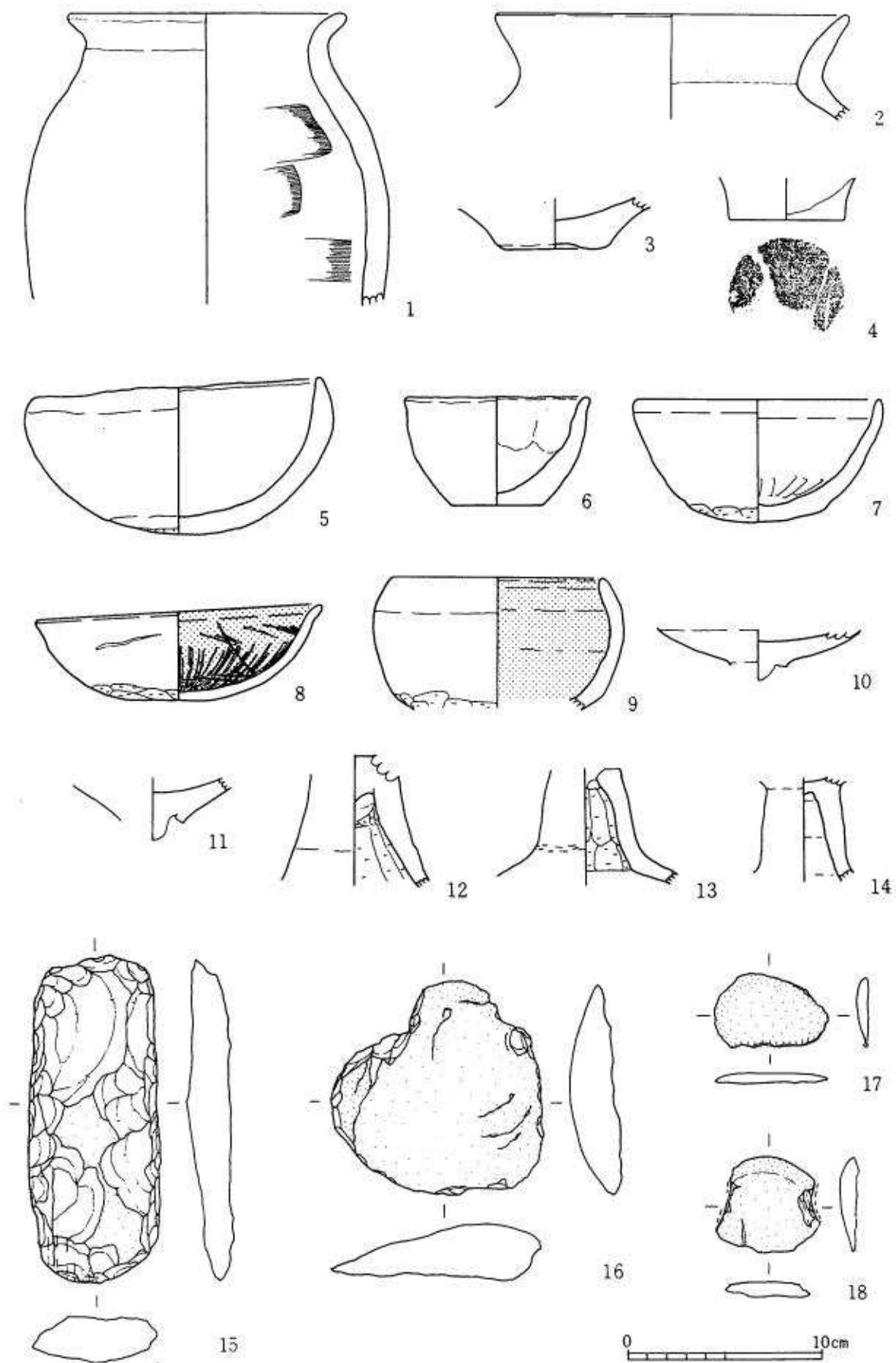


0 10cm

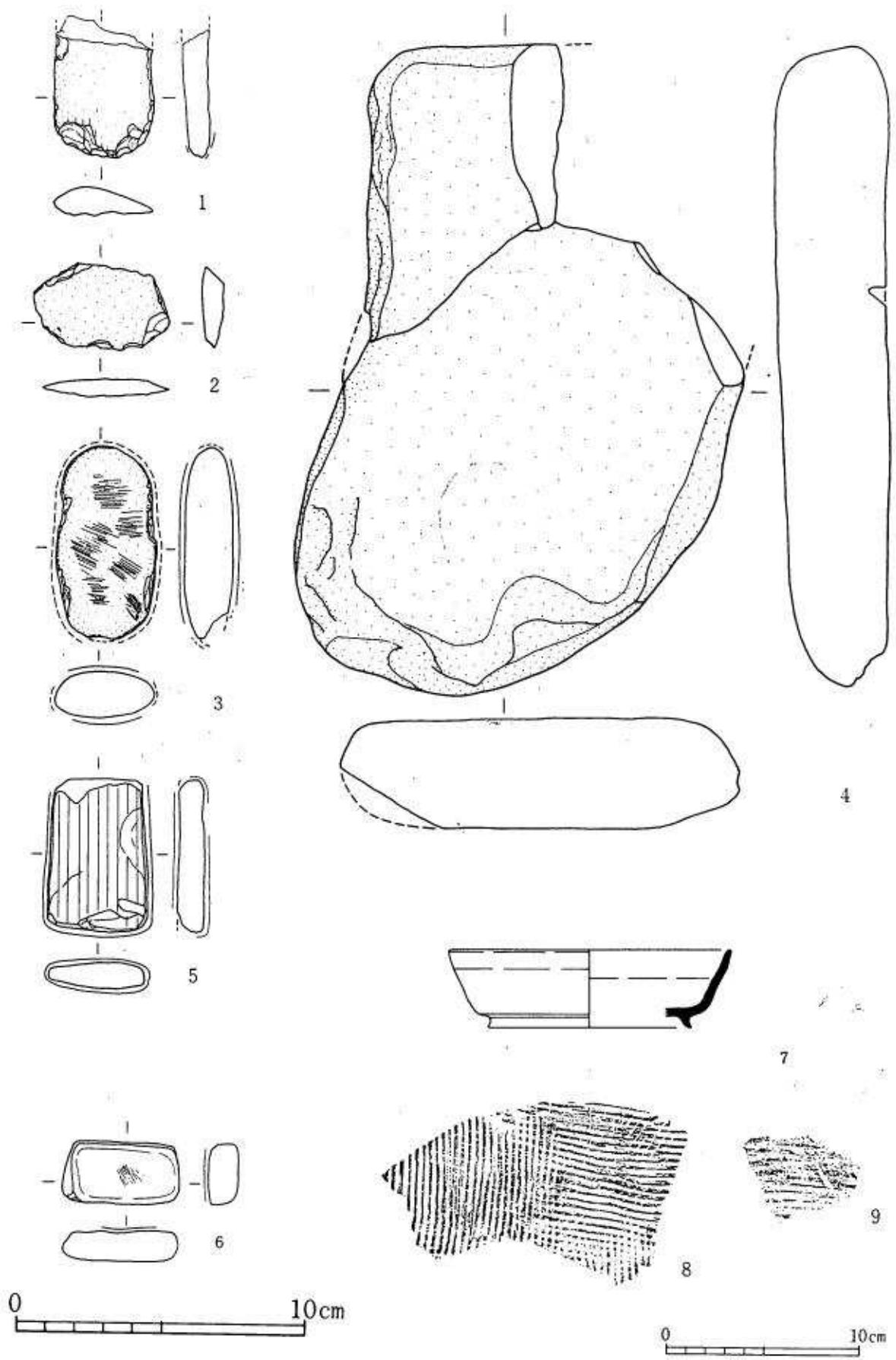
第18図 78(1~4)・79(5)・80(6~11)・81(12~13)号住居址



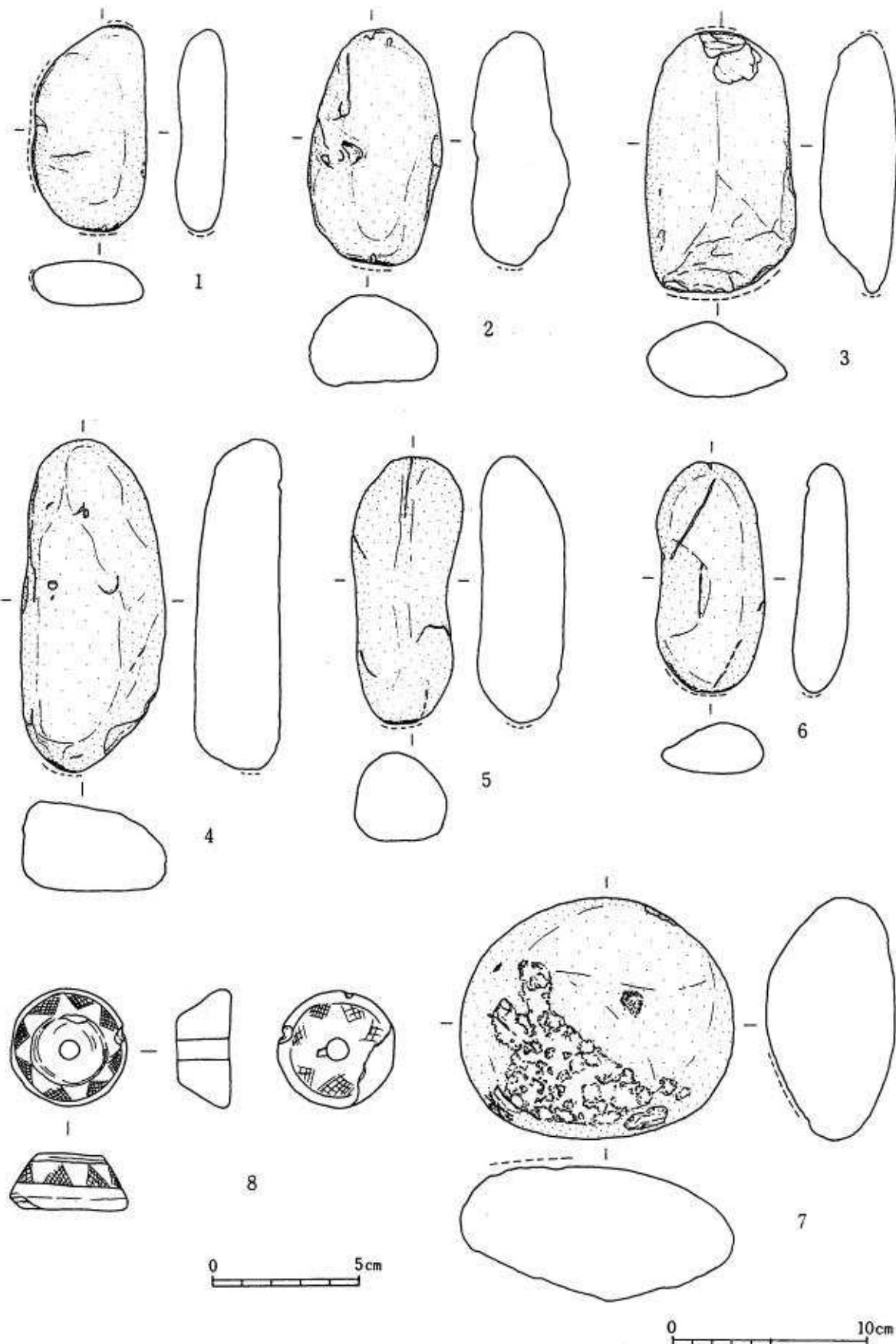
第19図 81号住居址



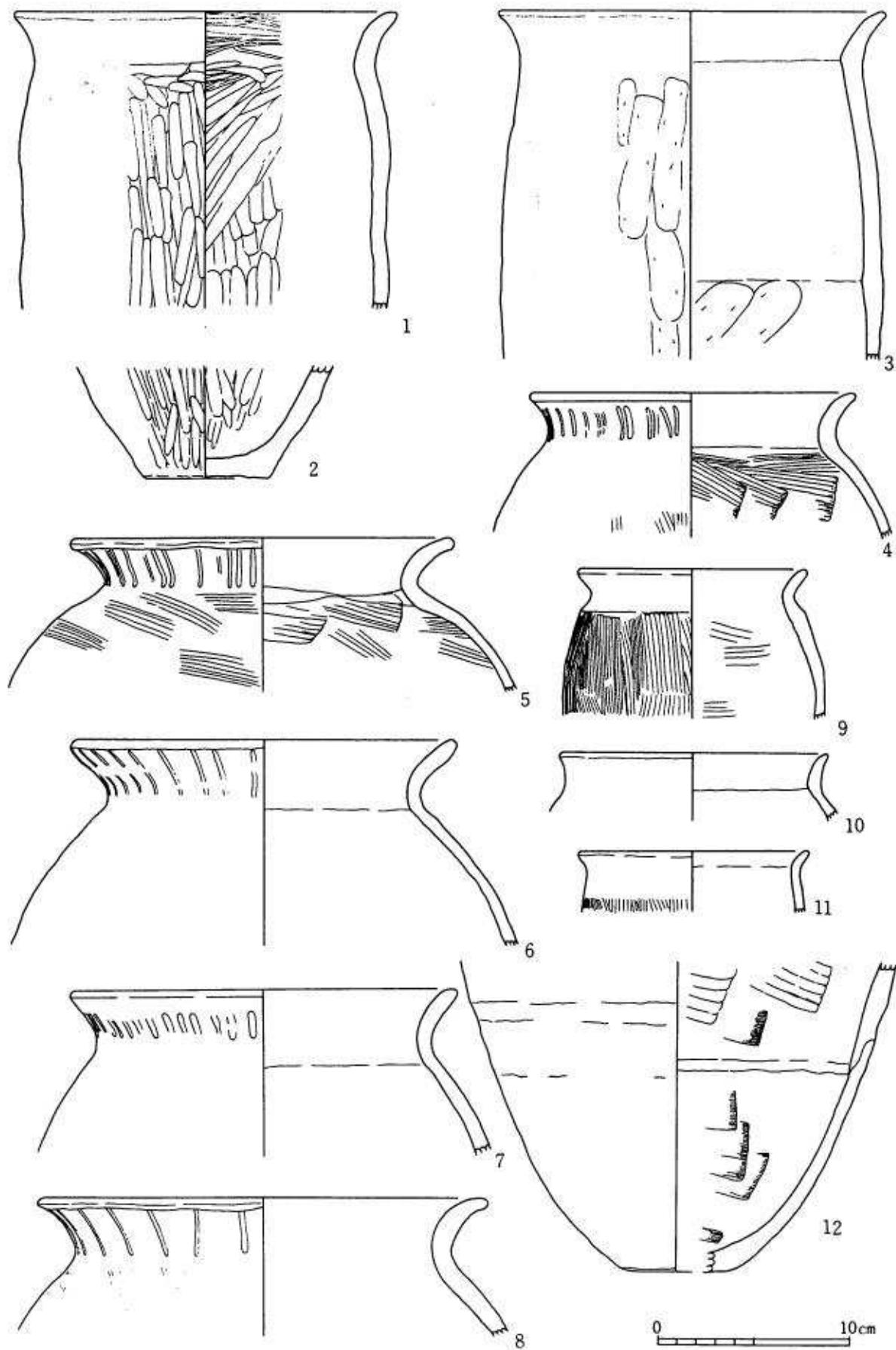
第20図 82号住居址



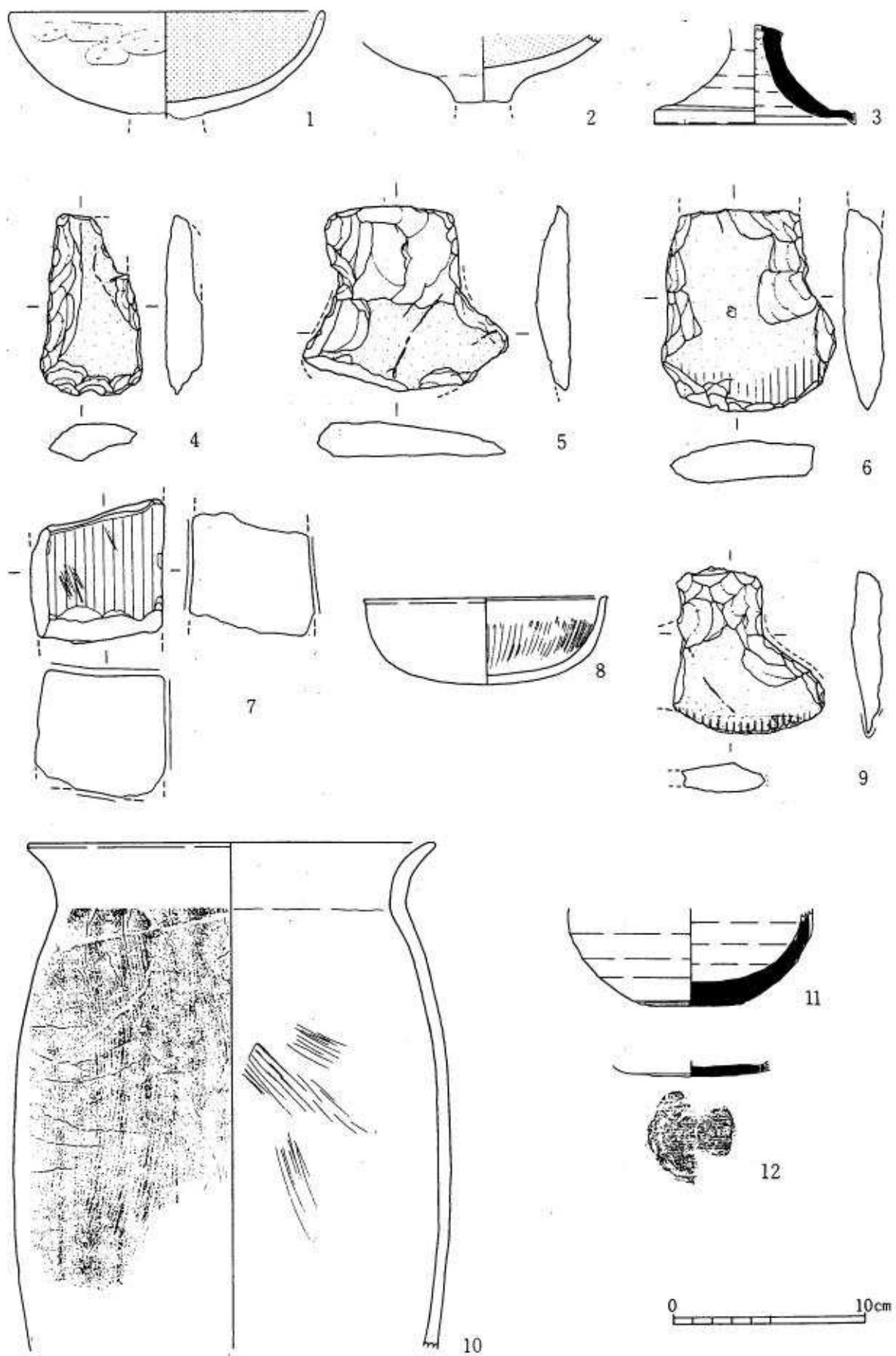
第21図 82(1~5)・83(6~9)号住居址



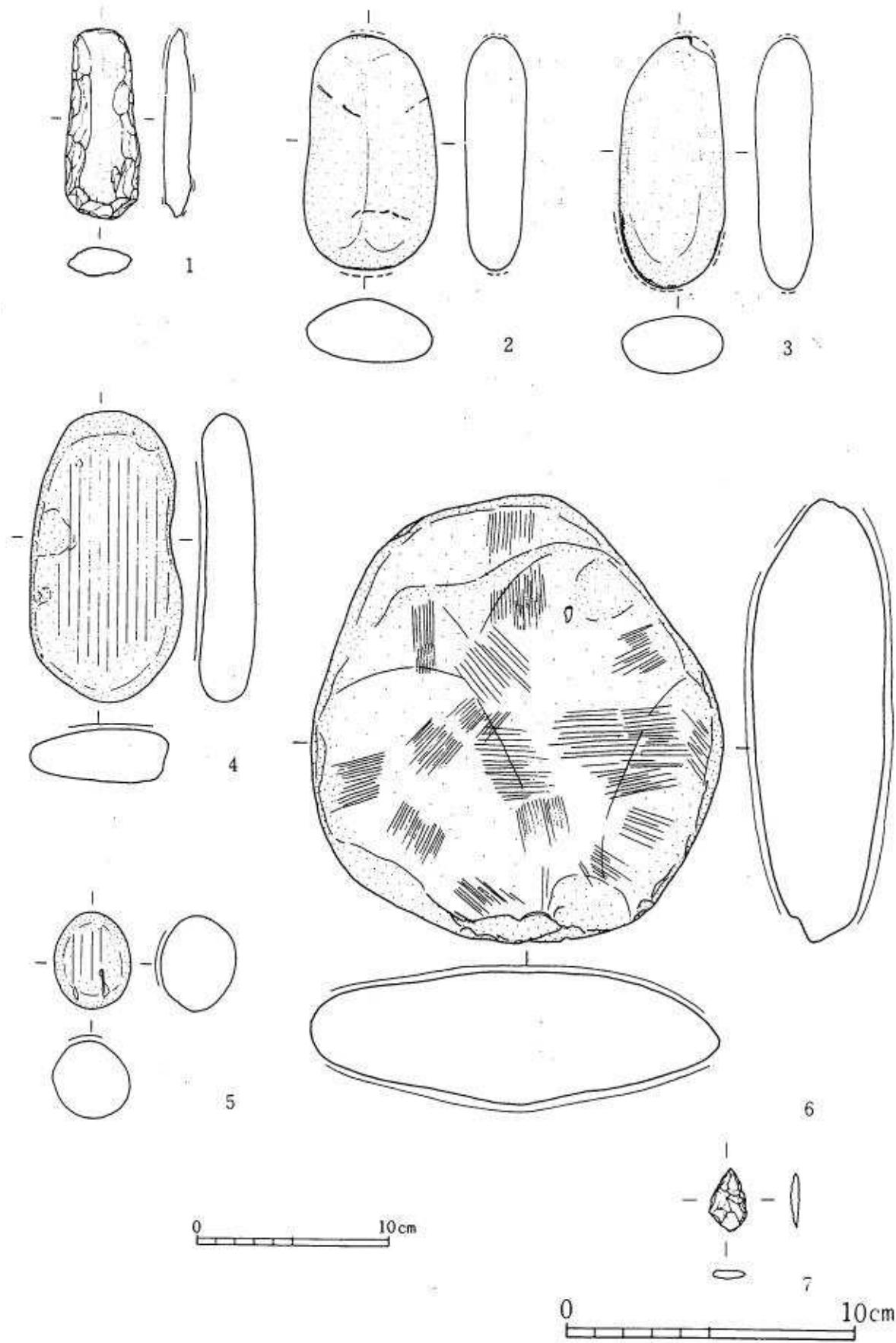
第22図 83号住居址



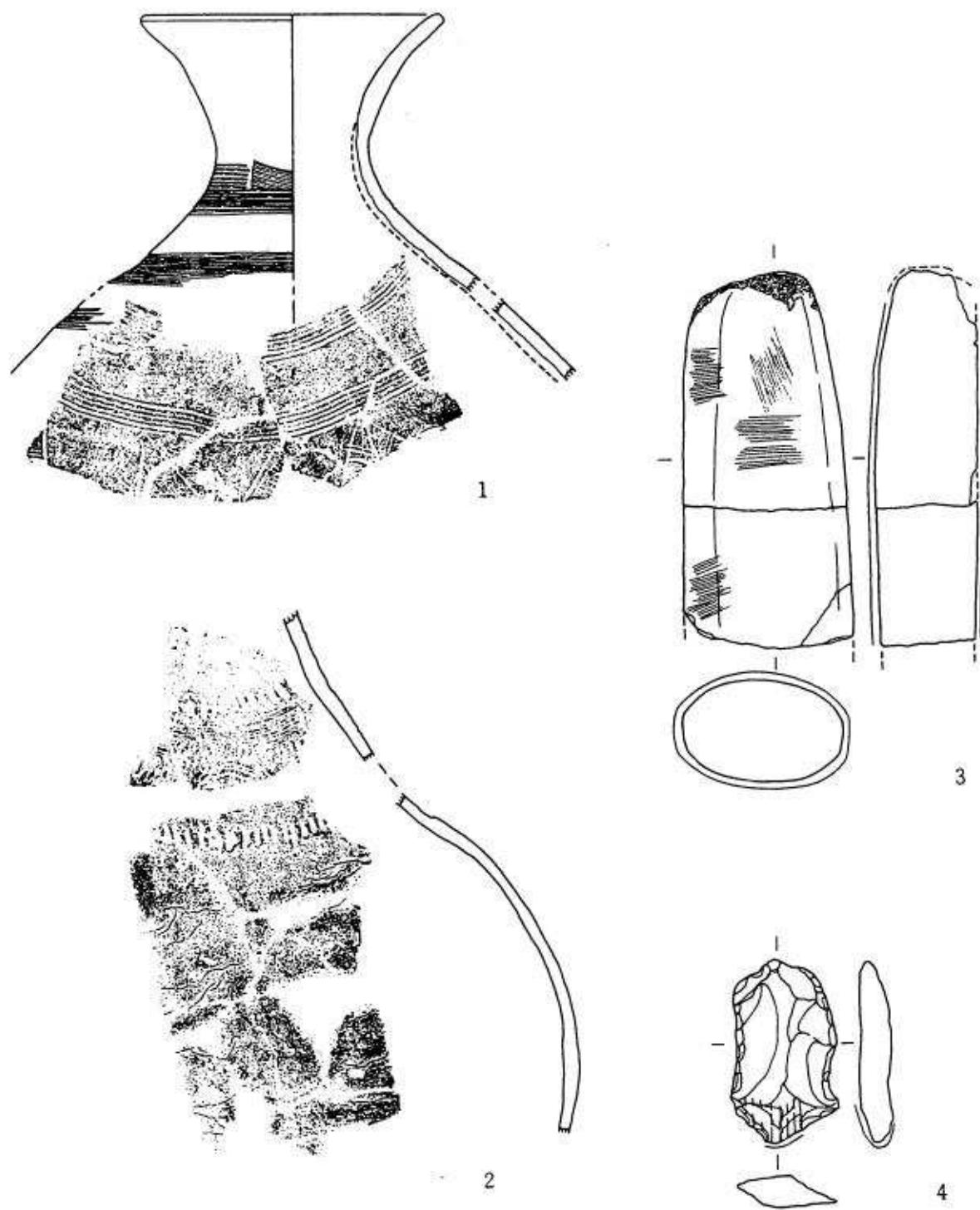
第23図 84号住居址



第24図 84 (1~7) · 85 (8·9) · 87 (10~12) 号住居址

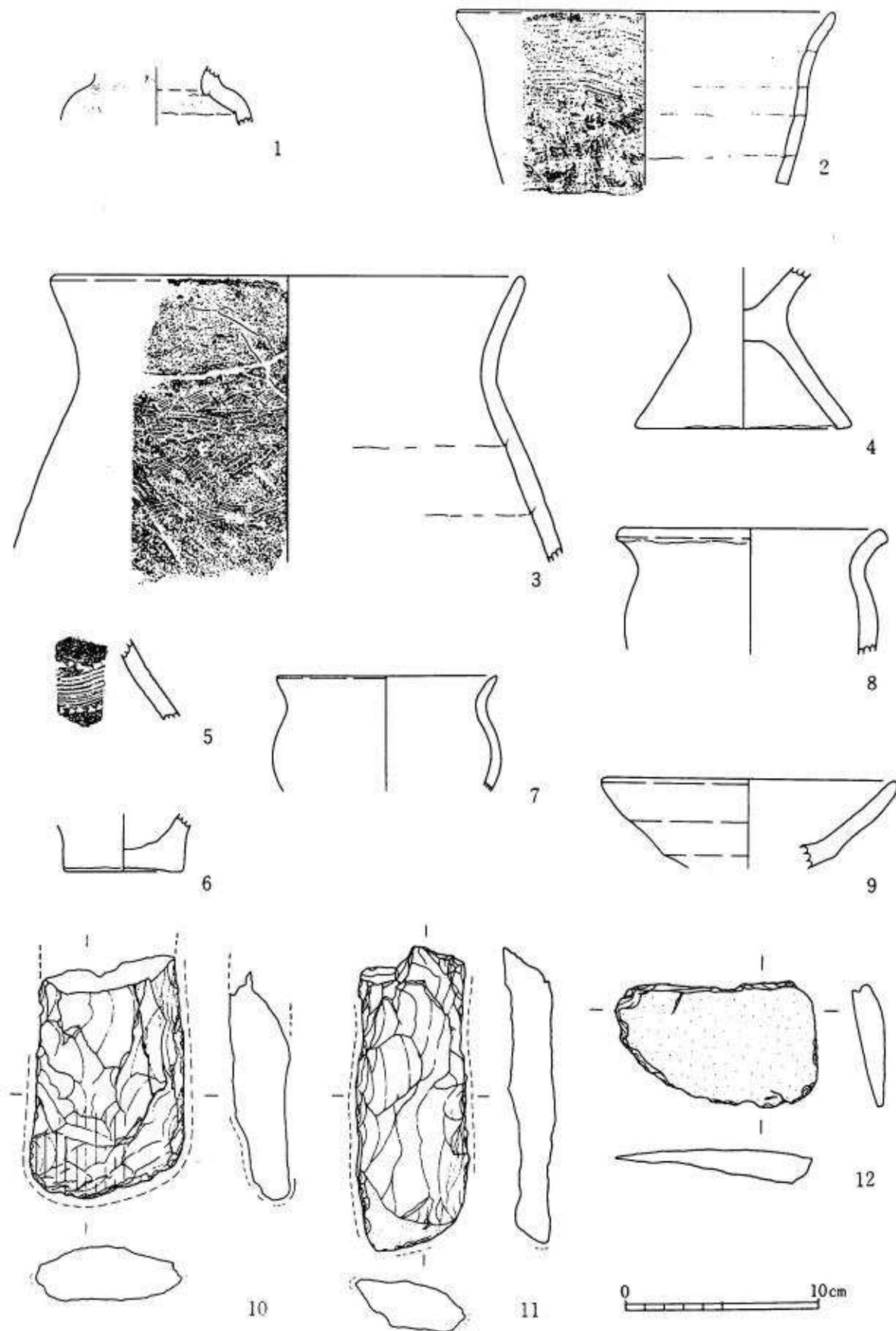


第25図 87号住居址

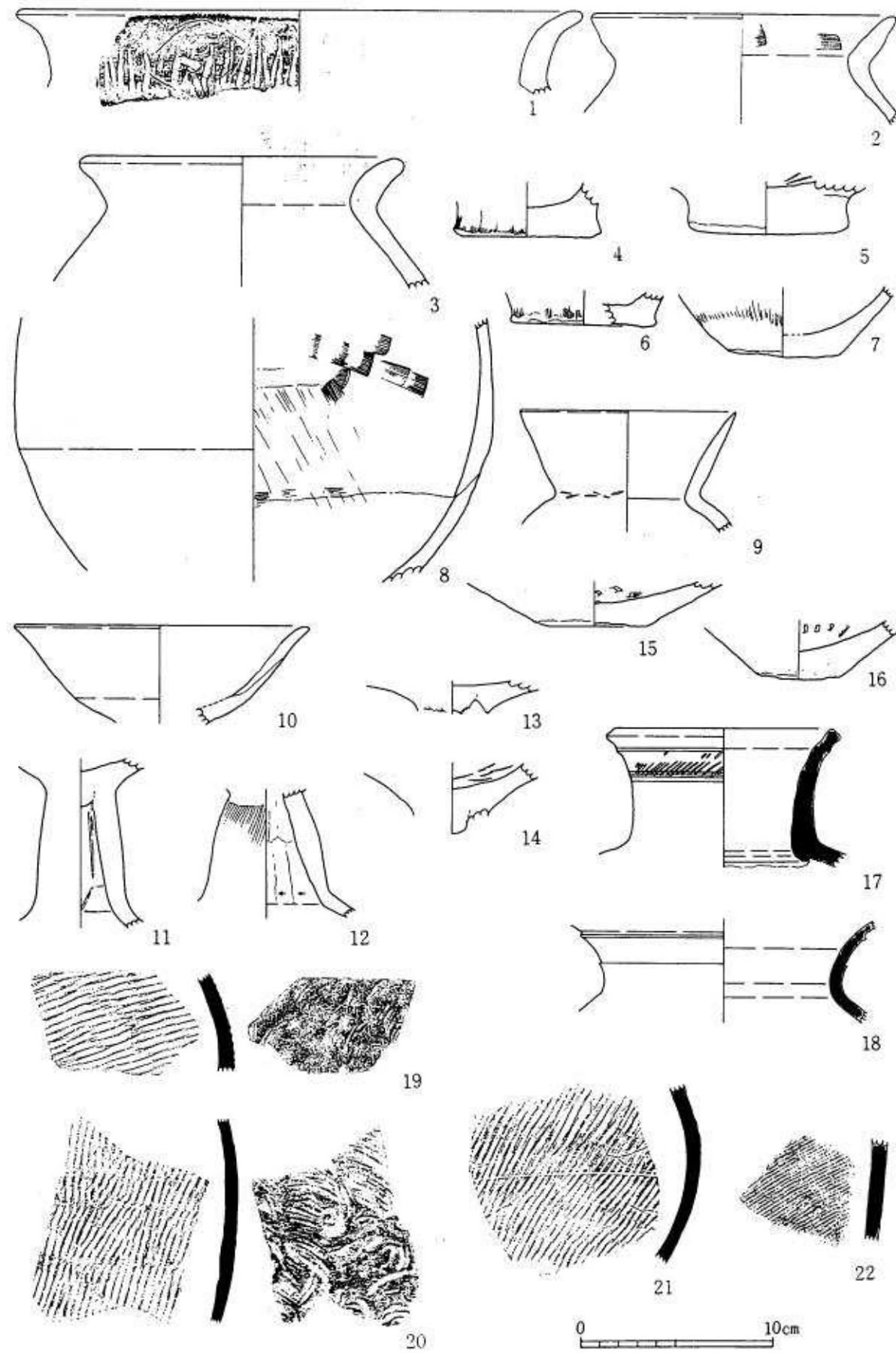


0 10cm

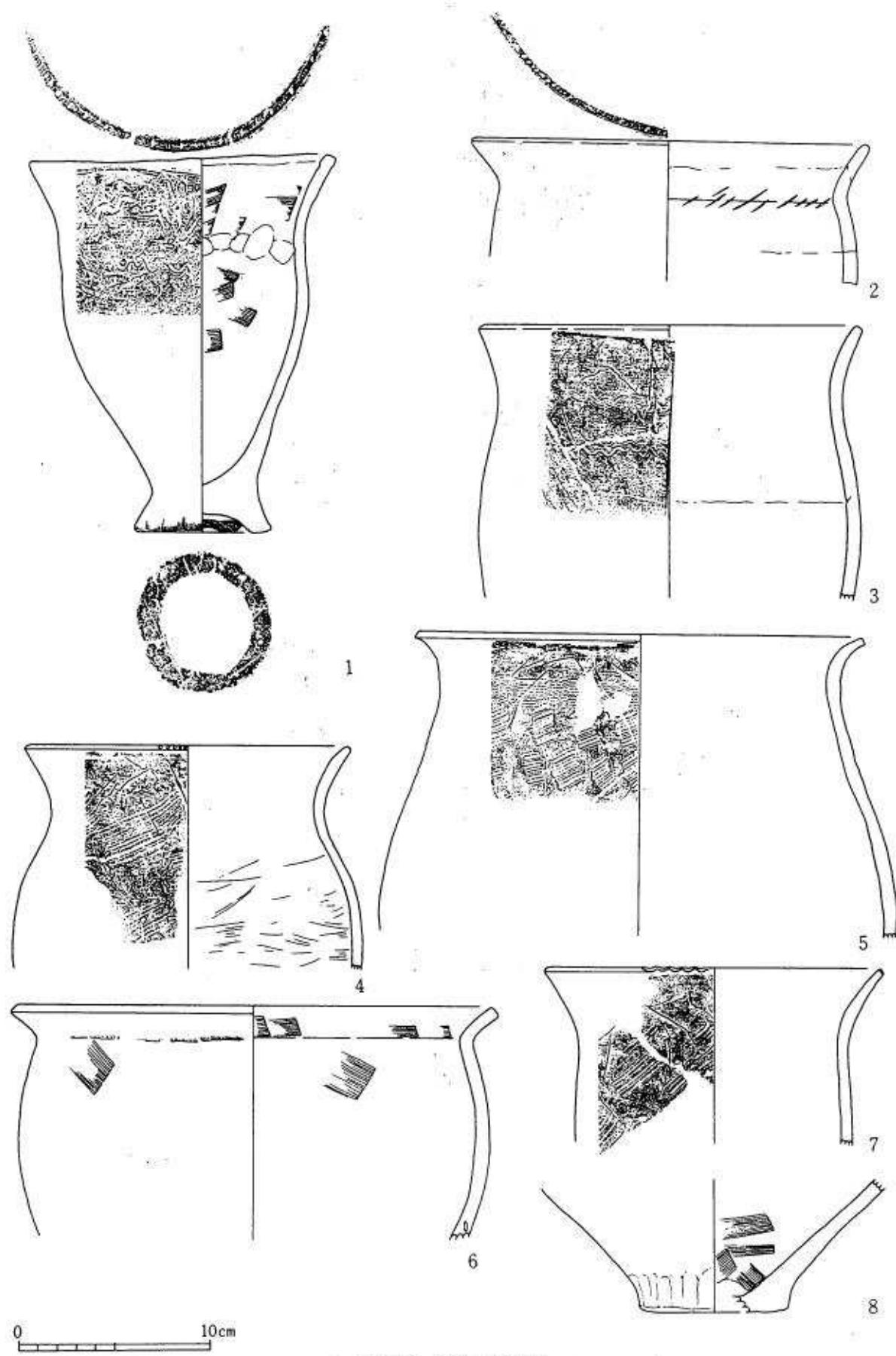
第26図 88号住居址



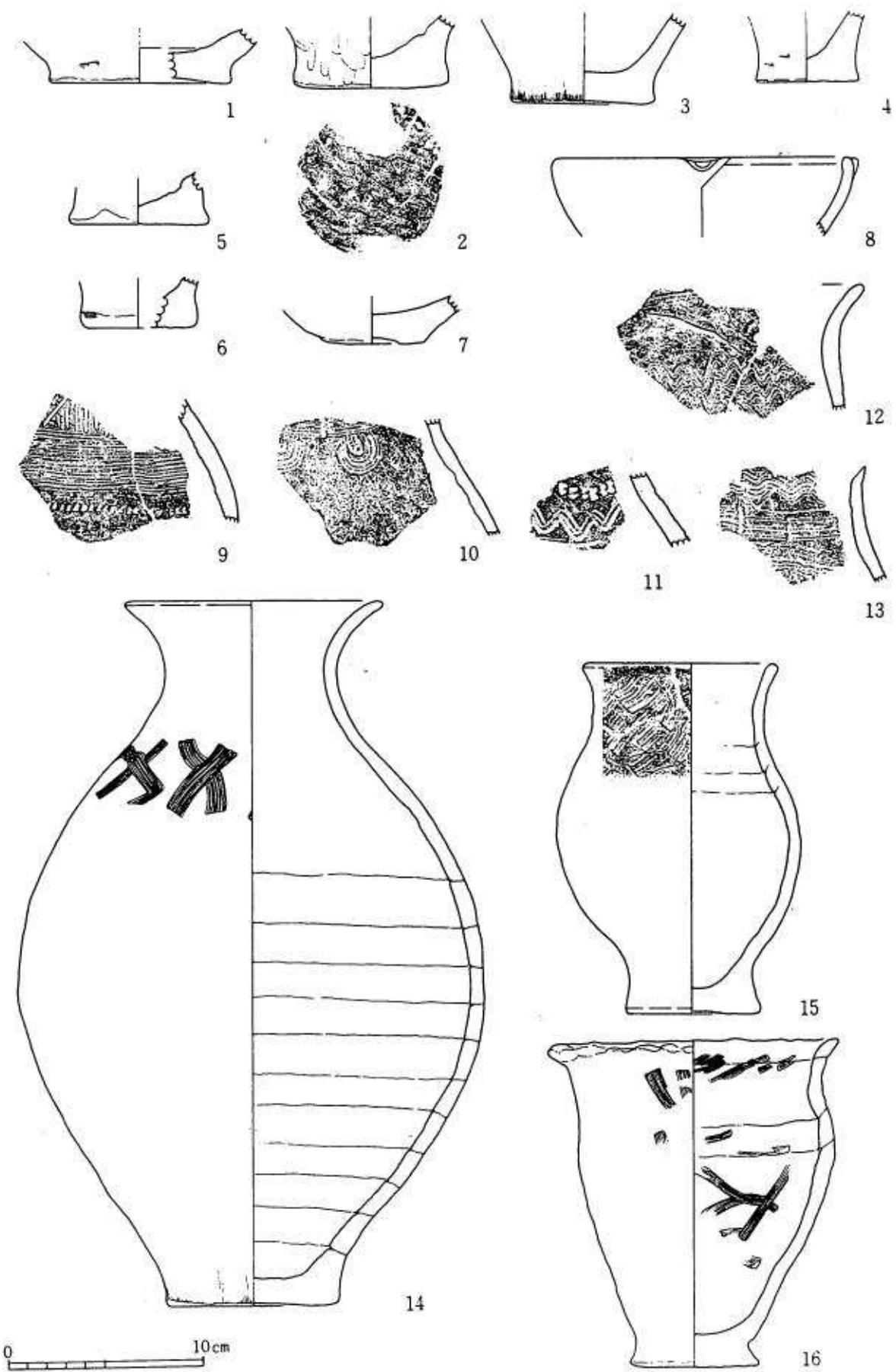
第27図 175号住居址



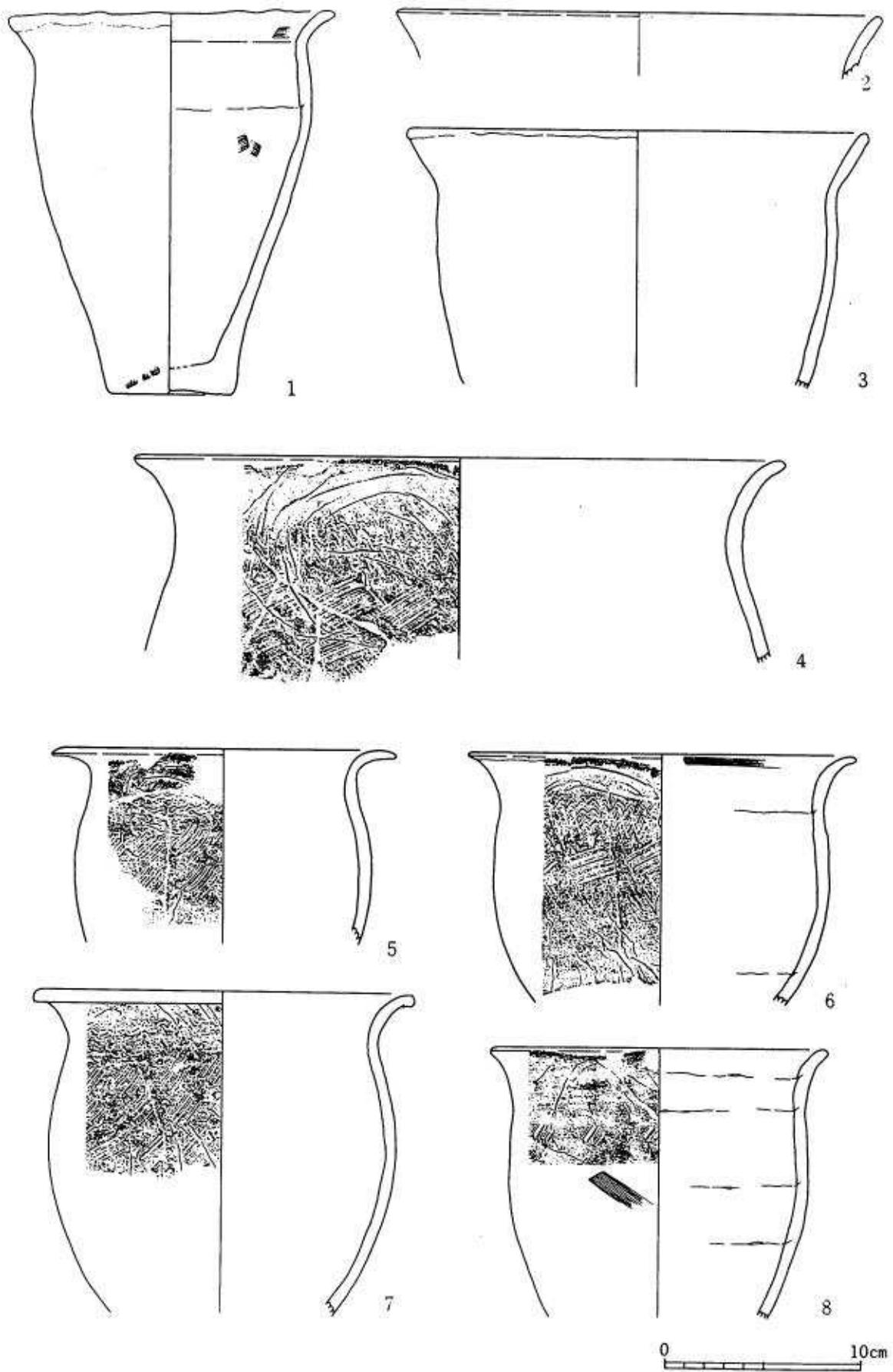
第28図 177号住居址



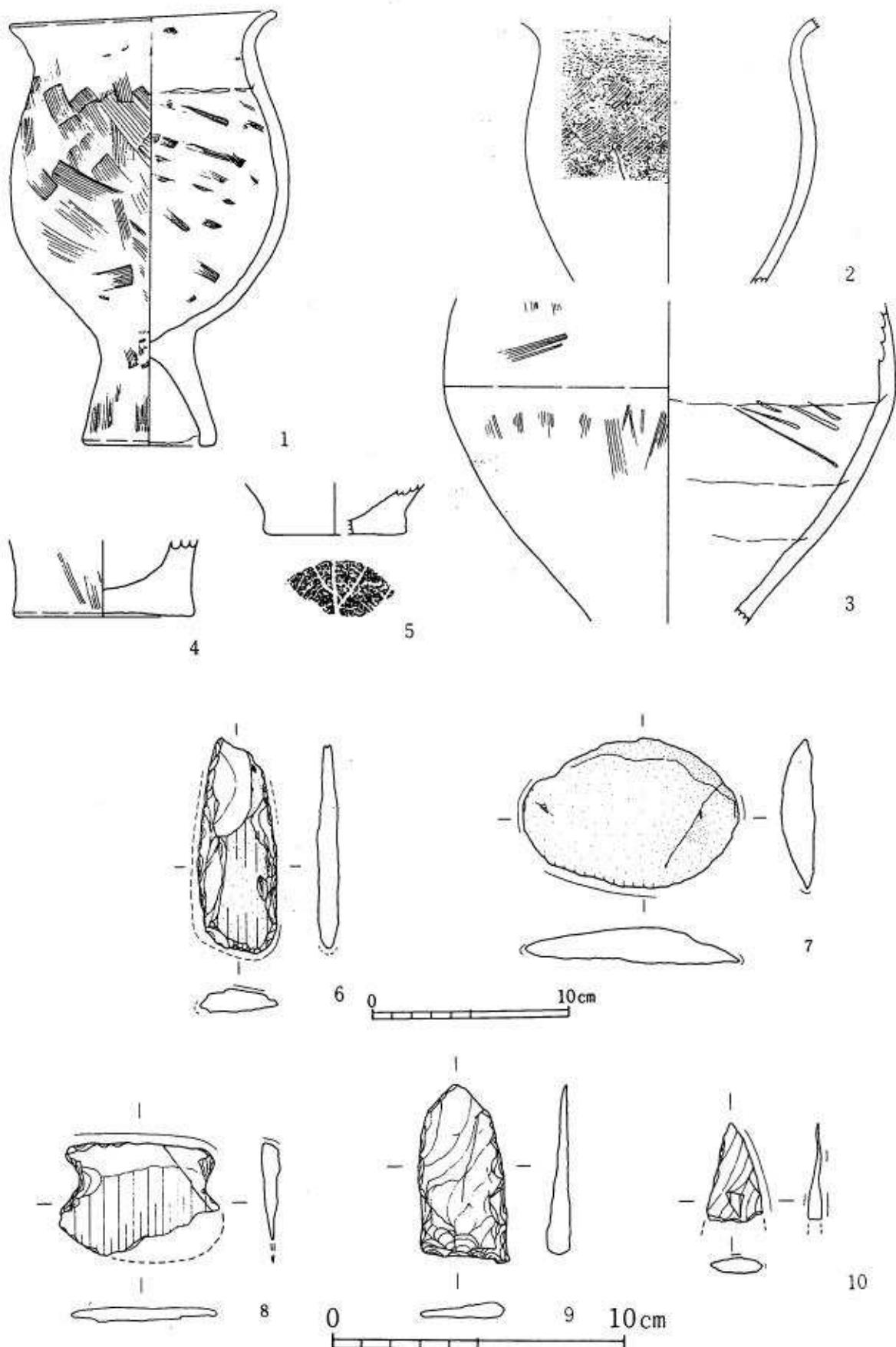
第29図 178号住居址



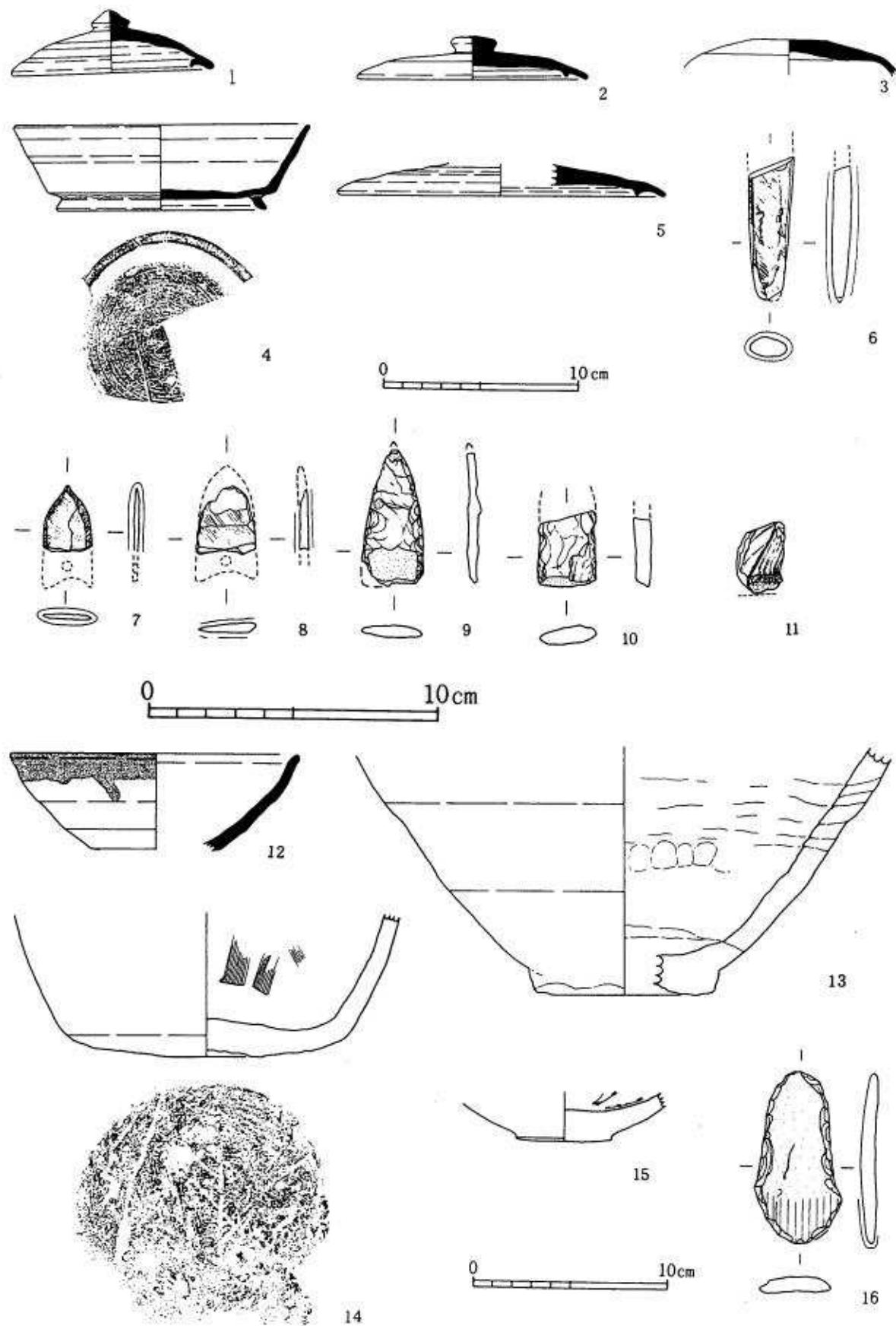
第30図 178 (1~13)・179 (14~16) 号住居址



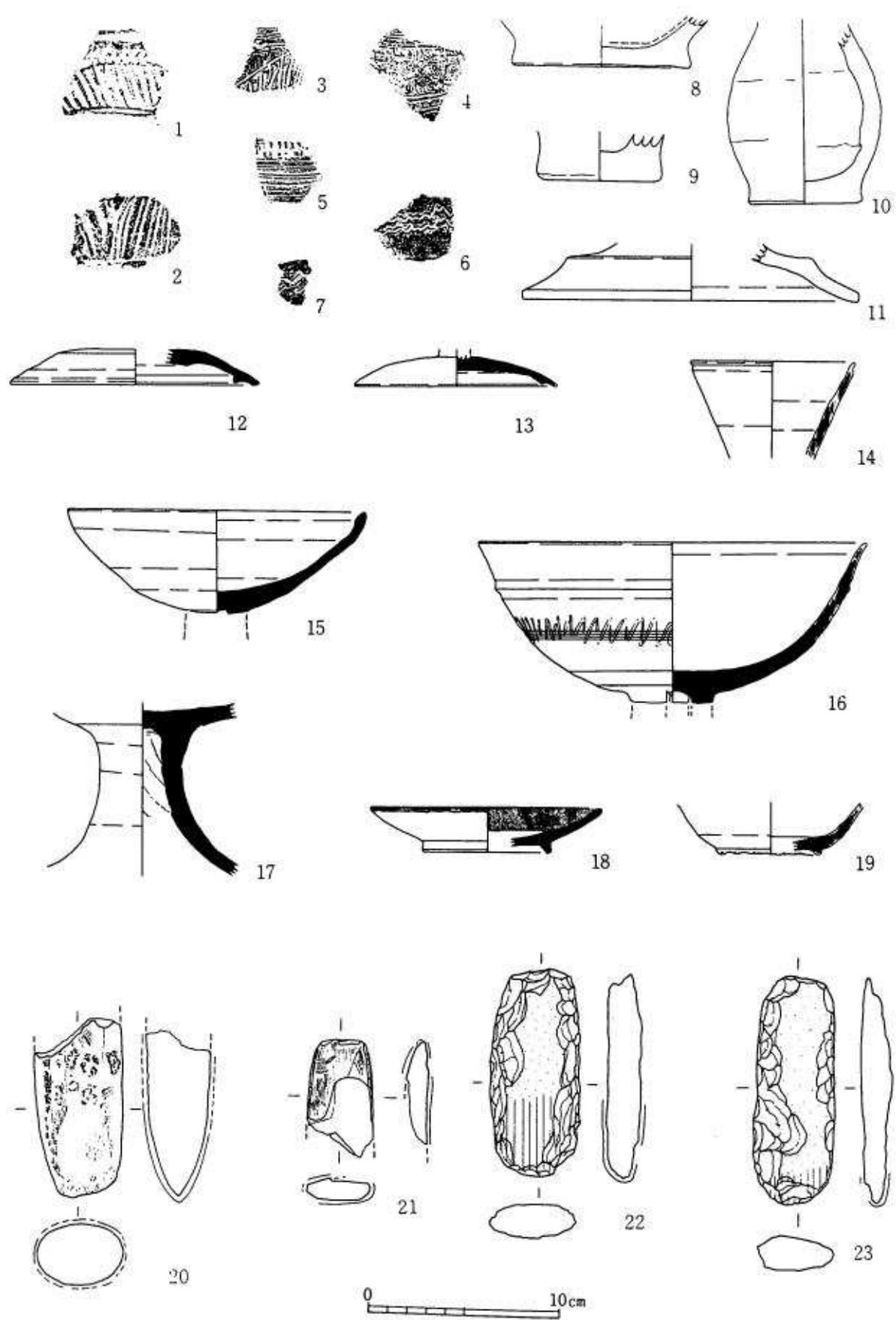
第31図 179号住居址



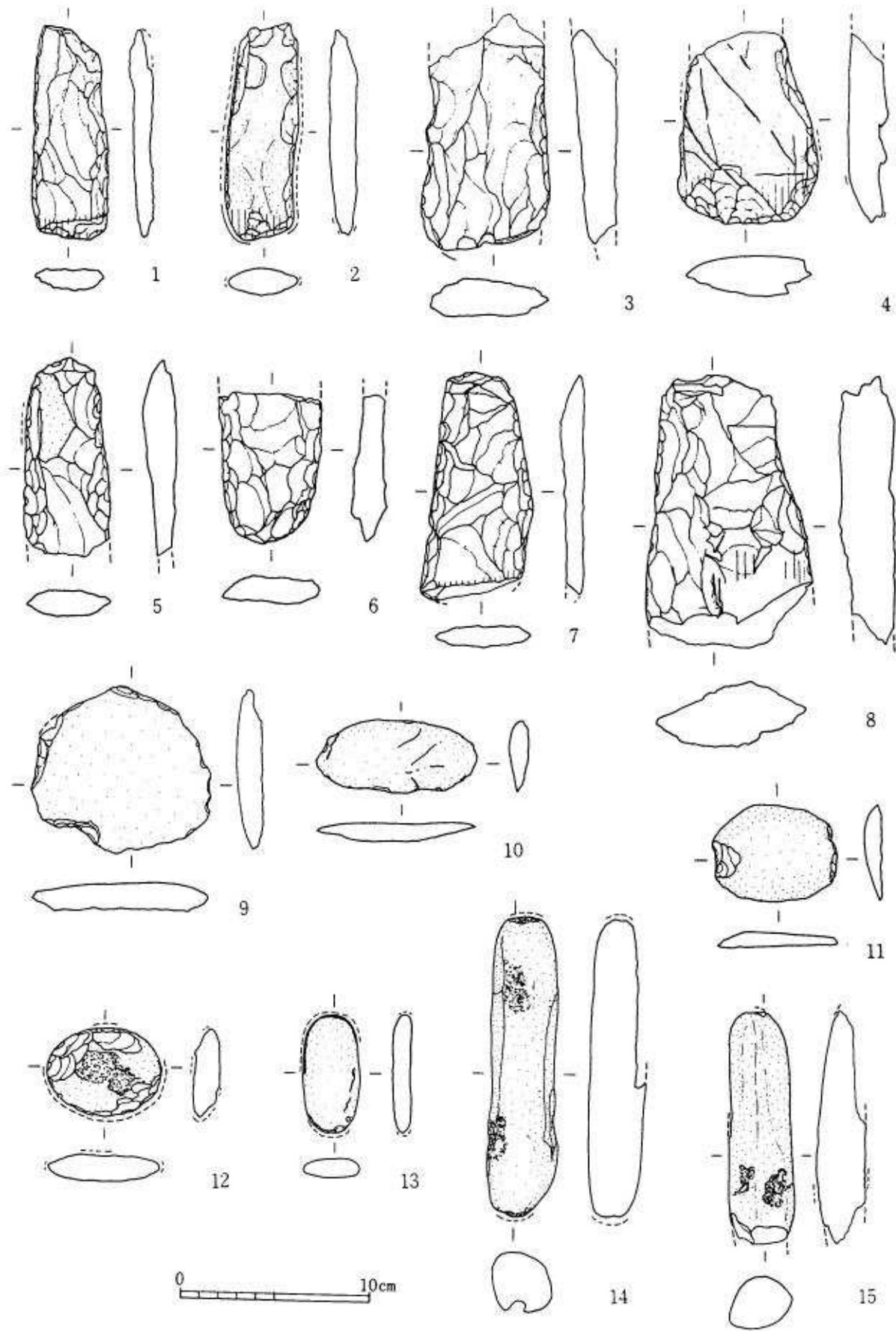
第32図 179号住居址



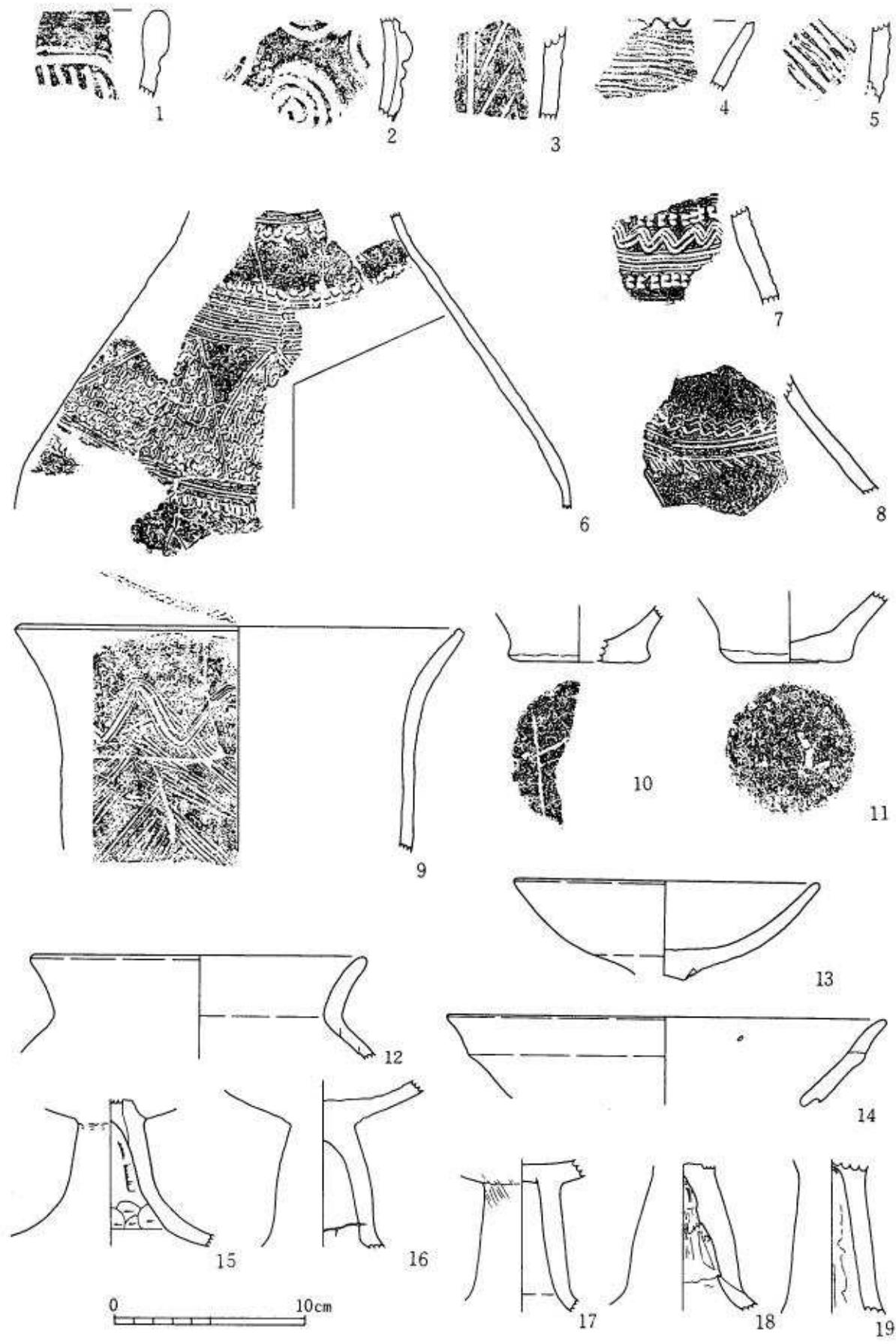
第33図 建物址24（1～3）・63（4）・64（5～10）・溝址35（11・12）・45（13・14）・47（15）
方形周溝墓2（16）



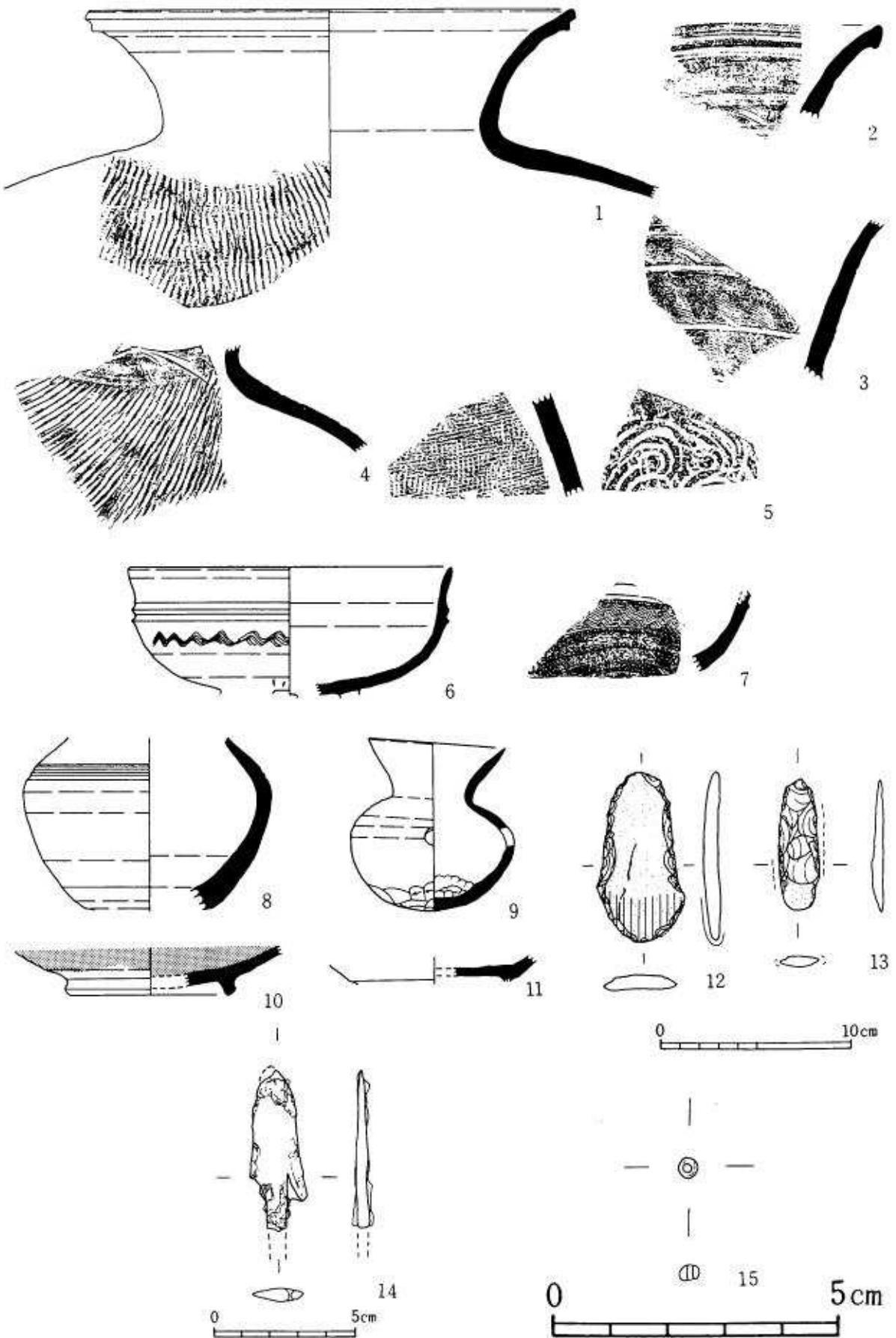
第34図 遺構外（新屋敷4742番地）



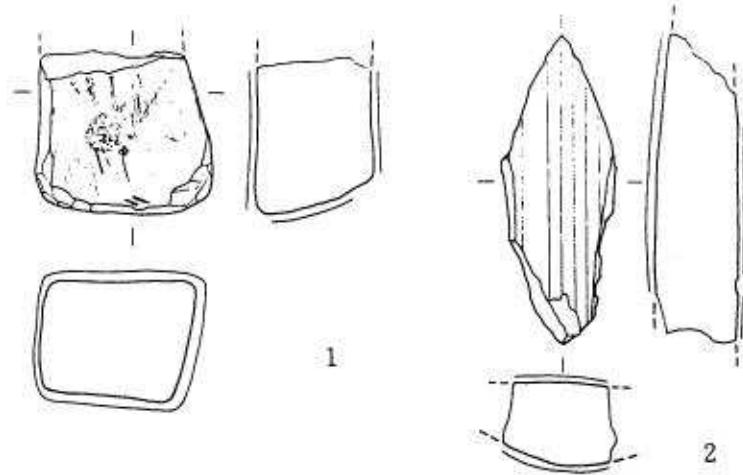
第35図 遺構外（新屋敷4742番地）



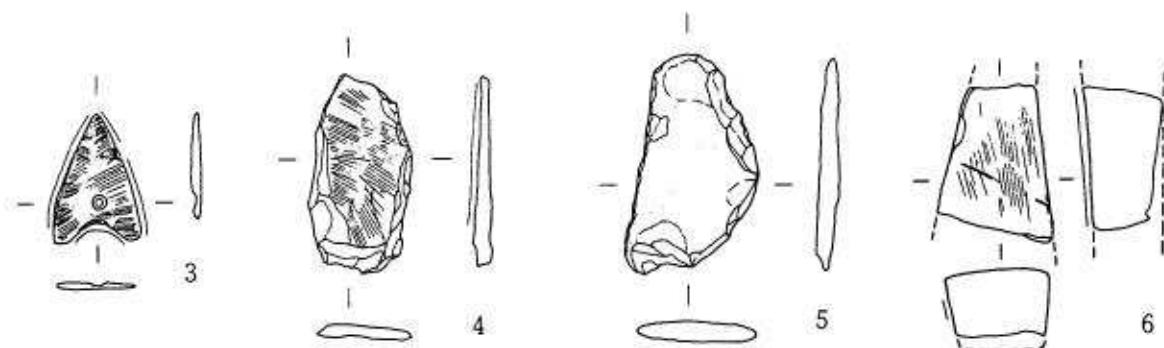
第36図 遺構外（新屋敷4741番地）



第37図 遺構外（新屋敷4741番地）



0 10cm



0 10cm

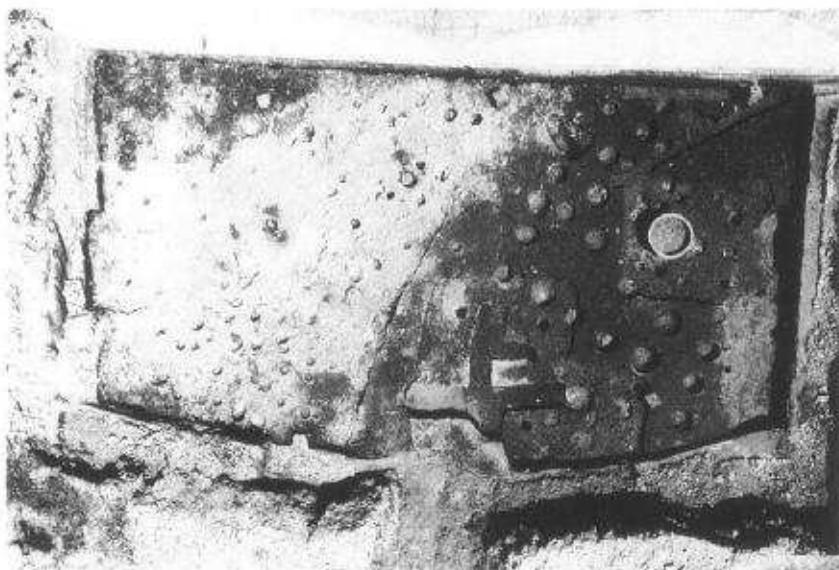
第38図 遺構外（新屋敷4741番地）

写 真 図 版

図版 1

4741番地

遺構全体

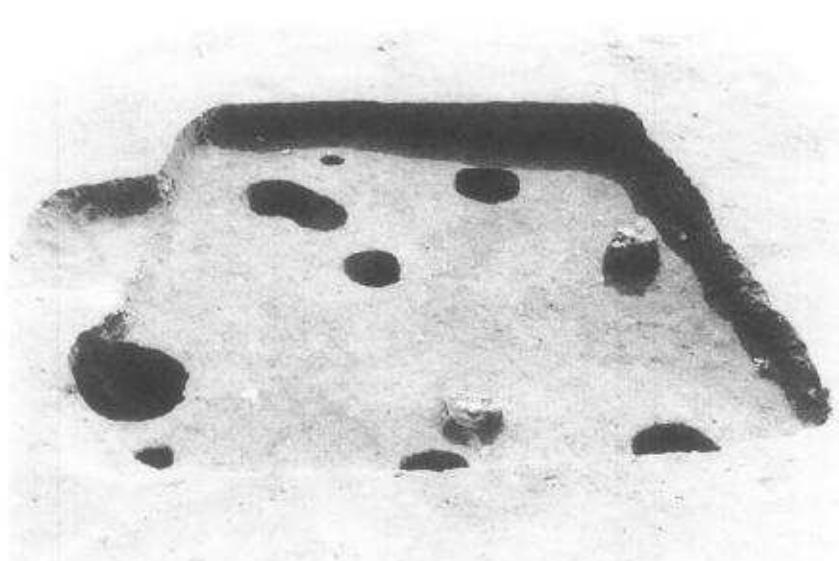


4742番地

遺構全体



72住居址

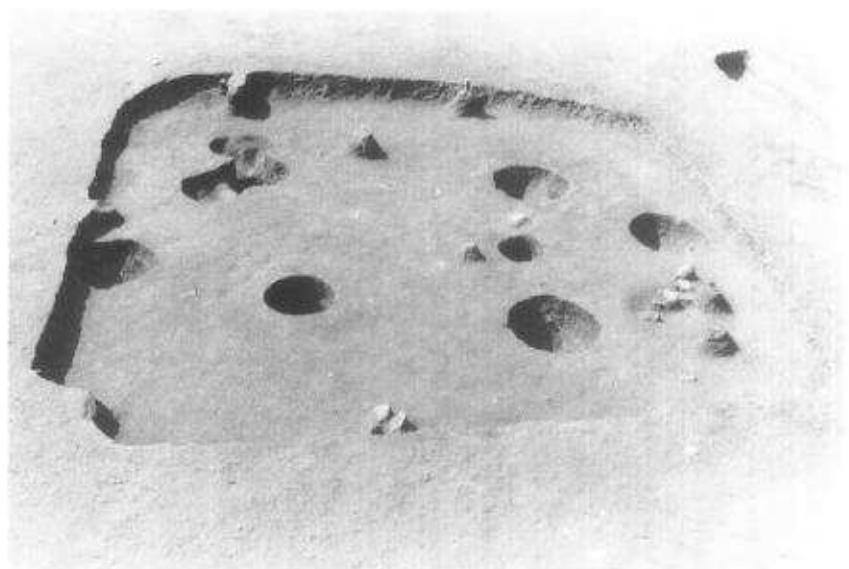


図版 2

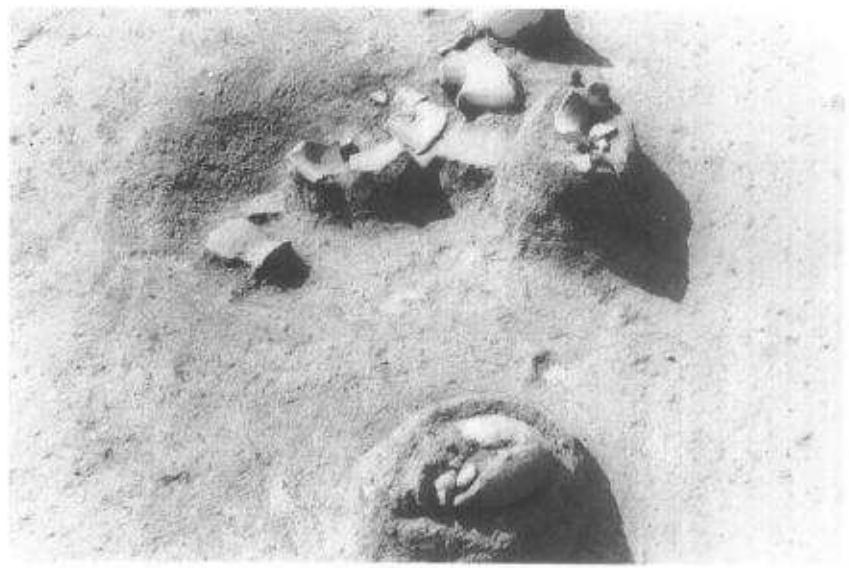
72号住居址
遺物出土状態



74号住居址



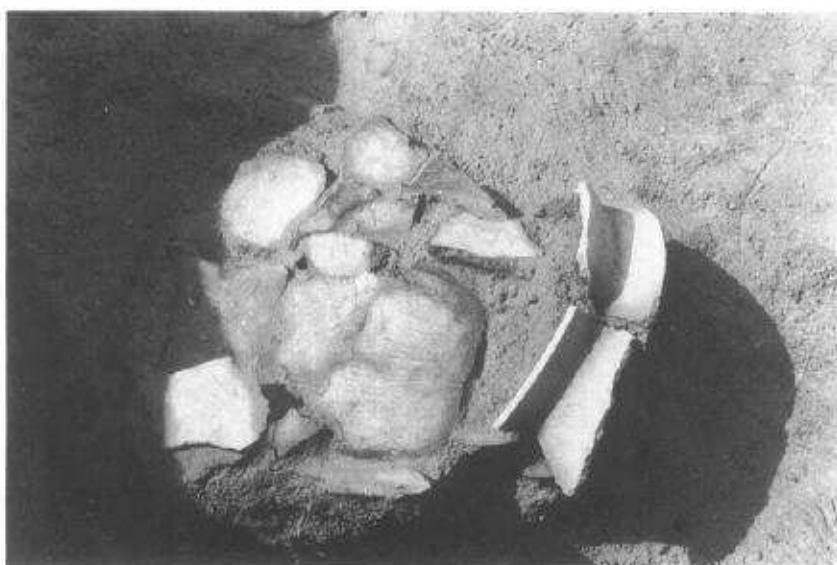
同上
遺物出土状態



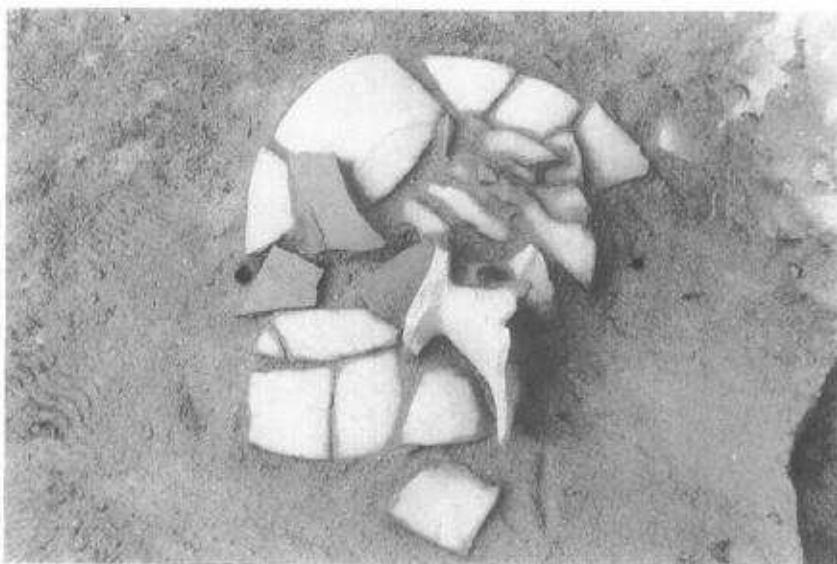
図版 3



76号住居址



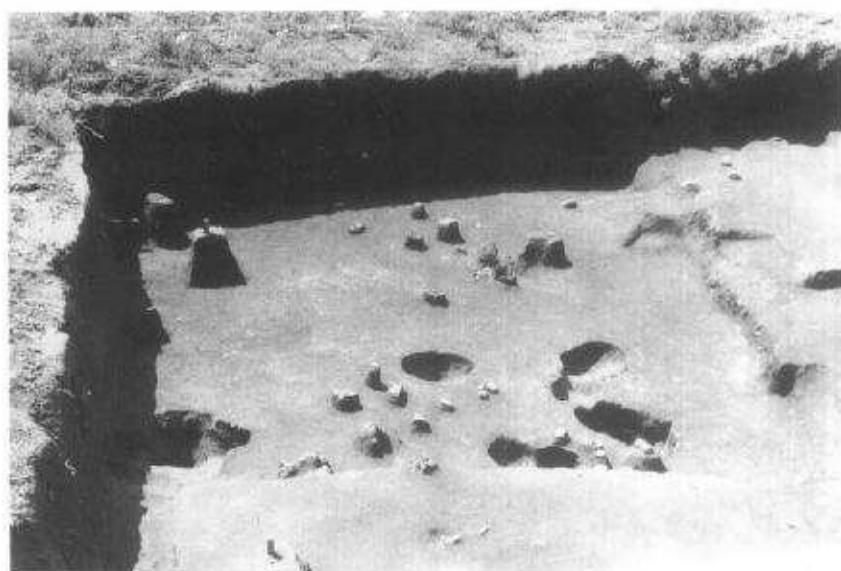
同上
遺物出土状態



同上

圖版 4

78号住居址

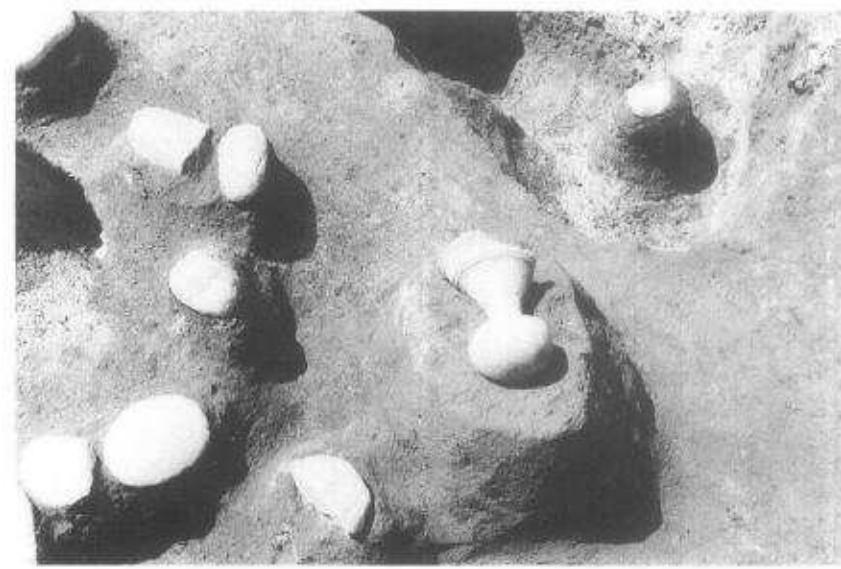


同上

遺物出土狀態



同上



図版 5



82号住居址



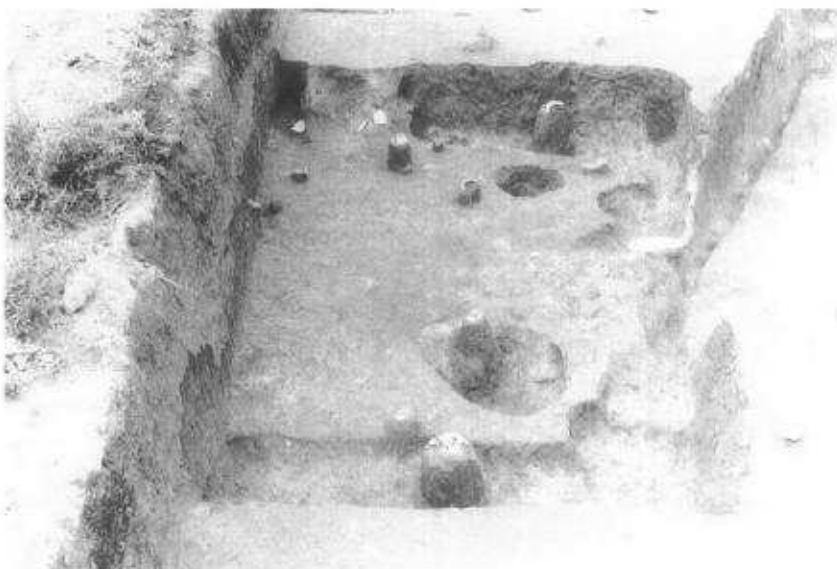
同上
カマド断面



同上
カマド左
灰溜

図版 6

84号住居址



同上

カマド断面



87号住居址

カマド断面



図版 7



87号住居址
カマド煙道



175号住居址



同上
遺物出土状態

図版 8

177号住居址



同上

遺物出土状態



178号住居址



図版 9



179号住居址



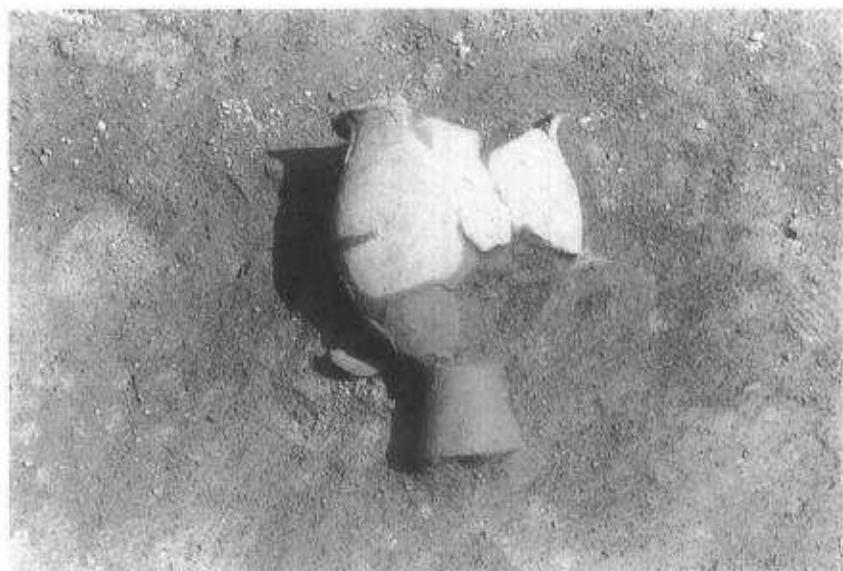
同上
炉



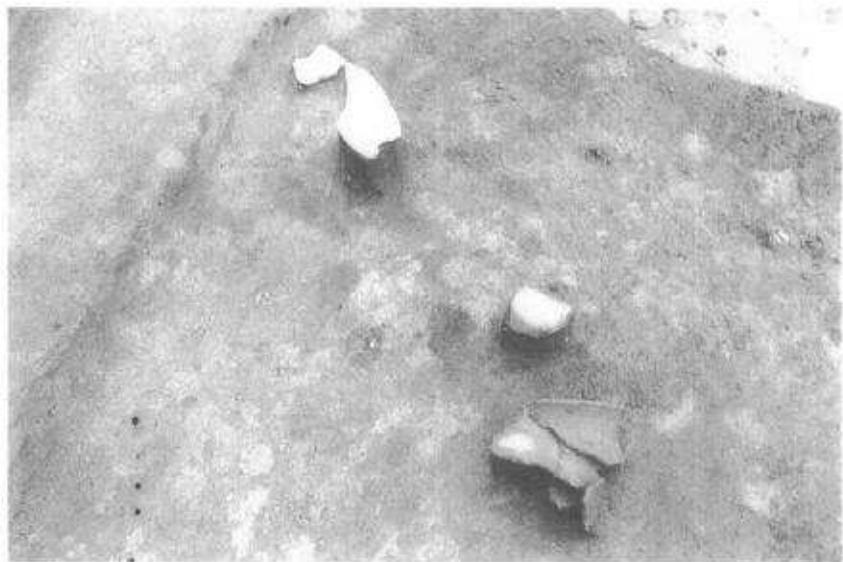
同上
遺物出土状態

図版10

179号住居址
遺物出土状態



同上



建物址63





建物址64



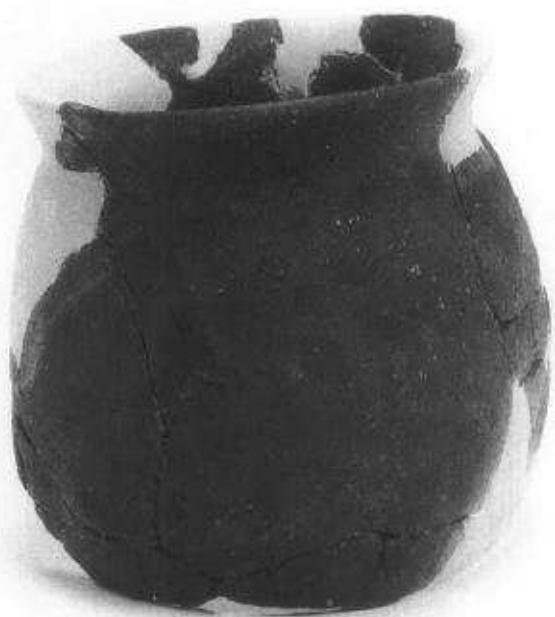
溝址35



4741番地
調査前

图版12

71号住居址



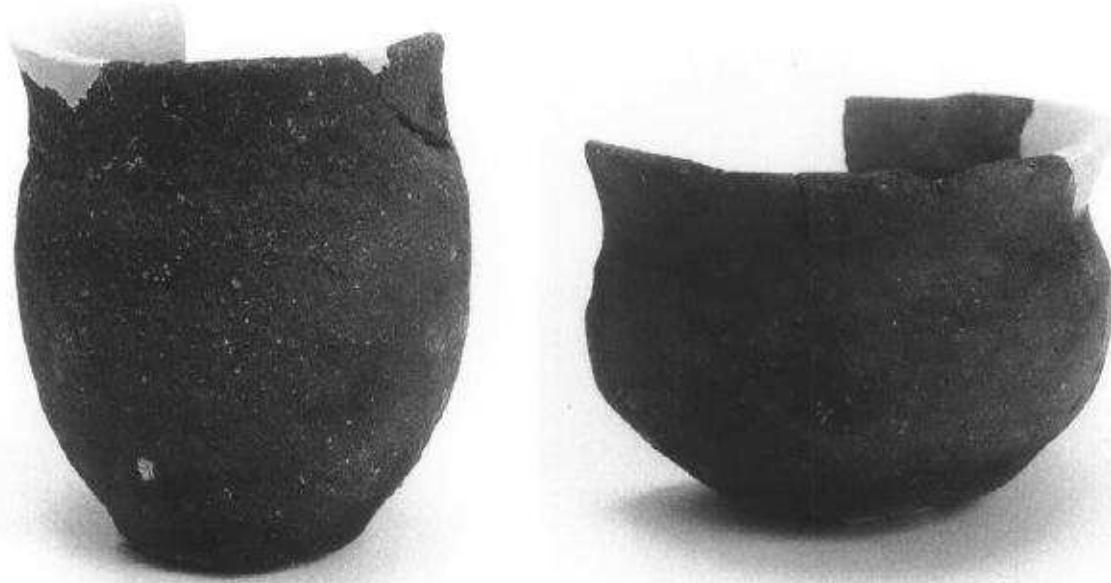
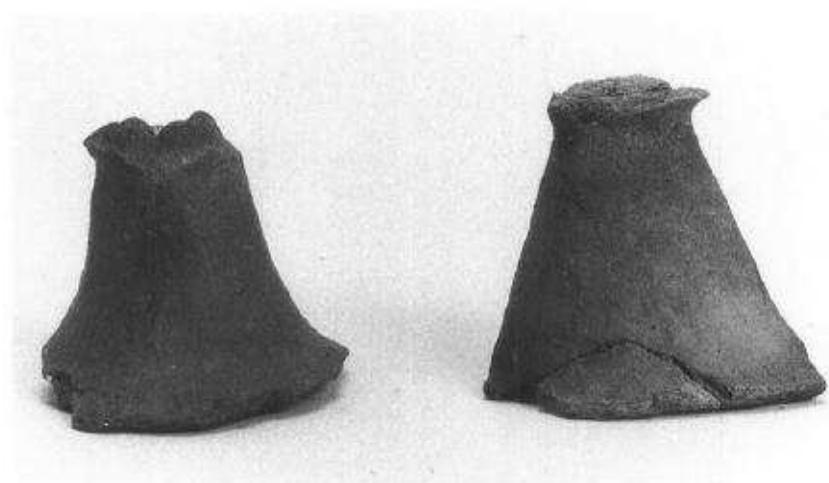
75号住居址



73号住居址



73号住居址



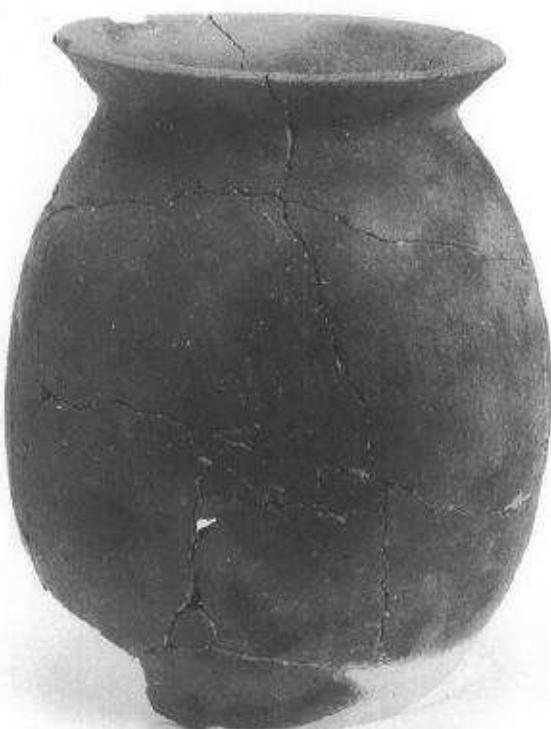
4点

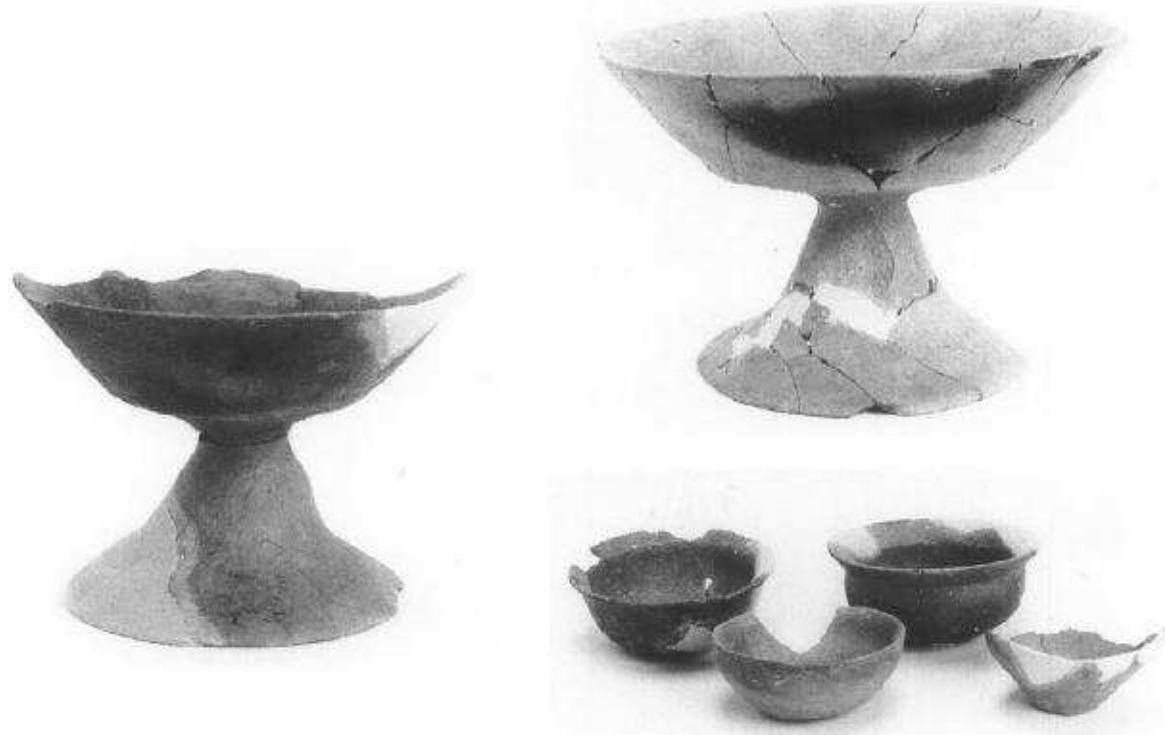
74号住居址





76号住居址





76号住居址



78号住居址

図版16



78号住居址



80号住居址



81号住居址

フィゴ羽口



82号住居址



84号住居址

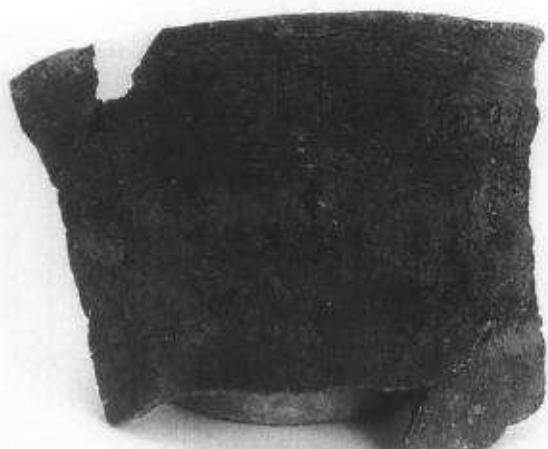
图版18



85号住居址



88号住居址



175号住居址

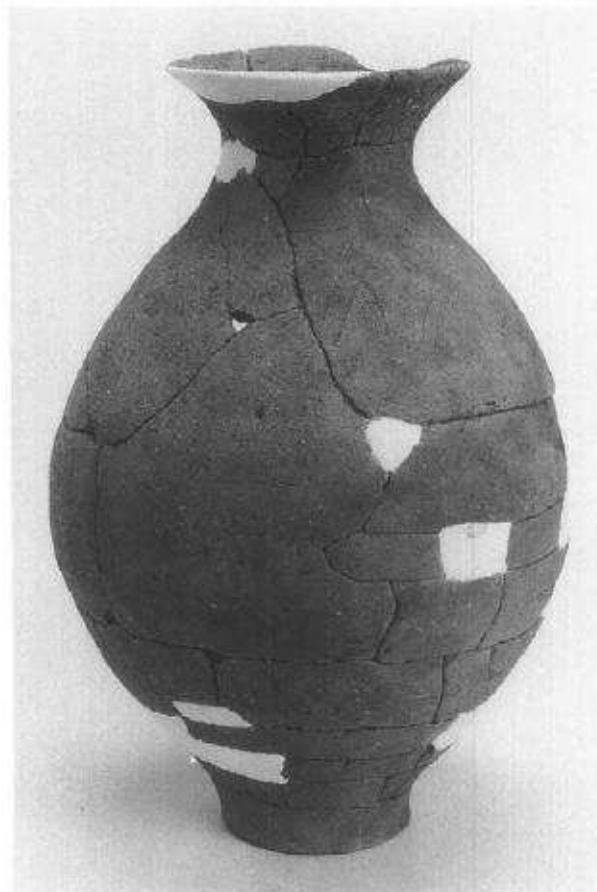


177号住居址





178号住居址



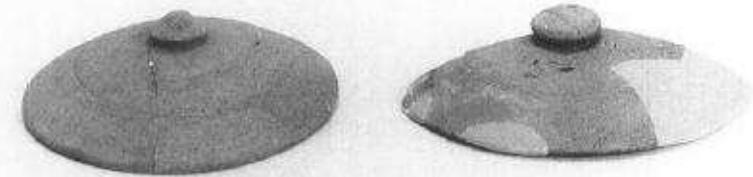
5点

179号住居址

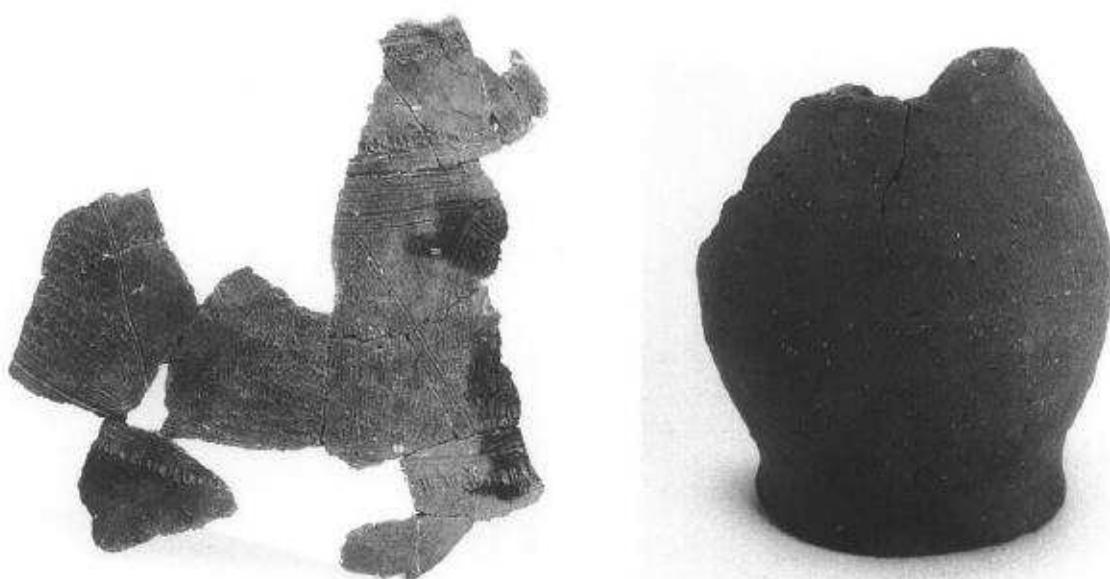


図版20

建物址24



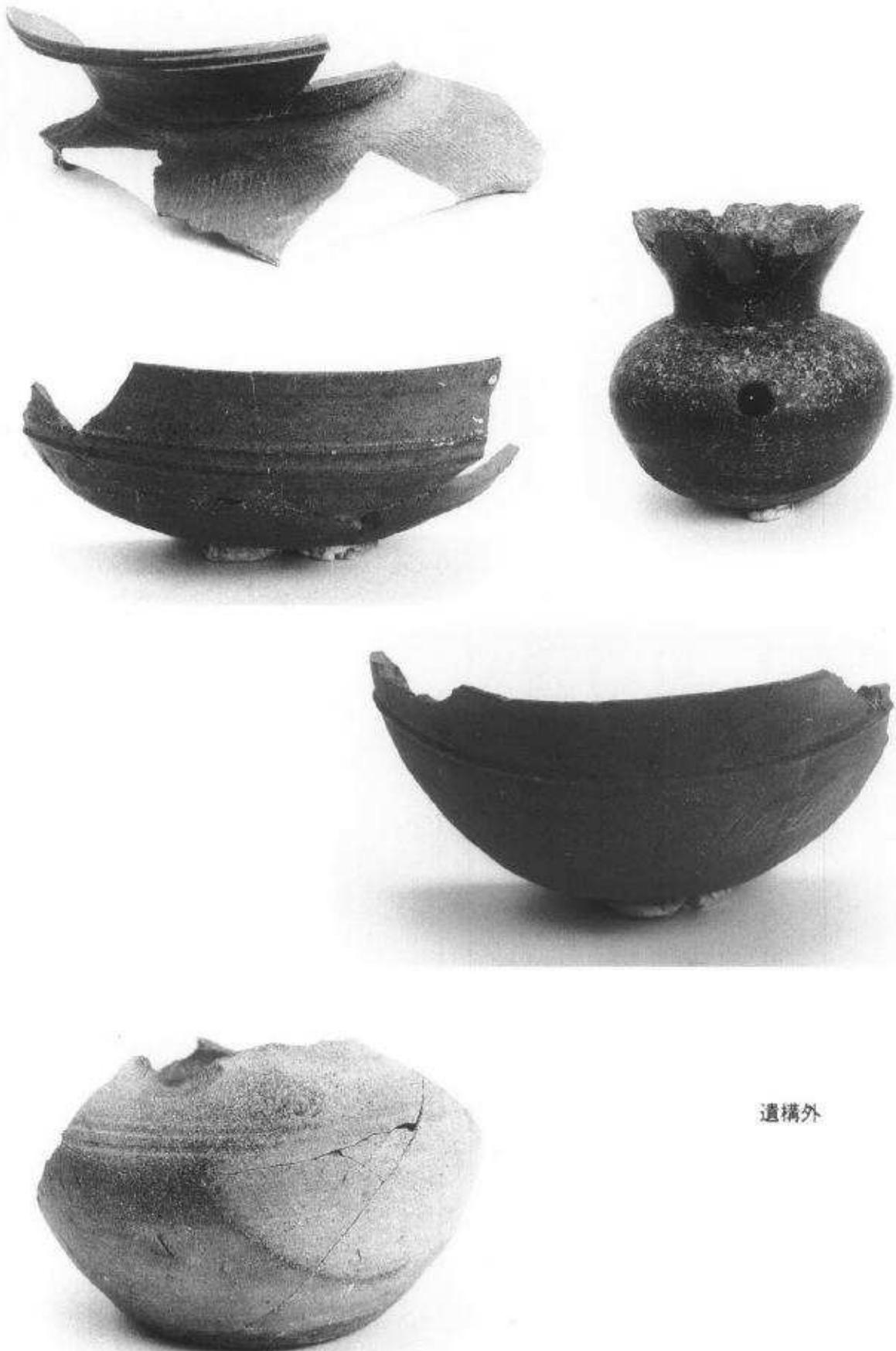
建物址63



3点

遺構外





遺構外

図版22





4741番地

調査スナップ



4742番地

調査スナップ



4741番地

埋土・表土剥き



ラジコンヘリ

空撮準備

報 告 書 抄 錄

| | | | | | | | |
|---------------|--|-----------------|--------------------------------------|-----------------------------|--|---------------------------|--------------|
| ふりがな | ごんがいせきぐん あらやしきいせき | | | | | | |
| 書名 | 恒川遺跡群 新屋敷遺跡 | | | | | | |
| 副書名 | 貸店舗建設に先立つ埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 | | | | | | |
| 巻次 | | | | | | | |
| シリーズ名 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | | | | | | | |
| 編著者名 | 伊藤尚志・佐々木嘉和 | | | | | | |
| 編集機関 | 長野県飯田市教育委員会 | | | | | | |
| 機関所在地 | 〒395-0002 長野県飯田市上郷飯沼3145番地 ☎0265-53-4545 | | | | | | |
| 発行年月日 | 1998年3月26日 | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード 市町村/遺跡番号 | 北緯 35° 31° 47.3" | 東緯 137° 52° 7.9" | 調査期間 昭和63年 6月1日~9月28日 平成8年 5月25日~7月12日 | 調査面積 727m ² | 調査原因 店舗建設 |
| 新屋敷遺跡 | いいだしがこうじ 飯田市座光寺 | | | | | | |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺跡 | | 主な遺物 | 特記事項 | |
| 新屋敷遺跡 | 集落址 | 弥生 古墳 平安 | 竪穴住居址 堀立柱建物址 溝址 方形周溝墓 土坑 | 22軒 3軒 5条 1基 1基 | 弥生時代土器 古墳時代土師器 須恵器 | るっぽ 羽口 | |

あら や しき い せき
新 屋 敷 遺 跡

調査報告書

1998年3月 発行

編集・発行 長野県飯田市上郷3145番地
長野県飯田市教育委員会
印 刷 飯 田 共 同 印 刷 (株)
